顧問
井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂校訂

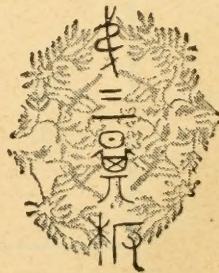
日本古典全集

うつぼ物語 第一

うつほ物語

第九

うつぼ物語第一目次

むかし式部大輔左大弁かけて清原の大君ありけり。御子ばらにおのこ子一人もたり。そのこゝろのさときことかぎりなし。ちゝはゝいとあやしき子なり。おひいでんやうをみむとて。ふみもよませずいひをしふることもなくておほしたつるに。としにもあはずたけたかくこゝろかしこし。七歳になる年。父が高麗人にあふに。この七さいなる子。ちゝをもどきてこまうどとふみをつくりかはしければ。おほやけきこしめして。あやしうめづらしきことなり。いかでこゝろみんとおぼすほどに。十二歳にてかうぶりしつ。[illegible]

宇津保物語　第一

俊蔭

昔、式部大輔左大辨兼けて、清原の1王2ありけり、皇女腹に男子一人持たり。その子心の敏き事かぎりなし。父母、「いと怪しき子なり。生ひ3出でんやうを見む」とて、4文も讀ませず、言ひ教ふる事もなくておほし立つるに、年6にもあはず、たけ高く心賢し。七7歳になる年、父が高麗人に會ふ8に、この七歳9なる子、父をもどきて、高麗人と文を作りかはしければ、公聞召して、怪しう珍らしき事なり、いかで試みんと思すほどに、拾二歳にて冠しつ。帝、「有り難き10才なり。年の若きほどに試みむ」と思して、唐土に三度渡れる博士、11中臣12の門人と云ふを召して、難き題を出ださせて、試みさせ給ふ。度々登りたる學生の13男ども、才ある男ども、14まどひをして、15一行の文も奉らぬに、俊蔭は、吏部の文をいとになく作り出だして奉れる時に、16一天下の人皆言ひあざみて、その度俊蔭一人進士に17なりぬ。又の年同じ18博士を召して、秀才の題を賜ふ。校書殿にて日高19く題を賜20てかた21く問はる。俊蔭22心にしたがひて答ふる

校異 1 〔国〕大納言。2 〔イ〕四字ナシ。3 〔イ〕立た。4 〔イ〕歟。5 〔イ〕ナシ。6 〔イ〕ナシ。7 〔イ〕さい。8 〔イ〕時。9 〔イ〕にアリ。10 〔イ〕事かな。11 〔イ〕成富、〔国〕考異三原。12 〔イ〕ナシ。13 〔イ〕三字ナシ。14 〔イ〕手アリ。15 〔イ〕を。16 〔イ〕ナシ。17 〔国〕考異れり。18 〔イ〕くアリ。19 〔イ〕さ、〔イ〕ナシ。20 〔イ〕ひアリ。21 〔国〕ぐ。22 〔国〕問ふ。

に、え1ざる事な2し。同じく作れる對策の、思ふまゝに答へたる對策の文ども、面白く興あり3て、帝驚かせ給ひて、すなはち式部丞になされぬ、そのほど、俊蔭がかたちの清らに才の賢き事、更に譬ふべき方なし。父母眼だに二つありと思ふほどに、俊蔭十4六歳になる年、唐土5舟出だし立て6らる。此度はことに才賢き人をえらびて大使7副使と召すに、俊蔭召されぬ。父母悲し8む事更に譬ふべき方なし。一生に9ひとりある子なり、かたち身の才10人に勝れたり、朝に見て夕べ11の遲なはるほどだに紅の涙を落すに、遙かなるほどに、相見ん事の難き途に出で立つ日、父母俊蔭悲しび思ひやるべし。三人の人額を集へて、13涙を落して、出で立ちて、遂に船に乘りぬ。唐土に到らむとするほどに、逆の風吹きて、三つある船二つは害はれぬ。多くの人沈みぬる中に、俊蔭が船は波斯國に放たれぬ。その國の渚にうち寄せられて、頼なく悲しきに、涙を流して、七歳より俊蔭が仕うまつる本尊現れ給へ」と、觀音の本誓を念じ奉るに、鳥獸だに14見えぬ渚に、鞍置きたる15あをき馬出で來て躍りあ16りき17て嘶く。俊蔭七度伏し拜むに、馬走り寄ると思ふほどに、ふと18首に乘せて、飛びに飛びて、清く凉しき19林の栴檀の陰に、虎の皮を敷きて、三人の20並び居て、琴を彈き遊ぶ所に下し置きて、馬は消え失せぬ。

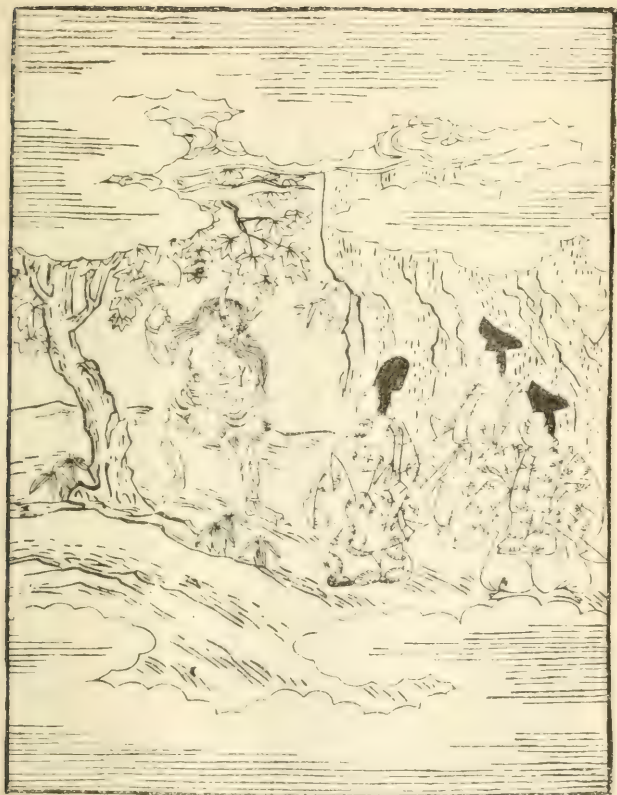
校異 1〔イ〕せぬ。2〔反〕く。3〔イ〕ナシ。4〔イ〕四。5〔イ〕に、〔反考異〕に舟。6〔イ〕見。7〔イ〕別。8〔イ〕ふ。9〔イ〕お。10〔イ〕だ。11〔反考異〕に。12〔イ〕るアリ。13〔イ〕血のアリ。14〔イ〕もアリ。15〔イ〕しろ。16〔イ〕が。17〔反〕ナシ。18〔反考異〕鞍。19〔イ〕二字ナシ。20〔イ〕人アリ。

1（畫詞　此所は、三人の人並び居て、琴ひき遊ぶ。）

俊蔭林の下に立てり。三人の人問ひて曰く、「彼は3何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ4、「日本5の王の使清原の俊蔭なり。6ありしやうはかう〳〵」と云ふ時に、三人7、「哀れ人にこそあなれ。暫し宿さむかし」と云ひて、並べる木の蔭に同じ8き皮を敷きて9居ぬ。俊蔭もとの國なりし時も、心に入れし物は琴なりしを、この10三人の11たゞ琴をのみ弾く、されば、添ひ12居て習ふに、13一つの手残さず14習ひとりつ。花の露、紅葉の雫をな15がめてあり經る16に、あくる年の春より開けば、此林より西に、木17の倒る斧の響遥かに聞ゆ。その時に俊蔭思ふ、18猶は遥かなる19を轉20は高21し。音高かるべき木かなと思ひて、琴を彈き交を22鎮してなほ聞くに、三年この木の聲絶えず。年月の往くまゝに、己が彈く琴の聲に響通へり。23俊蔭思ふ、24本に25こゝに四つの隅四つの面を見廻らすに、此所より離れて山見えず、天地26一つに見ゆるまで又世界なき27よ、琴の28手に通へる響のするは如何なるぞ、この木のあらむ所尋ね29て、30いかで琴31一つ造るばかり得むと思ひて、俊蔭三人の人に暇を乞ひて、斧の32聲の聞ゆる方に、33疾き足を出だし34て、こはき力を勵み

校異　1以下十六字畫詞ノ句[國]ニヨリテ補フ。2[國]考異び居る。3[イ]なに。4[イ]るアリ。5[イ]國、[國]の國。6[イ]二字ナシ。7[イ]の人アリ。8[國]考異ナシ。9[イ]するつ。10[イ]二。11[イ]人アリ。12[イ]給う。13[イ]をと。14[イ]二字ナシ。15[イ]ナシ。16[イ]ナシ。17[イ]を。18[イ]に。19[イ]ナシ、[國]音な。20[イ]の。21[イ]く。22[イ]調。23[イ]其時アリ。24[イ]ほど、[國]やう。25[イ]そこ。26[イ]をと。27[イ]に。28[イ]音。29[イ]行きアリ。30三字ナシ。31[イ]を。32[イ]音。33[イ]二字ナシ。34[國]ナシ。

て、海河1峰谷を越えて、その年暮れぬ。又あくる年2も暮れぬ。三年といふ年の3春、大きなる峰に登りて見廻らせば、頂天につきて嶮しき山遙かに見ゆ。俊蔭いさ4をしき5心6、早き足を出だして行くに、から7くしてその山に到りて見渡せば、千丈の8谷のに底根をさして、末は9空につき10、枝は隣の國にさせる桐の木を倒して割り11木造る者あり。頭の髪を見れば剣を立てたるが如し、12(面を見れば火むら13を14燒ける15が如16し、)足手を見れば鋤鍬の如17し、眼を見れば金椀の如く18きらめきて、いみじき19女、20翁、子ども、孫など率て、頭を集へて木を切りこなす。俊蔭21定めて知りつ、我身は此山に亡ぼしつと思ふものから、22はしたなき心をなして、阿修羅の中にまじりぬ。阿修羅大きに驚きて曰く、「汝は23何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ24、「日本25國王の使ひ清原の俊蔭、26(この27山を尋ねん事三年になりぬ。今日をも28つてなん)この山を尋ねえたる29」30。阿修羅怒れるかたちを出だして、「汝何によりてか阿修羅の万劫の罪31の半ば過ぐるまで、虎32狼蟲けらといへども、人のけぢかきをあたりに寄せず、山のほとりにか33ゝりくる罰は阿修羅の

校異 1[イ]嶺谷。2[イ]狗。3[イ]秋。4[イ]ま、[イ]ふ。5[イ]のアリ。6[イ]してアリ。7[国]うじ。8[イ]こけ。9[イ]雲、[イ]雲井。10[因]考異てアリ。11[イ]樂をアリ。12以下十九字[イ]ニヨリテ補フ。13[国]ナシ。14イたゆ、[因]燃ゆ、[国]校異たつ。15[玉]ナシ。16[イ]く。17イにアリ。18[イ]にアリ。19[因]嫗。20[イ]二字幼な兒、[因]校異翁幼き子、[因]考異幼き子。21[イ]六字ナシ。22[イ]いかしき、[イ]いはきなき。23[国]何。24[イ]るアリ。25[玉]のアリ。26以下二十二字[イ]ニヨリテ補フ。27[国]木切る者、[因]考異者。28[イ]ナシ。29[イ]なりアリ。30[国]といふアリ。31[因]考異ナシ。32[イ]おほかめ。33[イ]け。

食1とせよと2あてられたり。3如何に思ひてか人の身を受けて、汝が此所に来たれる。速かにその由を申せ」と、眼を車の輪の如4く見5くるべかして、6歯を剣の如く喰ひ出だして怒る。俊蔭涙を流して答ふ、あなかしこ此山を尋ぬる事、烈しき7嚴火なら出づるまで獣の烈しき中を分け出づる時は、8火ならは炎熱9て剣10膠を貫き悪をふく11なる毒12蛇に向ひて、もとの國よりこの國に到り13、住みし林よりこの山を尋ね14、父母が手を別れし15より今日までの事を答ふ。阿修羅、「我ら昔の犯し16の17古里により18て、悪しき身を受けたり。しかあれば、忍辱の心を思ふともがらにあらず。しかはあれど19も、日本の國に忍辱の父母20ありと21申すによりて、四十人の子どものかなしく、千人の眷属のかなしきによりて、汝が22命をゆるし23給ふ。24汝速かに罷り帰りて、阿修羅の爲めに大般若を書きて供養せよ。汝日25本の父母に向ふべき便りを與へむ」といふ時に、俊蔭伏し拜みて曰く、「日本より山を尋ぬる26大いなり心ばへは、父母が愛子として、一生27獨り子なり。28おほやの顧みの厚く、29慈悲の30深か31りしを捨てて、國王の仰の畏かりしによりて渡れり。その父母紅の涙を流して宣はく、汝不32孝の子ならば親に永き嘆き33あらせよ、孝の子ならば、淺

校異 1〔底〕考異に。2〔イ〕とアリ。3〔底〕考異いかで。4〔底〕考異ナシ。5〔イ〕くり返し。6〔イ〕牙。7イ岩。8〔イ〕四字ナン。〔イ〕く。10〔イ〕熱、〔底〕考異肌。11〔イ〕め。12〔底〕地。13〔イ〕てアリ。14〔イ〕てアリ。15〔イ〕日アリ。16〔イ〕し罪アリ。17〔イ〕深きに、〔イ〕深さに、〔イ〕考異の古里ノ三字ナシ。18〔イ〕ナシ。19〔底〕ナシ。20〔底〕考異のアリ。21〔底〕考異いへば。22〔底〕考異罪。23〔イ〕をはんぬ、〔イ〕き。24〔イ〕ナシ。25〔イ〕ナシ。26〔イ〕大いなる、〔イ〕思ひの。27〔イ〕にアリ。28〔底〕親の、〔イ〕ナシ。29〔イ〕しのびけ。30〔イ〕心アリ。〔イ〕ふナシ。31〔イ〕ナシ。32〔ロ〕けう。33〔底〕考異をアリ。

き思ひの淺きに1あひ向へ2と宣ひき。さるは俊蔭逆の風大いなる波にあひて、3ともがらを亡はして、一人知らぬ世界に漂ひて、年久しくなりぬ。しか4れば不孝の5人なり。この罪6のまぬがれ難きに、倒さるゝ木の片7端を賜はりて、年頃8らうせる父母に琴の9聲を聞かせて、その10む悔と11なな12さむ」といふ時に、阿修羅いや益々に怒りて曰く、「汝13が果代の命を止めんとこそ、この木14一寸15を得べからず。その故は、世の父母佛になり給ひし日、天稚16御子下り17まして18三年擬れる谷に、天女19音聲20をして植ゑし木なり。さてすなはち天女宣はく、此木は、阿修羅の萬劫の罪半ば過ぎむ世に、山より西にさしたる枝枯れむものぞ、その時に倒して、三分にわかちて、上の品21は三寶より始め奉りて忉利天までに及ぼさむ、中の品はさきの親に報ひ、下の品22をば行末の子どもに報いんと宣ひし木なり。阿23修羅を山守24となされて、春は花25闇秋は紅葉の林に、天女下りましノ〳〵て遊び給ふ所なり。たはやすく來たれる所に27あり。いはんやここばくの年月28なで生し29た30づくる、萬劫の罪滅ぼさむ、惡しき31さま32のあれむして

校異 1 [イ]ナシ。2 [玉]むアリ。3 [イ]多くのアリ。4 [内]あアリ。5 [内]子。6 [イ]を。7 [イ]はら。8 [イ]老い。9 [イ]音。10 [イ]かひ、[イ]めい、[玉]二字報ひ。11 [玉]ナシ。12 [イ]ら。13 [イ]ナシ。14 [内]考異のアリ。15 [イ]も、[内]考異をも。16 二字[イ]落。17 一字[イ]に。18 以上五字[内]考異ナシ。19 [イ]下りアリ、[内]下りましてアリ。20 [イ]ナシ。21 [内]考異をば。22 [イ]は。23 [イ]す。24 [イ]に。25 [内]のアリ。26 [内]考異ナシ。27 [イ]ナシ。28 [イ]ナシ。29 [イ]木。30 [玉]てつる、[内]てて。31 [イ]身。32 [イ]まぬ。

ま1かり2木づくれるを、3己が4一分と5なし。何によりてか汝6が7一分あた8らむ」と9ただ今10喰11さなとする時に、大空12かい暗がりて、車の輪の如くなる雨ふり、雷鳴り閃きて、龍に乗れる童、黄金の札を阿修羅に取らせて昇りぬ。札を見れば書ける13事、「三分の木の下の品は、日本の楽生俊蔭に14施15す」と16書けり。阿修羅大きに驚きて、俊蔭を七度17伏し拝18む。「あな貴、天女の行末の子に19こそおはしけれ」と尊びて曰く、「この木の上20 21下22下の品23をば大福徳の木なり。一24すをも25みち空し26き土をたゝくに、一萬恒27沙の寶28を出づべき木なり。下の29品は、聲をもちてなむ永き寶となるべき」といひて、阿修羅木を取り30出でて割り木づくる響に、天若御子下りまし31まして琴三十造りて昇り給ひぬ。かくて、すなはち音聲樂して、天女下りまし32て、漆33塗り織女34緒搓り着けさせて昇りぬ。

かくて、卅の琴を造りて、俊蔭、この林より西にあたれる栴檀の林に移ろひて、この琴の音を試みんとて出で立つほどに、辻風35出で來て三十の琴36を渋る。其所にて37音を試みるに、二十八は同じ聲なり。牛38ば

校異 1[不]も。2[不]ナシ。3[不]男。4[不]のアリ。5[不]くアリ、[不]く分アリ6[不]に。7[不]二字ナシ。8[不]へ。9[不]言ひてアリ。10[因]考異亦。11[不]ま。12[不]のアリ。13[因]考異詞に。14[不]施。15[因]せ。16[因]考異あり。17[不]二字ナシ。18[不]み。19[不]てあり。20[不]中アリ。21[不]ナシ。22[不]上、[国]上中、[因]二つ。23[不]は。24[不]寸。25[不]ちて。26[不]く。27[不]河アリ。28[不]わき。29イ木。30[不]出だし。31[因]考異ナシ。32[不]ましアリ。33[不]をアリ。34[因]考異二字ナシ、[因]にアリ。35[因]考異吹き出で。36[不]ナシ。37[不]二字ナシ。38[不]ら。

を二に造れるは、山崩れ地割れ裂けて、1なく、山一つに揺2りあふ。俊蔭偏く涼しき林に獨り詠めて、琴の音3をあるかぎりかき立てて遊ぶに、三年といふ年の春、この山より西にあた4る花園に移りて、琴5くも並べ置きて、大きなる花の木の蔭に宿りて、我國の事、父母の事思ひやり6つゝ、聲まさりたる二つの琴を試みる7 8。春の日ノ9 10長閑なるに山を見れば霞11縁に、林を見れば木の芽燻り12て、花園13花盛りに面白14く、照る日の午15の時ばかりに、琴の音をかき16たて、聲振り立てて遊ぶ時に、大空に音聲樂して、紫の雲に乘れる天人七人連れて降り給ふ。俊蔭伏し拜みて17猶遊ぶ。天人花の上におり居て宣ふ、「哀何ぞの人か、春は花を見、秋は紅葉を見るとて、我らが通ふ所なれば、蝶鳥だに通はぬ18に、頼りなき住居はする。若しこれより東に、阿修羅19の預りし木20得給21ひし人か」と宣ふ。俊蔭「その木賜は22れる衆生なり。かく佛の通ひ給ふとも知らで、しめやかなる所となむ思ひて年頃籠り侍る」と答ふ。天23女の曰く、「さらば、我らが思ふ所24ある人なれば住み給ふた25りけり。天の掟ありて、天の下に琴彈きて26族立つべき人になむ

校異 1 [イ]程アリ、[イ]七。2 [イ]ナシ。3 [イ]の。4 [イ]れアリ。5 [イ]ど。6 [イ]て。7 因考異む。8 [イ]にアリ。9 [イ]のアリ。10 [イ]のいとアリ。11 [イ]わたり。12 [イ]に。13 [イ]二字ナシ、因のアリ。14 因考異し。15 [イ]ナシ。16 [イ]出で、[イ]てアリ。17 [イ]花をあたふ。18 [イ]ナシ。19 [イ]が。20 因考異をアリ。21 因考異へる。22 [イ]りし。23 [イ]人。24 [イ]のアリ。25 因考異め。26 [イ]そら。

ありける。我[1]は昔いさゝかなる犯しありて、こゝより[2]西、佛の御國よりは東なる所に降りて、七年ありて、そこに我子七人とまりにき。その人は極樂淨土の樂に琴を彈き合せて遊ぶ人なり。そこに渡りて、その人の手を彈き取りて、日本[3]國へ[4]は歸り給へ。この三十の琴の中に、聲まさりたるをば我名づく。一をばなん風とつく。一つをばはし風とつく。この二つの琴をば、[5]かの山の人の前にてばかり[6]に調べて、また人に聞かすな」と宣ふ。「この二つの琴の音[7]せん所には、娑婆世界なりとも必らず訪はむ」と宣[8]ひし。俊蔭大[9]人の宣ふにしたがひて、花園より西をさして行けば、大いたる川あり。その川より孔雀出で來てその川を渡し[10]つ。琴をば例の辻風送る。それより西へ行けば谷あり。その谷より龍出で來て越しつ。琴は辻風送りつ。それより西[11]を猶行けば嶮しき山七つあり。その山より仙人[12]ありて越しつ。それより西[13]を行けば、[14]虎狼ひと山騒ぐ所あり[15]き。[16]犀[17]出で來てその山を越しつ。それより西へ行けば、七の山に七[18]つの人ありて、[19]云ひしが如くに住む所に到りぬ。一つといふ山を見れば、栴檀の木の蔭に、林に花を折り敷きて琴彈く人、年三十ばかりにてあり。俊蔭立ち居拜む。山の主大きに驚きて、「これは何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ、「淸原の俊蔭。參り[20]來つる事は、しか〳〵[21][22]宣はせしかばなむ」[23]この時に山の主、「あはれ蓮花の花園、己

校異 1〔イ〕その。2〔イ〕はアリ。3〔イ〕ナシ。4〔イ〕ナシ。5〔イ〕名山。6〔イ〕ナシ。7〔イ〕のアリ。8〔イ〕ふ。9〔国〕女。10〔イ〕なし。11〔イ〕に、〔因〕へ猶。12〔因〕出で。13〔因〕へ。14〔イ〕ナシ。15〔イ〕ナシ。16象、〔因〕象犀。17〔イ〕る、〔イ〕出で。18〔イ〕ナシ、〔因〕人。19〔因〕宣ひ。20〔因〕考異ナシ。21〔イ〕なんアリ。22〔イ〕のたび。23〔イ〕其。

が親の通ひ給ふ所より1、日本の2帝花園3よりと聞けば、佛の通ひ給はんよりも貴く」とて、同じ4木の蔭に据ゑて、5事の由を委しく問ひ給ふ。俊蔭はじめよりの事をくはしく申す時に、辻風例の琴6くも7をみ8れ同じ如く置きつ。その時に山の主、俊蔭が琴9を音を10試みて、悲しび給ひて、俊蔭と連れ給ひて、二つといふ山に入り給ふ11時に、その12山の主珍らしがり給ふ。まらうどの聞13え給ふ、「怪しう蓮花の花園よりといふ人のありつれば、母の恩の悲しく、乳房の戀しさになむ率て參りつる」と宣へば、主14は15尤がりて、三人連れて三といふ山に入り給ふ。其所に16も同じ事(一如カ)宣ひて、四人つれて17四といふ山に入り給ふ。其所にも同じ事宣ひて、五人18の連れて奥へ入り給ふ。其所にも同じごと宣ひて、六人連れて19奥へ入り給ふ。其所にも同じごと宣ひて、七人連れて入り給ふ。その山の樣は心ことなり。山の池は20瑠璃なり。花を見れば匂ことと21に、紅葉を見れば色ことに誇りかに、淨土22の樂の聲風にまじりて近く聞え、花の上には23の鳥孔雀連れて遊ぶ所に、七人連れて入り給ひて、その山の主を拜み給ふ。24山の主喜び畏まり給ふ時に、まらうど申し給はく、「日本の人蓮花の花園よりとて來たれば、25その乳房の戀しさになむ、花園26か

校異 1 [イ]かアリ。2 [イ]子と見れど、国人なれど。3 [イ]ナシ。4 [因]考異きアリ。5 [イ]こ。6 [イ]ど。7 [因]考異ナシ。8 [イ]な。以上二字[イ]ナシ。9 [イ]の。10 [イ]三字ナシ。11 [イ]ナシ。12 [イ]ナシ。13 [イ]き。14 [イ]ナシ。15 [イ]哀。16 [イ]ナシ。17 [イ]奥へ。18 [イ]ナシ。19 [イ]ナシ。20 [イ]皆アリ。21 [イ]なり。22 [イ]ナシ。23 [因]鳳凰、[イ]ナシ。24 [因]考異そのアリ。25 [因]考異母。26 [イ]をアリ。

けてもいふ人なれば、山の鼕こぞり1て、率て參うで來つる」と2宣ふ時に、山の主俊蔭に宣ふ、「已れは、3天上4より來たり給ひし人の御子どもなり。この山に下り給ひて、七年住み給ひしほどに、一年に一人を當てて、七人の鼕となりにき。已5らがいとけなきを見捨てて、6天上へ歸り給ひにしかば、乳房の通ひ給はぬ所に、いときなき鼕花の露を供養7と受け、紅葉8を9露を10乳房と甜めつゝあり經るに、親11天上し給ひて後、天つ風につけても訪れ給はず、知る人もなき12に天の下に留め給ひて、劫のかはるまで訪れ給はぬを、ほのかに聞けば、これより東なる花園になむ春と秋と下り給ふなるを、花園よりと承はれば、親の御あたりの13かうばし14さに、娑婆世界の人の通はぬ所なれども對面する15」とて、この琴八を一づゝ16調べて、七日七夜彈くに、17この釋佛の御國まで聞ゆる時に、佛文珠に宣はく、「これより東娑婆世界より西に、18天上の人の植ゑし木の聲すなり。19とみに行け」と宣ふ時に、文珠獅子に乘りて、刹那の間に到りて問ひ給はく、「汝は何ぞの人ぞ」と問ひ給ふ時に、七人の人皆禮拜して申さく、「我は昔20都率天の內院の衆生なり。いさゝかなるを21うしありて、忉利天の天女を母としてこの世界に生れ22て、七人の共23同じ所

校異 1 不ナシ。2 不なんアリ。3 不父。4 不に。5 不れアリ。6 不父。7 不に。8 不の。9 不雫。10 因考異三字ナシ。11 因考異のアリ。12 不ナシ。13 不戀。14 不き。15 不そアリ。16 不にアリ。17 不琴、因考異との琴。18 不父。19 不見。20 不とう。21 不か。22 国來アリ。23 不がらアリ。

に住まず、1また相見る事2なかりし。しかあるを、乳房の通ふ所よりとて渡れる人のかなしさに、七の羣集ひて求は3(るな)り」と申すに、文珠歸りて佛に4申し給ふ時に、佛文珠を引き連れて、雲の輿に乘り5て渡り給ふ時に、この山川6常の心地せず、山7のゆすり大空8響きて、雲の色風の聲變りて、春の花秋の紅葉時9分かず咲きまじろまゝに、遊び人10々11らいと遊びまさるほどに、佛渡り給ひて、すなはち孔雀に乘12りて花の上に遊び13給ふ時14、遊び人15々、阿彌陀三昧を琴に合せて七日七夜念じ奉る時に、佛現れて宣はく、「汝16らは、昔勤深く17犯しは淺かりしによりて、都卒18天の人と生れにき。今淺19かりし20瞋恚の報いに、國土の衆生に21なりにたり。その業やうく盡きにたり。またこの日の本の衆生は、生々世々に22人の身を受くべきものにあらず。その故23は如何にといへば、24前の世に淫慾の罪測りなし。しか25れば輪廻し26つる、一人が腹に27八生宿り、28二千人が腹に各々29五八生宿るべし。その宿るべき30母、一人31の人の身を受くべき32人な33し。しかあれど、昔大そ34ら(〇鏡カ)はむなとい35ふし36仙人ありき。そ

校異 1[不]二字ナシ。2[不]難、[因]考異なり難。3二字[不]ニヨリテ補フ。4[不]かくとアリ。5[不]ナシ。6[不]のアリ。7[不]ナシ。8[不]閑。9[不]をアリ。10[不]ナシ。11[不]ナシ。12[不]せ。13[不]行く。14[不]にアリ。15[不]ら、[不]ナシ。16[不]ナシ。17[因]考異いたしアリ。18[不]とう。19[不]ましアリ。20[不]自然、[不]じねん、[国]しんねん。21[因]生れ、[因]考異生れに。22[不]浄土。23[因]を。24[不]先。25[不]あアリ。26[不]つゝ、[因]て。27[不]五百。28[不]ナシ。29[不]ナシ、[因]又。30[因]考異子。31[国]もアリ。32[不]やう、[不]ナシ。33[不]り。34[不]ん。35[不]ひ。36[不]山。

仙人の1とし事は、昔慳貪邪見なる國王2ありて、國亡びて諸の衆生國土の人3こゝにつか4ねし時ありき、その時に此の仙人、萬恒河沙の衆生に穀を5絶して、尊勝陀羅尼を無等三昧に行ひ6勤めて七年ありき。その時に日本の衆生、三年愼みて、かの仙人に菓摘み水汲みせし功德の故に、輪廻7生死の罪8滅ぼして、人の身を得た9るなり。尊勝陀羅尼を念じ奉る人を10供養したる故11なり12。今も亦人の身を受けん事は難しといへども、今この山に13人り佛菩薩を驚かし、慳貪邪見の輩に忍辱の心を起さしむる故に、この山の七人殘れる業を滅ぼして天上に歸るべし。日本の衆生、この因緣に、生々世々14に15佛に會ひ奉り、法を聞くべし。またこの山の16族七人に當る人を、三代の孫に17うつし、その18孫人の腹に宿るまじき者なれど、この日の本の國に契り結べる因緣あるによりて、その19報豐かなるべし」と宣ふ時に、遊び人ら禮拜20し奉る。俊蔭この琴を佛よりはじめ奉りて菩薩に一づつ奉る。すなはち雲に乘り21、風に靡きて歸り給ふに、天地震動す。

かくて俊蔭、今は日本へ歸らむと思ふに、この七23人の人に琴一づつ取らす。七人紅の涙を流して惜し

校異 1イせ。2イ三字ナシ。3イ穀、イ皆。4イれ。5イ施。6イ盡くし、イ誦し。7イ衆生。8イなアリ。9イりし。10イ俱。11イに人にアリ。12イさアリ。13イ到。14イナシ。15イナシ。16イナシ。17イ得べ。18イなまご。19イ果アリ。20イナシ。21イてアリ。22イナシ。

む。俊蔭往き難にして歸る。七人1の2音聲樂して、孔雀の渡し3ゝ川のほとり4まで送5る。それより歸るとて宣ふ6、「7我が日の本まで送り奉らまほしけれど、山9日をだに出て10ぬ蹔なれば、別の悲びに、此所までだに參り來つるなり。こゝにて日本國まで送り奉るべき人11をさぶらはせん」と宣ひて、いさゝかなる法を作りかけつ。かの國まで持て歸るべき琴には、己が手ふさの血を刺しあやして、琴の名を書きつ12ゝ、一をばりうかく13風、今一つをばほ14そを風、今一つをばやど15り風、四をば山もり風、五をばせた風、六16をば花園風、七をば17かたち風、八をばみやこ風、九をば18あはれ風、十をばおりめ風と書きつけて、七人の人歸りぬ。俊蔭時れば例の辻風い19きて、琴をば卷き取りつ。天女の20名づけ給ひし21取合せて十二、桑木22 23も取加へて、卷き揚げつ。24俊蔭三年住みし山に到りて、事の樣を語りて、月日の樣などくはしく云ふほどに、辻風、この卷き揚げし琴を、この三人25の26つい居たる前に27琴を卷き28とて來て下し置きつ。その29かみ俊蔭、この桑木30琴をこの人々に一づつ奉る31。珍らしがり喜ぶ事限りなし。

校異 1[同]考異ナシ。2[不]人アリ。3[不]たる。4[不]にて。5[不]り、[不]り奉る。6[不]やうアリ。7[不]二字ナシ。8[不]もアリ。9[不]のアリ。10[不]やらアリ。11[不]も。12[不]く。13[不]ナシ。14[不]う。15[不]もアリ。16[同]は。17[不]山。18[不]い。19[不]でアリ。20[不]三字ナシ。21[不]琴。22[不]のアリ。23[不]ナシ、[不]もとより。24[不]二字ナシ。25[不]ナシ。26[不]云ひ。27[不]二字ナシ。28[不]持。29[国]時。30[不]のアリ。31[国]にアリ。

かくて俊蔭、日本へ歸らんとて、波斯國へ渡りぬ。その國の帝・后・儲の君にこの琴1を一づつ奉る2。帝大きに驚き給ひて俊蔭を召3す。參れるに、事の由をくはしく問ひ給ひて宣はく、「この奉れる琴の聲4荒き所あり。暫し彈き慣らして奉れ」と宣ふ。「外の國の人なれ5ば渡りて久しくなりにけり、その程は6いたはりて候はせむ」と宣へば、俊蔭申す、「日本に7年八十歳8なる父母侍りしを、見捨てて罷り渡りにき。今は塵灰にもなり侍りにけん。白き屍をだに見給へむとてなん急ぎ罷るべき」と申す。帝哀れがり給ひて、暇を許し9 10つかはす。11交易の船につ12きて、廿三年といふ年、卅九にて日本へ歸り來た13り。父薨れて三年、母薨れて五年になりぬといふ。俊蔭嘆き思へどもかひ14なくて、三年の孝15送る。おほやけに事の由を16申さすれば、帝「いとう17りせかりし者の歸りまうで來れること」と喜び給18ひて、召して事の有樣問はせ給ふ。俊蔭ありし事のかぎり奏すれば、帝哀れ19がり20興せさせ給ひて、式部少21輔になされぬ。殿上22にゆるされて東宮の學士つか23まつるべきよし仰せらるゝほどに、「道の事24は俊蔭に預く」25云ひて殘さず26才に從ひて出し立て、世に從ひ人しづめ憂あらすな」と宣はす。「かたち有樣すべて人にすぐれたれば、我も

校異 1 [イ]ナシ。2 [イ]にアリ。3 [イ]して。4 [イ]悪し。5 [イ]ど。6 [イ]五字ナシ。7 [イ]ナシ、[イ]俊蔭。8 [イ]にアリ。9 [イ]給ひてアリ。10 [因]給ひつ、[国]賜はす。11 [イ]舶役。12 [イ]け。13 [イ]かアリ。14 [イ]もアリ。15 [イ]をアリ。16 [イ]ナシ。[因]考異申し奏。17 [イ]るせ、[イ]るはし。18 [イ]ふ。19 [イ]に。20 [イ]給ひてアリ。21 [イ]輔。22 [イ]ナシ。2 [イ]うアリ。24 [因]考異をば。2, [イ]ついで。26 [イ]さて。

我もと娘いもう〔ハと〕1持たる人は、婿にせむ〳〵と2よべと3、佛の淫慾の罪4重きを5、たゞ宮ひしかば、つゝ6みてのみ過ぐしけ7れど、一世の源氏の心たましひ人にすぐれ給へりけるを得て、その腹に8女子一人生ませつ。かなしうする事かぎりなし。俊蔭位まさりて、式部大輔にて左大辨兼けつ。女四9なる年の夏より、大き10心も做く賢し。父が思ふほど11、今は我女物習ひつ12つべきほどになりきたり。我が身を捨てて習ひし琴、この女に習はせむと思ひて、かの波斯國より持て渡りし琴どもを取り出でて、二つの琴をば人にも知らせで、今十13を、14りうかく風をば女のにす。ほうを風15は我がにて、やどもり風と云ひしを娩して、今16七を持たせて内裏へ參17る。せた風をば帝に奉る。山もり風をば后宮に奉る。花園風を18東宮に奉る。宮こ風をば東宮の女御に奉る。かたち風をば左大臣忠經に奉る。おりめ風をば右大臣千19か蔭に奉る。帝共、ことを試み給ふに、おどろ20かしき聲出で21聲き給22ひて宣はく、「この琴ども23はいかで作りし24ぞ」25手觸れで久しくなり26にけるに、聲もしらます、七ながら同じ聲にはいかで調27ひたるぞ」と問ひ給ふ時に、ありしやうを28細く奏す。帝大きに驚29かせ給ひて、感せしめ30聞召す事かぎりなし。「これが31未

校異 1一字〔イ〕ニヨリテ補フ。2〔イ〕宣へ。3〔イ〕もアリ。4〔イ〕多。5〔反〕考異かたく。6〔反〕しアリ。7〔イ〕るを。8〔イ〕女子。9〔イ〕にアリ。10〔イ〕にアリ。11〔イ〕には、〔玉〕ぞう、考異ほに。12〔イ〕ナシ。13〔玉〕なるアリ。14〔イ〕め。15〔イ〕をば。16〔イ〕一。17〔反〕り。18〔イ〕はアリ。19〔イ〕ナシ。20〔イ〕〳〵。21〔イ〕てアリ、〔イ〕來アリ。22〔イ〕ふ。23を〔玉〕ば。24〔イ〕ナシ。25〔反〕袖〔イ〕ナシ。26〔反〕め。27〔玉〕へ。28〔イ〕くはし。29〔イ〕き。30〔イ〕てアリ。31〔イ〕の。

だ慣れずなむある。調へて奉れ」と仰せらるゝ時に、俊蔭せた風を1賜2ひて、いさゝか掻き鳴らして、大[曲]一を4 5彈くに6、7御殿の8上の瓦碎けて花の如く散る。今一つかうまつるに、六月中の十日のほどに、雪ふすまの如くり凝りて降る。帝大きに驚き10て宣11ふ、「げにこの調べは、珍らしき手なりけり。これはゆ12いこく[○遺曲カ幽谷カ]といふ手なり。くせ13こゆくはらといふ曲なり。唐土の帝の彈き給ふに、瓦碎けて雪降るとなん言ひ14たる。この國には未だ見ぬ事を、怪しう珍らしき人の才かな。昔二度試みせしにも、その道の珍らしう優れたりしかば、官をもその道に賜ひ、15學士をもつかうまつらするに、文の道は少したどたどしくともその筋は多かり。この琴はこの國に俊蔭一人16こそありけれ。學士をかへて琴の師をつかうまつれ。東宮さとりあ17る皇子なり。物の師せん人の難18いだすべき皇子にあらず。心に入れて殘19す20手なくつかうまつらせたらば、21直衣の位賜はせむ」と宣ふ時、俊蔭22申す、「23年いときなきほどに父母24を離れて、唐土へ渡されぬ。逆25の風大いなる波に漂はされて、知らぬ國に打ち寄せらる。深き悲しびこれに過ぎたる26な

校異 1[イ]げアリ。2イはり。3一字[イ]ニヨリテ補フ。4[イ]つかまつる、[因]つかうまつる。5[因]彈きつかうまつる。6[イ]響高うてアリ。7[イ]おと。8[因]考異ナシ。9イ氷。10[イ]給ひアリ。11イはく。12[イ]う、因考異く。13因考異と。14因傳へアリ。15[イ]ナシ。16[イ]より。17[イ]な。18[イ]ず。19[イ]さず。20[イ]心に入れ殘すアリ。21[イ]なふら、[因]納言。22[イ]二字ナシ。23[イ]ナシ。24[因]考異に。25イナシ。26イ事アリ。

し。辛1くして歸り參うで來たるに、父母亡びて、空しき宿をのみ見る。昔宣旨にかなひて、唐々の試を賜はりて、唐土に2渡されぬ。父母3相ひ見ずして永く別れて、悲し4びは餘りあ5るといへども、まれびつかうまつる勇みはなし6未來の罪にはあたるとも、この琴はまねびつかうまつらじ」と申して、罷り出でぬ。かくて、おほやけにもかなはず、官位も辭して、三條のすゑ7の京極の大路に、廣く面白き家を造りて、女に琴を習はす。女一わたりに8樂9一10をば11習ひて、一日に大曲五六を習ひ12とり13つ。同じく搔き鳴らす聲父に勝14る。父が彈く手一つ15殘さず習ひ取りつ。このほど家貧しく16して、思ふほどにしたてず。十二三になる年、かたち更に言ふかぎりなし。あたり17光り輝きて、見る人まばゆき18て見ゆ。心のらう／＼じき事世19に聞え高く20て、當東宮21父22に召23す。女にも御文賜へど、24我も御返25事聞え26ず、女にも御返り27もせさせず、さらぬ上達部28親王達はまして御文見入るべくもあらず。一女は天道に任せ奉29る。天の掟あらば國母30女御ともなれ。掟なくば山賤31 32ともなれ。我33乏しく、貧しき身なり。いかでか高きまじ

校異 1 国らじ。2 イはな。3 イにアリ。4 友考異み。5 イり。6 友無禮。7 イナシ。8 国曲。9 イの手アリ。10 イナシ。11 イ二字ナシ、国を。12 イた。13 イナシ。14 イりて。15 友考異もアリ。16 友ナシ。17 イもアリ。18 イまで。19 イの。20 イナシ。21 イ父母。22 イを。23 国し。24 イかたじけなくも。25 イし、友考異り。26 イもせさせ。27 友ナシ。28 イあけくれアリ。29 イり。30 イ夫母、イ婦女。31 イのアリ。32 イナシ、国妻。33 イナシ。

らひはせさせむ」と、言ひてよき人1宣へど耳にも聞き入れず、家の門はめぐり2てさして、帝東宮3御文持たる御使、なべての人の使は、明けたてば立ち並み4たれど、言ひて5入6りもせず、たゞ琴を習7はしてあり經8るほどに、おほやけにかなふまじきものなりとて、治部卿兼けたる宰相になされぬ。

かゝるほどに、女十五歳りなる年の二月に、にはかに母隠れぬ。それを嘆くほどに父病づきぬ。父弱く覺ゆる時に女を呼びて言ふやう、「我ありつる世には、我子に尚きましらひもせさせむと思ひつれども、若くては知らぬ國に渡り、この國に歸り來ても、おほやけにもかなひつかうまつらで、程10なければ、11貧しくて、我子の行先の掟せずなりぬ。天道に任せ奉る。我領ずる12莊々はた多かれど、誰か13は言ひわく人あらむ。ありとも誰か14言ひまつはし知らせむ。但し命の後15女子の爲め16に、氣近き寶とならむものを奉らむ」と宣ひて、近く呼び寄せて、萬の事を言ひて、この家の乾の隅の方に、深く一丈17掘れる穴あり。それが18上下ほとりには沈を積みて、この彈く琴の同じ樣なる琴、錦の袋に入れたる一と、褐の袋に入れたる一。錦のはなむ風、褐のをはし風と云ふ。その琴我が19子20と〔(事カ如カ)〕思さば、ゆめ21たふ、人に見せ給ふな。たゞその琴をば心にもなきものに思ひなして、永き世の寶22なり、幸あらばその幸極めん時、禍

校異 1 板のアリ。2 板ナシ。3 板のアリ。4 イ居アリ。5 イ出で、板取り。6 板れ。7 イナシ。8 イけ。9 国にアリ。10 イ經。イなし。13 板經け。11 イいほ。12 イ所。13 板考異ナシ。14 イはアリ。15 イ女子、国いまし。16 板考異ナシ。17 イばかりアリ。18 板考異の。19 イ琴。20 イナシ。21 イさい。22 イとなし。

極まる身ならばその禍1かぎり2なりて命極まり。また虎狼熊獸に交り漂浪へて、獸に身を施しつべく覺え、もしは伴の武士に身を3あた4りぬべ5く、もしは世の中にいみじき目見給ひぬべからん時に、この琴を6ば掻き鳴らし給へ。もし7は子あらば、その子十歳のうちに見給はんに、敏く賢く魂とゝのほり、8聰明ならん人に勝れたらば、9それに傾け給へ」と遺言10し11置きて絶え入り給ひぬ。また同じ頃ほひに乳母も亡くなりぬ。心と身を沈めしほどに12殊に身の徴もなく13久しくなりにしかば、まして一人の使ひ人も殘らず日に從ひて失せ亡びて、物の心も知らぬ女一人殘りて、物恐ろしくつゝましければ、あるやうにもあらず隱れ14忍びてあ15れば、人も無きなめりと思ひて、萬の16往還の人は、17宿ども18も毀ち取りつれば、19たゞ寢殿一つのみ、簀子もなくてあり。程20もなく21、野のやうになりぬれば、女はたゞ乳母の使ひける從者の22下屋に曹司してありけるを23ぞ呼び24使ひけ25る。父主の言ひし事(〇如カ)、所々26の27莊より持て來28しも、使遣りなどして29はたり30もて來し31時こそありしか、かくむげになりぬれば、たゞ預りの者の

校異 1 イのアリ。2 イにアリ。3 イか。4 イへ。5 イし。6 因考異ナシ。7 イシナ。8 因ようめい、因考異ようみやう。9 イか。10 因考異をアリ。11 イナシ。12 イ二字ナシ。13 イてアリ。14 イしひ。15 イめアリ。16 イゆきき。17 イ宗。18 国を。19 因二字ナシ。20 イナシ。21 イてアリ。22 イしり。23 イナシ。24 イてアリ、因考異つゝアリ。25 因考異り。26 イナシ。27 イさう。28 国ぬ。29 イわ、イか。30 国こそアリ。31 因三字ナシ。

喜び1にてあみぬ。はかなきうち使ふ調度なども、親達の亡くなりにける騒2ぎに取り3かへ、せかみにしてかし換へ、銭にして力4皆失せ果てにけり。世の中も知らぬ若き心地に、いと哀れに悲しく、春は花をながめ、秋は紅葉をながめ5て、明6け暮らすに、たゞこの7女の食はすれば食ひ、食はせねば食はであり。一人籠れ8時るはかりの屏風几帳、9落10ちものはかり11、さはいへど12も、廣かり1所の名殘に、なくなりぬと見れ13ど、なほ1つらひてあり。父主物の14器用あり心にくき所ありし人なれば、家の様をかしう面白かりし所なれば、家遺ゝ植木面白く、草の根葉色などたゞてならず15面白き所にて、夏になるまゝに、出で入り繕ふ人なき所な16れば、落ち葉さへ生ひ17茂りゝ、人目稀にて、たゞ18明け暮れ19ながむるに、秋にもなりぬれば、20木草の色ことになり行くを見るまゝに、言ふ方なく悲しくて、かく言ふ、

侘び人は月日の數も知られけり21る明暮ひとり宿をながめて

など獨り言ちて22ながめける。

かくて、八月23中の十日ばかりに、時の太政大臣御願あって、賀茂に詣で給ひける24を、舞人陪従例の作

校異 1上二字ナシ。2〔イ〕さい。3〔イ〕か、をかゝみにし、〔ト〕してしかば。4〔友〕考異ナシ。5〔イ〕ナシ。6〔イ〕をかし。7玉鬘。8〔イ〕ぬ。9〔国〕さ。10〔イ〕る。11〔イ〕はアリ。12〔イ〕ナシ。13〔イ〕ば。14〔玉〕興。〔イ〕情ら。15〔友〕をかし。16〔因〕考異け。17〔イ〕繁ご。18〔因〕一人アリ。19〔因〕考異一人アリ。20〔友〕考異草木。21〔イ〕り。22〔イ〕なんアリ。23〔友〕考異ナシ。〔友〕考異一。24〔友〕に。

法なれば、いといかめしうて、この俊蔭の家の前より詣で給ふ。舞人陪従いか1めしう御2前数知らず過ぎ給ふを見るとて、毀れたる部のもとに立ち寄りて見るに、遊び3人御車など過ぎて、立ち後れて、これを前追ひて、年廿ばかりの男、また十五4歳ばかりにて、5玉光り輝6きうなゐ7子の御馬添多くて渡り8給ふ。うなゐ子は、9大臣殿10の御四郎にあたり給ふ。父大殿かぎりなくかなしうし給11うて、片時12も御目放ち給はぬ御子なりけり。若小君となむ聞えける。この家の垣穂より、いとめでたく色清らかなる尾花折れ返り招く。先に立ち給へる人「怪しく招く所かな」とて、

吹く風の招くなるべし花薄13わがよぶ人の袖と見14つるは

とて、渡り給ふ。若15君、

見16る人の招くなるらん花薄、我が17袖ぞとはいはぬものから

とて立ち寄り給ひて折り18給ふに、この女の見ゆ。怪しくめでたき人かな、心細けなる住ひする19かなと見給ふに、うち歩み入る後でこともなし。若小君、哀れと見給20へど、一人「行く道にしかあらねば強ひて過ぎ給ひぬ。かくて御社にま21で22連れ給ひて、神楽23を奉り給ふ24に、若小君昼見えつる人何ならむ、いかで見

校異 1 不ナシ。2 不ぜん。3 不ナシ。4 不ナシ。5 不ナシ。6 不ゝ。7 不ナシ。8 不二字ナシ。9 不は此の。因このアリ。10 因大きおとど。11 因ひ。12 因考異ナシ。13 不秋。因われ。14 不ゆるは。不るかな。15 不小アリ。16、不し。17 不袂。18 不行く。19 不人アリ。20 不ふ。21 不うアリ。22 不着き。23 不ナシ。24 因ナシ。

んと思して、暗く1て歸り給2ふに、3人に立ち後れて、皆人渡り果てぬるに、若小君、4家の秋の容靜かなるに、見廻りて見給へば、野5邊のごと恐ろしげなるものから6、7心ありし人の、急ぐ事なくて心に入れて造りし所なれば、木立よりはじめて、水の流れたる、樣、草木の姿など、をかしく見所あり。蓬葎の中より、秋の花はつかに咲き出でて、池8廣きに月面白くうつれり。恐ろしき事覺えず。面白き所を分け入りて見給ふ、秋風河原風まじりて早く、草むらに蟲の聲亂れて聞9ゆ。月隈なう哀れなり。人の聲聞えず。かゝる所に10も住むらむ人を思ひやり11て、獨言に、

　蟲だにもあまた聲せぬ12あさぢふに一人住むらん人を13こそ思へ

とて深き草を分け入り給ひて、家のもとに立ち寄り給へれど、人も見えず。たゞ14薄のみいと面白く15て招く。隈なう見ゆればたゞ近く寄り給ふ。東面の格子。一間あけ16て、17琴18を19みそかに彈く人あり。立ち寄り給へば入りぬ。飽かなくにまだ20きも月の」な21に22宣23ふて、簀子の端に居給ひて、24「かゝる住ひし給ふは誰ぞ、名告り給へ」など宣へ25ど、いらへもせず26。内27くらす28な29れば、入りにし方も見えいと暗け。

校異 1[不]ナシ。[不]2ひにし。3[不]一人。4[不]かのアリ、[因]考異このアリ。5[不]らアリ。6[不]俊蔭アリ。7[不]ナシ。8[因]のアリ。9[不]え。10[不]ナシ。11[不]ナシ。12[イ]くさむら。13[不]しぞ思ふ。14[不]すみ。15[不]ナシ。16[不]ナシ。17[不]あななくはアリ。18[不]ナシ。19[不]ひ。20[不]ともも。21[不]ど。22以下廿一字[不]ニヨリテ補フ。23[玉]ひ。24[因]九字ナシ。25[不]ば。26[不]立ちぬアリ。27一字[不]う。28[因]考異く。29以上四字[因]は

ず。月やうやう入りて、

　立ち寄1るゝと見る／＼月の入りぬれば影を頼みし人ぞわびしき

2又

　入りぬれば影も残らぬ山の端に宿まどはして嘆く旅人

など宣3ひて、かの人の入りにし方に入れば[illegible]あり。そこに居て物宣へどもをさ／＼いらへ4もせず。若小君、「あ5な恐ろし。6消し給へ」と7宣ふ。「おぼろけにては8かく寥り来なむや」など宣9へば、気配懐かしう、童にもあれば、少しあなづらはしくや覚えけん、

　かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはありとも思はざら10〔な〕む

とほのかに言ふ声、いみじうをかしう聞ゆ。いとゞ思ひ増りて、「まこと11はかなくて、哀れなる住ひ21、などて13し給ふぞ。14誰か15さ族にかものし給ふ」と宣へば、16女「いさや。何かは聞えさせん。かうあさましき住ひ17し侍れど18、立ち寄り訪ふべき人もなきに、怪しく覚えずなむ」と聞ゆ。若、19「疎きよりとしも言

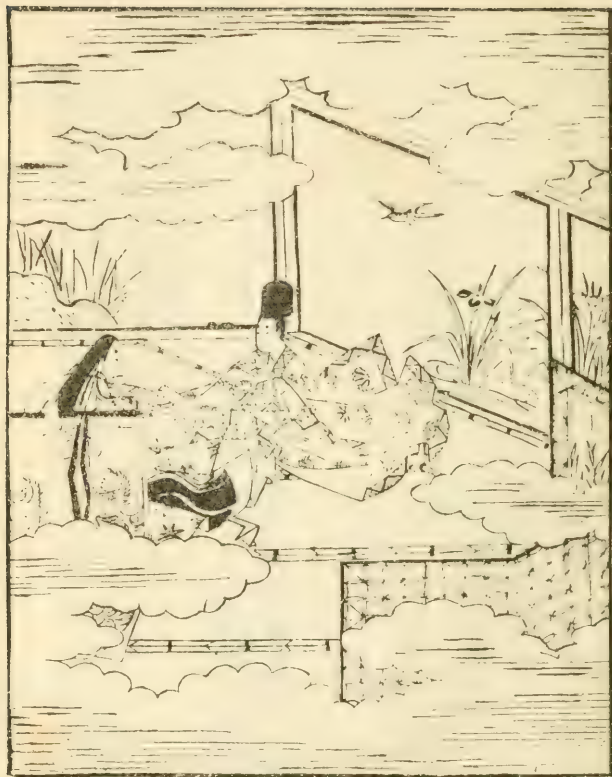
校異 1〔イ〕りて。2〔イ〕ナシ。3〔ハ〕ひ。4〔ハ〕考異むとアリ。5〔イ〕は。6〔ロ〕物宣へど、〔ハ〕考異とおどし給ひて、〔イ〕おどし給ひつゝ。〔ホ〕をと宣へど。7〔イ〕二字ナシ。〔ホ〕物も宣はず。8〔イ〕かゝる。9〔ハ〕ふ。10一字〔イ〕ニヨリテ補フ。11〔イ〕にはかなくて、〔ハ〕にかゝる。12〔ニ〕はアリ。13〔イ〕かアリ。14〔イ〕誰。15〔ホ〕御。16〔ハ〕ナシ。17〔イ〕ナシ。18〔イ〕は。19〔イ〕その時アリ。

ふなれば、覺束なき1より稍もし2かなれ。いと哀れに見え給3へれば、え罷り過ぎざりつるを、思ふもしるくなむ。親ものし給はざ4なれば、如何に心細く思さるらん。誰と5か聞えし」など宣ふ。6いらへ「誰と人7知られざりし人なれば、聞えさすともえ8知り給はじ」とて前なる琴を、いとほのかに掻き鳴らして居たれば、この君いと怪しくめでたしと聞き居給へり。夜一夜物語し給ひて、如何ありけん、其所にと9どまり給ひぬ。

かくて、哀れにいみじく心細げな10る氣色を見給ひしより思11ふべきにしを、まして近く12ては、今13千重まさりて哀れに悲しく思ほえて、親の御許に歸らざらむも何とも覺え給は14ぬと、父15子の思ひ子にて、片時16も見え給はねば、思し騒ぎ給ふ子なり。かくて近く見馴るゝまゝに、片時立ち去るべ17きもあらず、見捨てて行かむも、哀れに後めたく覺ゆる事の二つな18ければ、女に、「今はな思し隔てそ。さるべきにてこそかく19て見奉り初め20ぬら21んと22見奉らではえあるまじう覺ゆ23れど、見給ひしやうに親なむおはする。片時御前も放ち給はず、内裏に參るほどだに後めたきものに24思したれば、昨夜よりかく侍るを如何に思し騒ぐらん。またかゝる25罷り歩きなど26も、わざとして人に見えねば、27えしも思ふまゝには參うで來じを、

校異 1[イ]こそ。2[イ]け、[国]けな。3[因]ひつ。4[イ]ナシ。5[イ]ナシ。6[因]いでや。7[イ]にアリ。8[イ]二字ナシ。り[イ]ナシ。10[イ]れ。11[イ]ひつ。12[イ]見アリ。13[国]一。14[イ]ねど。15[イ]母。16[因]考異ナシ。17[因]く。18[因]ナシ。19[イ]ナシ。20[因]つ。21[イ]め。22[イ]ナシ。23[イ]二字ナシ。24[イ]思ほへ。25[イ]二字ナシ。26[因]考異ナシ。27[イ]て。

さるべからむ折に、1夜中暁にも參り來んと思ふを、此所にまことに2やがておはする人か。親3しおはする。又通ひ給ふ所やある4らんまゝに宣へ」と宣へば、女いとゞいみじき物思ひさへまさる心地して、恥かしくいみじけれ5ど、せめて宣へ6ば、「親もあり、7知るべき人もある身ならば、かゝる所に、假にても獨りはありなむや。やがてこの住所に朽ちぬべきより外の行方もなくなむ」といへは、「さは8あれ、誰とも聞えし人の子9ぞ。もし心ならで參り來ずとも、つと思ひとりてなむあるべき」と宣へば、「誰とも10知られざりし人なれば、聞ゆとも誰と11は知り給はん12や」とて、片はらなる琴を掻き鳴らし13て、うち泣きた14る氣配もいみじう哀れな15り。深き契りを夜一夜心のゆくかぎりし明かし給ふも、逢ひ難からむ事を今より16いみじう悲しう思さるゝほどに、明くなれば、さてもあ17るまじう、殿にも思し騷ぐらんといみじければ、なほ如何すべき。今日ばかりはなほかうて18もと思へど、同じ所にてだに片時19御前ならぬ所には据ゑ給はず、あからさまの御供にも外20し給はず。昨日心地の惡しく覺えしかば、參るまじかりしを、切に宣ひしかば、そ21も、から此所に參22り來べかり23け24ればこ25うと、今なむ思ひ知らるゝ。さらに今にては夢26にても疎

校異 1[因]考異宵。2[国]かく。3[イ]や。4[イ]あアリ、[玉]あるアリ。5[イ]ば。6[イ]ど。7[イ]しか。8[イ]ナシ。9[イ]に。10[イ]人にアリ。11[イ]ナシ。12[イ]ナシ。13[イ]つゝ。14[イ]まへアリ。15[イ]る。16[イ]四字ナシ。17[イ]な。18[イ]ナシ。19[イ]もアリ。20[イ]にアリ。21[イ]のアリ。22[因]考異る。23[イ]しアリ。24[因]るに。25[イ]そ。26[因]考異三字ナシ。

なるまじけれど、參り來ぬ事のわりなかるべき事」と宣へば、女、

　秋風の吹くをも嘆くあさぢふに今はと1離れん折をこそ思へ

とほのかに言へば、2二葉にいとほしく哀れなる3事を思ひ4入りて、

　葉末こそ秋をも知らぬ根を淺みそ5れ路芝6のいつか忘れん

吾が佛、疎な7るに8な思しそ。さりと9も、かくて止むべきにもあらず。たゞつゝましきほどばかりぞ」と宣ひて、起きて出で給ふに、なほいみじう悲しう思さるれば、單衣の袖を顔に押し當てて、とばかり泣き入りて、かく宣ふ。

　宿思ふ我10出づるだにあるものを涙さへなどとまらざるらん

と宣へば、女うち泣きて、

　11見る人12も名殘ありげも見えぬ世を13なにと忍ぶる涙なるらん

と云ふ樣もいと心苦しけれど、殿の事もいとほしければ、返す返す契り置きて出で給ふ14に、殿の内15をたに人多數してこそあ16る17へき給へ、たゞ一所歸り給ふに、何れの道とも知り給はぬうちに、哀れなる人を見捨てつるに18あれば、人にもあらぬ心地して、見廻らして辻に立ち給へり。大殿には、昨夜かく若小君お

校異 1イは。 2イ若小君。 3イナシ。 4イ二字ナシ。 5イの。 6イは。 7イりと。 8イナシ。 9イて。 10イいつか。 11仮考異寫。 12イの。 13イ何に、或いかに。 14異ナシ。 15イに。 16イり。 17イナシ。 18イ吾か。

はしまさずとて、御供にさぶらひける人々、兄の兵衛佐の君をいみじうかう1 2うへ宜3へ4て、佐の君を
ば「たゞ今この子求め5め出でずば、我が子にせじ。如何してし」と責め給ふ。御前御馬添の男どもは「仕へ
所に使はし、6獄所にさぶらはせん」と勘当せられ7、舎人、雑色8はうち縛らせなどし9給ふ。御心を惑
はして求め騒がせ給ふ。男ども、「求め10出来らんに、おはしまさずば首をも奉らん」と申しければ、暇11
賜びて、皆12十人二十人とあがれて、昨夜の道を求め奉る。兵衛佐御叔父の中將、又こと人々も、すべて三
十人ばかり連れて、先づおはしまいたる方を、賀茂13の御社まで願を立てて求め奉るに14、三條京極の辻に
立ち給へ15つゝ、兵衛佐見付け聞え給ひて、「などかくいみじき物16は思はせ給ふ。殿には昨夜より君おは
せずとて、大殿の君、上物も聞し召17さず、御心まどひして、御供に仕うまつりたる18よし人々は、皆鼻突
き放19たれぬ。忠20い勘らもいたづら人になりぬべくてなん。見給ひしやうに、皆21へ酒の氣ありて、賢し
き人もなかりしかば、君のとまり給ひけんも知らず、殿まで物し給ひて、おはせざりしかば、今宵22夜一夜
思し騒ぐを見給へ23れば、しづ24心もなし。殿の中にある時だにあり、まして思しやれ。そもそもいかでと
まり給ひし25ぞ。何處よりおはするぞ」と宣へば、若26君、「皆人の捨てておはしにしかば、過したる27雑の

校異 1二字因考異じ。2一字因が。3イふ、因ひ。4イば。5イナシ。6イこと。7因考異ぬアリ。8イを
ば。9イし。10イナシ。11イとひ。12因人アリ。13イナシ。14イぞアリ。15イり。16因考異をば。17イ
し。18イり。19イさ。20イナシ。21イ人、イナシ。22因考異ナシ。23因つアリ。24因む。25イか。26イ小
アリ。27イばかり。

心地してなむ」と宣へば、佐の君うち笑ひ給ひて、「先に立つ雁1ぞあり2けん。さらば此所にや昨夜より立ち給3へりつる。怪しの道祖神や」と言ひて、「さはれ今の間も如何に4騒ぎ給らん」とて、諸ともにおはしぬ。若小君哀れなる事を道すがら心苦しう5思ほして、殿までおはしぬ。佐の君、「若小君辛うじて求め出で奉れり」と宣ふ。大殿喜び給ふ。殿の男ども多う事に當り、鼻突き放たれ6たりつる人々喜びあへり。大殿「如何に、何事によりとまりにしぞ。何時7かた8は歩きは習ひしぞ。いと怠々しき事なり。我が心まどはす」とて責め宣ふ。北9方、「かばかり河原のわたりは、盗人多くて人害ふなり。それに一人あらば、盜人うち殺してば如何せまし。心定まらぬ人なりけり。さらに宮仕へもせさせじ。歩き習ひて逃げ隱れんと思ふも10のなめり。我が前去るな」と宣はせて、内裏へ參り給ふ時は諸ともに11率て參り給ひて、片時も御眼放ち給はず。若小君、心の中に哀れなる事を思ひて、いさゝかなる言傳もしてしがな12と、あからさまにも行くものにもがなと思へど、かく13いと難ければ、夜晝歎14く。彼處を我より外に見る人なし、教へ遣らむも、其所15所とも覺えぬうちに、大殿佐16君も氣色とりて問ひ給ふ。さ17も知らせ奉らじと思して、人をもえ遣り給はず。物の折ふし毎に、契りし事を哀れに、有樣のらうたげなりしを思ひ出で18つゝ、蓬の草木19も

校異 1 [イ]こそ。2 [イ]つらん、[因]つらめ。3 [イ]ふ。4 [イ]求め、[因]考異求め騒ぎ。5 [因]考異おぼ。6 [イ]二字ナシ。7 [イ]かゝる、[イ]か。8 [イ]心、[イ]ナシ。9 [因]のアリ。10 [イ]なのめな。11 [イ]出で。12 [イ]ナシ。13 [イ]なんアリ。14 [イ]かしアリ。15 [イ]ぞ。16 [因]のアリ。17 [イ]と、[因]れど。18 [イ]て。19 [因]ナシ。

容を見るにも、たゞこの人1々のみ2思ほし給へば、千々に思ひ砕くれど、宜ふべき人3しなければ、心にこめてあり經給ふ。

かくてかの女君、夢の4事ありしに、たゞならずなり5にけり。それをも知らず、父母のみ戀ひしく慣はぬ住ひの侘びしく、覺束なき事語らひ6置き給ひし事を、草7木の色變り木の葉の散り果つるまゝに、涙を落し8眺め渡る。夕暮に稻光のするを見て、

いなづまの影9をも餘所に10見るものを何に譬へん我が思ふ人

など言へど、誰かは答へん。わ11(か)小君、かくて思ひ歎く夕暮に、風烈しく蟲の聲亂るゝを聞きて、あはれ我が見し所の河原風如何ならんと思ひやりて、

風吹けば聲ふりたつる蟲の音に我も荒れたる宿をこそ思へ

など眺め居たる12ほどに、十月ばかりになりぬ。しぐるゝ空にも人知れぬ袖によそへられて、眺むるをだに13も容14にのみ15向へるに、16鶴いと哀れにうち鳴きて渡る。この君これを聞きて、まして悲しさまさりて

17たづが音にいと18ゞもおつる涙かな同じ河邊の人を見し19かば

あはれ」と獨言ちて、如何ならん世に今一度見んと思へど、夢の通ひ20 21だになし。月日の經るまゝに、逢

校異 1[イ]ナシ、[因]考異を。2[イ]覺え。3[イ]ナシ。4[因]ごと。5[イ]給ふ。6[イ]二字ナシ。7[イ]葉。8[因]てアリ。9[国]ナシ。10[イ]はアリ。11一字[イ]ニヨリテ補フ。12[因]考異二字ナシ。13[イ]と。14[イ]ナシ、[因]考異を。15[イ]見。[イ]つアリ。16[イ]ナシ。17[イ]立つ雁。18[因]考異し。19[イ]より。20[イ]路アリ。21[イ]さへ。

ふ1期なき音のみ泣かれまさりて、かの京極にも、風の荒く霜雪の降り積むまゝに、永き夜2に萬の事を思ひ明かして、袖の氷れるを見て、

我が袖のとけぬ氷を見る時ぞ結びし人も3ありと知らるゝ

4など思ふほどに、年かへりて春になりぬ。かの若小君出で給ふとて、押し折り給ひし桂の木の萌え5出でたるを見て、

忘れじと契りし枝は萌えにけり頼めし人ぞ木の芽ならまし

と思ひ渡る。月日經て、子生むべき6月7どになるまで、見知らで居た8るに、九月といふに、この使ふ9女、10ののはせるとに11さへに出で來て12、うち傾きて見て言ふやう、「怪しく、などか13御樣の例ならずおはします。若し人14も近く御物語りやし15出で」16「い17まや、近きまゝに逢ひ奉り　とこそ18は語らへ」19女「あなさかな。戯れにも宣ふべき事にあらず。20女にはな隱し給ひそ。21嫗は早うよりさは見奉れど、さも22聞えざりつるなり。よし御かたきをば知り奉らじ。何時よりか御汚れは止み23給ひし。いと近けになり給

校異 1 イ事。2 イすがら、イもすがら。3 イ思ひ出でらる、イ思ひ出づるな。4 イと。5 因考異ナシ。6 イほ。7 因考異ナシ。8 イり。9 因嫗。10 イの物食はするとて、イ物食はせなどに、イ物はせなど見さに。国物食はするとて。11 一字国ま。12 以上十字イナシ。13 イはアリ。14 イと。15 イ給ひし。16 イいらへアり。17 イさ。18 イナシ。19 因嫗。20 因嫗、21 イおうなはる。22 因えアリ。23 イ思。

ふめるを、宮1へ、いかでか御設けせざらむ」2いらへ、「怪しく3も言ふかな。我は如何4はある。例する事は、九月ばかりよりせぬ。されど猶さあるにこそあらめとて、ともかくも覺えず」と言へば、5女「さらば、この月6ただ月にこそおはしますなれ。あないみじや。かゝる御身を持ち給ひて、今まで知り給はざりける7はかな8さ9。10女亡くなり侍りなば、如何なり給はん。あが君の御爲めにこそつたなき身の命も惜しけれ」と言ふにぞ、我が11御身はかゝる事ありけりと思ふにぞ、いとゞいみじき心地して、恥かしくさへ12ありて泣くを見て、「よし、如何はせむ。13女知り侍らば、物な思しそ。野山を分けても14御をば仕うまつらん。この15の御寶となり給はん16とも知らず。御身17こと18だになり給ひなば、19女負ひかづき20も仕21まつ22らん、23有佛の御ゆかりには、骨舍利24の中よりも甘き乳房25は出で來なむ、白き髮26の筋も銀27黄金となりなん。あぢきなし悲しともな思しそ。たゞ御手をかいすまして、神佛に平らかに28身29ことな30し給へと申し給へ。又31女の命を念じ給32ひて」と泣く／＼言ひて、33女思ひ廻して、片田舍に子ども34ありければ、それが許に35いきて、君にはともかくも言はで、かの折36に使ふべき物ども求めて、さりげな

校異 1 [イ]ふ。2 [イ]いで。3 [イ]ナシ。4 [イ]と。5 [因]嫗。6 四字[因]考異ナシ。7 [イ]ぞアリ。8 [イ]き。9 [イ]よアリ。10 [因]嫗。11 [イ]ナシ。12 [因]な。13 [因]嫗。14 [イ]おば、[因]嫗。15 [イ]れ。16 [因]ナシ。17 [イ]身、[イ]に。18 [イ]二字ナシ。19 [因]嫗。20 [イ]てアリ。21 [イ]うアリ。22 [イ]りな。23 [イ]吾。24 [イ]ナシ。25 [イ]か。26 [イ]ナシ。27 [因]考異ナシ。28 [イ]御アリ。29 [因]身、[イ]に。30 [イ]らせ。31 [因]嫗。32 [イ]へ。33 [因]嫗。34 [イ]などアリ。35 [イ]ゆ。36 [因]考異ナシ。

くて、「この頃は如何で1かおはしましつる。哀れ如何にせな。殿の内にとかくうちして使ふべき物2はありや」と言へば、3「4いさい5かなる物をかさはする」6女「何7に8まれ／＼あらん物を、如何にも／＼しなして、多くはこの御爲めに9ものせむかし」と言10ひて、いと美しげにて11らし〔調じ〕たる唐12鞍を取り出だして、「これは何にすべき物ぞ」とて見すれば、「さ13ゝ、これ14し15ていとよう仕うまつるべかめり。又物はなしや」16問へば「見えざめり」と云ふ。17女是を取り持ちて、要じ給ふべき所18々に持ていきて、多にな19りて、衣20々布などを買ひてその設けす。物など食はするをも21僅にして、この事をのみ心に思ひまどひ22あり23て、女君は、草の生ひ24繁りて、家の荒るゝまゝに、夜晝涙を流して、子生まん事25も思はである程に、26女萬にし歩きて、そのあたりの事27のみ28なし出でつ。

かくて六月六日に、29子生まるべくなりぬ。氣色ばみて惱めば、30女肝心もまどはして、「平らかに」と申しまどふ程に、殊に惱む事もなくて、玉光り輝く男子を生みつ。生れおつるすなはち31女己が前の懐中に抱きて母に32をさ／＼見せず、たゞ乳呑ますることばかり33率てきて、負ひかづき養ふ。34君は殊に惱む35所

校異　1〔イ〕ナシ。2〔宮考異〕ナシ。3〔イ〕君アリ。4〔イ〕二字ナシ、〔玉〕いらへ。5〔イ〕さ。6〔宮〕ナシ。7〔イ〕そ。8〔宮考異〕もあれ／＼、〔宮考異〕てもあれ、〔玉〕まれ。9〔イ〕二字ナシ。10〔玉〕へば。11〔イ〕う。12〔宮考異〕鞍。13〔イ〕ば。14〔イ〕に。15〔イ〕くアリ。16〔イ〕とアリ。17〔国〕嫗。18〔イ〕ナシ。19〔イ〕し。20〔イ〕ナシ。21〔又〕はつか。22〔イ〕てアリ。23〔イ〕く。24〔イ〕籠り、〔宮考異〕立ち。25〔イ〕とも、〔イ〕ナシ。26〔玉〕嫗。27〔イ〕ナシ。28〔イ〕ナシ。29〔イ〕このアリ。30〔玉〕嫗。31〔玉〕嫗。32〔玉〕はアリ。33〔イ〕いだ。34〔宮考異〕女アリ。35〔イ〕事。

なくて起き居たり。暑き頃なれば、貧しき人の爲めにはいとよし、「1これは大福德におはし2なむ、3かく暖げにつきておはします」4いと誇り歩5て。

かゝる程に、この母君、侘しき事6いやます／＼に7覺えて、子の親に8さへなり9て、思ひこがるゝに、この子養ひもてゆくまゝに、玉光り輝きて見ゆれば、あはれ祖父おはせましかば、如何にいつきか10なしび養ひ給はましと思ふも悲し。11をんな「12故大殿おは13しまさましかば、綾錦に纏はれて生ひ出で給はまし」と言へば、「いで更なりや。思ひ出づればいといみじ。親の14なで養ひ給ひし時は、我かゝらむとや15思ひ16し」とて、いみじう泣きて、「我が宿世遁れざりけるを、天翔りても如何にかひなく見給17ふらん。親18のおはせし時先づ死なましものを」と泣きこがるれば、19女20いはで「あなさがな21や。猶22な思ほし23う。今は心地落ち居にたり。かゝる寶を持ちては何事をか思すべき、此24虫三つ25は26女夢に見奉りたり。いと美しげに艶やに清かなる27くけ針に、縹の絲を添28ひたり。絲右絲によりて、一尋かたわきばかりすげたるを、鷂29う、君のお前に落しつる。その針を30う、31いとかしこく行ひさらぼへる行32衛ぞ、君の御下がひの33御

校異 1 [イ]いま。2 [イ]ましアリ。3 [因]考異いと。4 [因]は、[国]ナシ。5 [イ]く。6 [イ]はアリ。7 [イ]思し。8 [イ]二字ナシ。9 [イ]ぬ。10 [イ]しづき。11 [イ]をうな、[イ]女子。12 [イ]ナシ。13 [イ]せ。14 [イ]二字ナシ。15 [イ]はアリ。16 [因]考異給ひアリ。17 [イ]は。18 [イ]ナシ。19 [国]嫗。20 [国]いらへ、[因]いで。21 [因]考異ナシ。22 [イ]ナシ。23 [イ]そ。24 [イ]むしこつ、[因]卅三、[因]考異櫛三つ。25 [イ]をば。26 [国]嫗。27 [イ]う。28 [イ]へ。29 [イ]そ、[イ]大。30 [イ]そ、[イ]ナシ。31 [因]考異六字ナシ。32 [イ]者。33 [イ]衽。

くびに、つぶ〳〵と1長く縫ひつけて立ちぬる。さて、とばかりあれば、その針2落しつる3 4鷹は、この針を求むるやうにて、そのわたりを翔りて見るに、君持5給へりと見て、御袖の上に居てさらに6絶えずとぞ見給へし。怪しさに、夢合する人に合7せ侍りしかば、いとかしこき夢なり。その見8にける人は、上達部の御子生みて、つひにその子のと9ゝ見むものぞ。10もし自然に中絶ゆる事やあらむとなむ合はせし。されば御許の御祭の初なり。多く見給ふるに、11針にて見ゆる子は、いとかしこき幸ひ子なり。12縁13 14丹波に侍る女の童生まんとて見給へしやうは、いと使ひ15よきてづくり16の針の耳いと明らかなるに、信濃のは17つりをいとよきほどにすげて、18 19うなの衣に縫ひ着くと見給20へし。それだに如何は21つる。22ただにそれにかゝりてこそ僅生き連らひ侍れ。立ちぬる月にも、御許の23御事24宣ひ語らはむとて罷り25たりしかば、白き粘26三斗九升、27からかたならず異れて侍りしをこそ28はとかくにし侍りしか。何29にか思し入るゝ。あた幼30いちかすこちか。おほよそ、子生み給へりしこともなくて、とかくうちして世を経給はんになどかあらん。31うへ、戀

校異 1 [イ]なよ。2 [イ]落ち。3 [イ]にアリ。4 [イ]違はず。5 [イ]た。6 [イ]立た。7 [イ]さアリ。8 [イ]え。9 [イ]く。10 [イ]か。11 [イ]わり。12 [イ]女。13 [イ]のアリ。14 [イ]但馬。15 [イ]に。16 [イ]ナシ。17 [イ]べる。18 [イ]おアリ。19 [イ]女。20 [イ]ひ。21 [イ]べ。22 [イ]たゞ。23 [イ]ナシ。24 [皮]宣へ、[イ]の。25 [因]考異二字ナシ。26 [イ]みはかり。27 [イ]太刀など、[イ]かちかたなど、[因]搗稲七斗。28 [イ]ナシ。29 [イ]ナシ。30 [イ]はしめちか、[因]いそちかむそちか、[因]考異いちかむうちか、[因]考異はちかめちかうか。31 [因]かく侘び。

ひ給はんや。1さのまひならぬ人もこそあれ。いで3あなあぢきな。あたら御かたちを」と言へば、4いらへ「いでや。などてかさはしもかはまどふべき。あないみじや。さ6なは思ひし」7嫗「侘び給ふな。8はの事ぞ9やうこう10は11。世の末なのめに、はかなげにやはおはする。されば擇12ろ下13とて、この子を捧げて養ふ。かくて泣き暮し嘆き明かす。月日はかなく過ぎ行く。出で來添ふ物はなくて、いさゝかなりし身の調度などありし14は、15嫗失ひ使ひつゝ、月日16經るまゝに、たゞ涙の海をたゝへ17居たり。

かくてこの子三つになる年の夏18頃より親の乳呑まず。母怪しがりて、「など吾子はこの頃乳は呑まぬ19」20と云へば、21親「猶呑め。苦しうもあらず。こと物は食はず。乳をさへ呑まずは如何せん」と言へば、「否、今はな呑ませ給22うそ」とて呑まずなりぬ。かゝる程にこの子は、すくすくと引き伸ぶる物のやうに大きになりぬ。生ひ出づるまゝに、いとになく美し23げなり。いさゝか見聞24くつる事さらに忘れず、心の25敏く賢き事かぎりなし。かくいときなき程に、親の苦しかるべき26ひとはせず、親はかなしきものなり27と思ひ知りたり。かゝる程に、この子五になる年28秋つ方嫗29死ぬ。この親子いさゝか物食ふ事もなくなりぬ。日を經てつ

校異 1丙さ宣ひ。因考異さる樣や、因考異さひ。2丙はアリ。3因考異二字ナシ。4因考異三字ナシ。5因も。6丙や、丙ナシ。7丙女。8丙か。9国うアリ。10一字丙そ。11以上七字因孝養にこそはおはすめれ。12丙二字ナシ、丙の子。13丙ぞアリ。14丙をば。15丙女。16丙をアリ。17丙てアリ。18丙のアリ。19丙ぞアリ。20丙四字ナシ。21丙母、丙ナシ。22丙ひ。23丙く。24丙き。25因考異二字ナシ。26丙こ。27丙けりアリ。28丙のアリ。29国うせ。

れづれとあり、この子出で入り遊び歩きて見るに、母の物も食は1であるを見て、2いみじう悲しと見て、いかでこれ養はんと3思ふ心つきて思へど、さる幼きほどなれば、何でふ業4をも5えせず。つとめて、近き河原に出でて遊びあ6るけば、釣するもの7 8魚を釣る。「何にせむ9とするぞ」と言ふに、「親の思ひて、物も食はねば、食ばむずるぞ」と言ふに、さば親にはこれを食はするぞと知りて10釣を構へて釣るに、いと11ほしげなる子の大いなる川面に出でて12すれば、かくらうたげなる子を、かく出だし13歩かする、誰ならんと思ひて、「何せむにかくはするぞ」と言へば、「遊びに14せんずる」と15言ふ。らうたがりて、「我釣りて取らせむ」とて、多く釣りて取らする人もあ16るを、持て来て親に食はせなどしあ17るくを、「かくなせそ。物食はぬも苦し18もあらず」と言へどきかず。かたちは日々に光るやうになり行く。19見る人抱きうつくしみて、「親はありや。いざ我が子にと」言へば、「否。御許20に21はす22る」23てさらにきかず。24その暖25な26△かほどは、かくし歩きて母に食はす。夢ばかりにても、たゞこの食はする物にかゝりてあり。冬の寒くなるまゝ27には、ささへ28せすまじければ、この子、我が親に何を参ら29む、如何にせんと思ひて、母に言ふやう、

校異 1 [イ]ず。2 [イ]いかでこれ養はんアリ。いかで[イ]いかにト・セリ養はんノ下、とアリ。3 以上十一字[イ]ナシ。4 [図]考異ナシ。5 [イ]ナシ。6 [イ]り。7 [イ]のアリ。8 [イ]うを。9 [イ]ず。10 [イ]針。11 [イ]おか。12 [イ]釣。13 [イ]てアリ。14 [図]考異す。15 [イ]二字ナシ。16 [図]考異りけアリ。17 [イ]り。18 [イ]うアリ。19 [イ]二字ナシ。20 [イ]ぞ、[イ]思、[イ]ナシ。21 [イ]おアリ。22 [イ]ナシ、[イ]と、[イ]といひ。23 [国]といひアリ。24 [図]空。25 [イ]かアリ。26 [イ]る。27 [図]に、[イ]ぞ。28 [イ]ナシ、[国]な。29 [イ]せアリ。

「1 2 魚(いを)3 取りに 4 いき 5 たれど、氷(こほり)いと堅くて 6 魚(いを)もなし。御許(おもと)7 如何(いか)し給はんずるぞ」と言ひて泣く時に、親「何か悲しき。ななきそ。氷解(こほりと)けなん時に取れかし。我(われ)多く物食 8 ひつ」と言へど 9、10 猶 11 明くれば河原に行きて、人多く車などある時は、そのほど過ぐして出でて見るに、氷 12 鏡(かゞみ)の如く 13 氷れ 14 り。その 15 かみこの子言ふ 16、「まことに我(われ)17 孝(かう)の子ならば、氷解けて 18 魚(いを)出で来(こ)19。孝(けう)の子ならずばな出で 20 来(こ)そ」とて、泣く時に、氷解けて大いなる 21 魚(いを)22 出で来(き)た 23 り 24 て、25 往(ゆ)きて母に言ふやう「我はまことの孝(かう)の子なりけり」と語る。小(ちひ)さき子の深き雪を分けて、足手(あして)は蝦(えび)のやうにて 26 走り来(く)るを見るに、いと悲しくて、涙を流して。「などかく寒きに出でて 27 歩(あり)くぞ。かゝらざらん 28 思ひでて歩(あり)け」29 に 30 泣けば、「苦し 31 もあらず、御許(おもと)を思 32 ふ」とて止(とゞ)まるべくもあらず。ありつる 33 魚(いを)は 34 見 35 れど 36。百味(ひやくみ)を具(ぐ)へたる 37 飲食(おんじき)になりぬ。怪しう妙 38 なる事多かり。かゝるほどに年かへりぬ。この 39 さまして大き 40 に敏(さと)く賢し。変化(へんげ)のものなれば、ただ大人(おとな)のやうになりて、人に見ゆれば、「誰が子ぞ。親(おや)は誰(たれ)とか云ふ。」この 41 わたりにある 42 なるべしとな

校異 1 [底]考異今アリ。2 [イ]うを。3 [イ]をアリ。4 [イ]出で。5 [イ]け。6 [イ]うを。7 [底]考異いかに。8 [イ]けず。9 [イ]もアリ。10 [イ]出(ま)なく。11 [イ]彰然(あれ)しき。12 [イ]はアリ。13 [イ]にアリ。14 [イ]る。15 [イ]時。16 [イ]やうアリ。17 [イ]孝(けう)。18 [イ]うを。19 [イ]んアリ。20 [イ]ナシ。21 [イ]うを。22 [底]考異なむアリ。23 [イ]れり、[底]考異る。24 [イ]取りアリ。25 [底]歸りアリ。26 [イ]歸。27 [イ]はアリ。28 [イ]折出(をりで)。29 [イ]と。30 [イ]夏(なつ)は、玉敷(なす)け。31 [イ]うアリ。32 [底]へば。33 [イ]うを。34 [イ]魚(いを)とアリ、[イ]うをとアリ。35 [イ]ゆアリ。36 [イ]もアリ。37 [イ]御。38 [イ]た。39 [イ]子。40 [イ]く。41 [底]考異あ。42 [イ]二字ナシ。

ど言ひて求むれば、自ら尋ねも来ぬべし。かく歩きて人にも見え知られじ、この河1原にのみやは2魚はある
と思ひ3て、4下りてその川より渡りて、北ざまにさして5往きて、山に入りて見れば、大いなる蓮土を掘り
て、物を取り出でて、火を焚きて6焼き集めて、また大いなる木の下に往きて、7椎、8櫟、栗などを取り9て、
この10子を、「何しにこの山にはあるぞ」と問へば、「11魚釣りに来つるぞ、御許に12くはせ奉らんとて」13
言へば、「山に14は15魚はなし。又生きたる物殺すは罪ぞ。これを拾ひて食へ」と教へて、このほ16か17拾
ひ集めたるものどもを取らせて童は失せぬ。この子嬉しと思ひて、持て18往きて母に食はす。この後は山に
入りて、見せ知ら19せし薯蕷野老を掘り20て、木の實葛の根を掘りて養ふ。雪高う降る日。薯蕷野老のあり
所も21木の實の22見えぬ時に、この子、「我が身不23孝ならば、この雪高く降りまされ」と言ふ時に、いみじ
う24高く降る雪たちまちに降り止みて、日いとうらゝかに照りて、ありし童出で来て、例の薯蕷野老焼きて25
に〔〇調〕じて、取らせて失せぬ。かく遥かなる程26をし歩くも苦しう覚えて、いかでこの山にさるべき所もが
な、近くて養はんと思27ひて、山深く入28りて見れば、いみじういかめしき杉の木の29四つ、物を合せたるやう
にて立てるが、大きなる洞の30ほとりにあきあひてあるを見て、この子31の思ふやう、こゝに我が親を据ゑ奉

校異 1 [イ]ナシ。2 [イ]うを。3 [イ]ナシ。4 [イ]三字ナシ。5 [イ]三字ナシ。6 [イ]やに。7 [因]考異櫟アリ。8 [イ]ナシ。
9 [国]つゝ。10 [イ]子に、[イ]子に云ふやう、[イ]幼きもの、[因]考異おさなき者に。11 [イ]うを。12 [イ]食は。13 [イ]とア
リ。14 [イ]ナシ。15 [イ]うを。16 [イ]り。17 [イ]しろは。18 [イ]ゆ。19 [イ]れ。20 [イ]ナシ、[国]又。21 [イ]四字ナシ。22 [イ]あり所も
アリ。23 [イ]孝。24 [イ]二字ナシ。25 [イ]う。26 [イ]に。27 [イ]ふ。28 [イ]三字ナシ。29 [イ]もとより。30 [イ]程。31 [因]考異ナシ。

て、拾ひ出でん木の實を1も先づ參らせばやと思ひて、寄り2見るに、いかめしき牝熊牡熊子3を產み連れて住む空洞なりけり。出で走りてこの子を食まむとする時に、この子の曰く、暫し待ち給へ。まろが命絕ち給ふな。まろは4孝の子なり。親兄弟もなく5、使ふ人もなくて、荒れたる6家にたゞ7一人住みて、まろが參8る物にかゝり給9へる10母持ち奉11れり。里には爲すべき方もなければ、かゝる山の木の實葛の根を取りて、親に參12るなり。高き山深き谷を下り登り罷り歩きて、晨に罷り出でて暗13う罷り歸14る程だに、後めたう悲しく侍れば、かゝる山の主住み給ふとも知らで、この木の空洞に母を据ゑ奉りて、薯蕷一筋を掘り出でて15先づ參ら16む、また遠き道をも、親の爲めに17と罷り歩けば、苦しうも覺えねど、つれ〴〵と待ち給18ふらむ19と悲しう侍れば、近くと思20ひ給21ふは〔○へばカ〕見侍りつるなり。されど22かく領じ給23ひける所なれば、罷り去りぬ。空しくなりな24ば、親もいたづらになり給ひなん。己が身の內に、親を養はむによ25り〔○要〕なき所あらば、施し奉るべし。是なく26ば何處にてか步かん。手なく27ば何にてか木の實葛の根をも掘らん。口なく28ば何處よりか魂通はむ。胸なく29ば何處にか心のあらむ。この中30いたづらなる所は、耳

校異 1 不ナシ。2 不てアリ。3 因考異ナシ。4 不孝。5 不てアリ。6 不宿。7 不おとり。8 不らすアリ。9 不ひつ。10 因をアリ。11 因考異りた。12 不らすアリ。13 因考異きに。14 不りし。15 不もアリ。16 不せアリ。17 因考異ナシ。18 不は。19 不も。20 因う。21 不へて。22 因考異もアリ。23 不ふ、因ひし。24 不ん。25 不う。26 因考異ては。27 因考異ては。28 不ては。29 因考異ては30 不にアリ。

の蠑螈の峰たりけり。これを山の王に1奏し2奉る」と涙を流して言ふ3時に、牝熊牡熊荒き心を失ひて、涙を4落して、5親子の悲しさを知りて、二6人の熊子供を引き連れて、この木の空洞をこの子に譲りて、こと嶺に移りぬ。その7かみ、この8木の空洞を得て、木の皮を剝ぎ廣き苔を敷きな9どす。薯蕷掘り初めし童出で来て、空洞の邊り掃き清め10て歩けば、前より泉出で来る、掘りあらためて、水11流れ面白くなりぬ。かへすがへす喜びて、母の御許に往きて言ふやう、「12ほにい13ざ給へ、まろが罷る所へ。此所とても、まろならぬ人の見えばこそあらめ、かく出でて罷り歩くほど14、つれづれと待ち給ふほど苦しうおはしますらん。かくて惡しうも善うも罷り歩かむと思へど、人の馬牛を飼はせても使は15るゝ、親の御ために、さる下衆の母と言はれ給はん事と思ふ。16さらでよき事はた17難かるべし。同じくば、人も見ぬ山18に籠りて、人に知られじとなむ思ふ。心には片時19も離れ給はん。飛ぶ鳥につけても奉らんと思へど、それ20得さもあらず。い21ざ給22ひに、まろが罷る所へ。さてもの給はゞ、木の實一つにても易く參ら23ん。罷り歩24く事も休まむ」と言へば、「何かは、25我子(あこ力)のいま26せむ方に27は、何方28もくく往かざらむ。里に住めども、吾子

校異 1[仁]旋。2[仁]めまつ。3[仁]嵐。4[仁]流。5[仁]親に子のなる。6[国]つ。7[因]時。8[仁]子の、[仁]二字ナシ。9[仁]らべ。10[因]ナシ。11[因]のアリ。12[仁]ほか、[因]外。13[仁]き。14[国]にアリ。15[仁]ば。16[仁]まして。17[仁]なアリ。18[仁]ナシ。19[仁]にアリ。20[仁]もアリ。21[仁]さ。22[仁]へ。23[国]せアリ。24[因]考異かむ。25[仁]わが子。26[因]さ。27[仁]も。28[仁]へアリ。

より外に見え通ふ人[1]のあらばこそ」とて[2]出で立つ。この家の内には物もなし。屋も皆毀れ果てにたり。かの父の遺し給ひし琴ども皆取う出て、又彈きし琴ども、この子して運ばせて、今[3]母[4]と諸共に行くに、蔦の事悲しとはおろかなり

　涙川淵瀬も知らぬみどり子[5]のしるべと頼む我や何な[6]り

など言ふほどに空洞に到りぬ。いと深き山路のほど堪へ難く聞きしかど、空洞とも覺えず、前一町ばかりの程[7]は明かに晴れて、同じ岡といへど、人の家の作れる山のやうにて、木立をかし[8]う所々に松杉花の木ども果物の木、數を盡くしてたき物たく、椎栗森[9]をはやした[10]たる如く、乘りて生ひ連なれ[11]り。すべて佛の現じ給へる所なれば、かゝらざらん人も住ま[12]しほしげに見えたり。空洞の前に、一間ばかり去りて、拂ひ出でたる泉の面に、をかしきほどの巖立てり。小松所々[13][14]あるに、椎栗どもの水に落ち入りて流れ來つつ、思ひしよりも、使ひ人一人得たらんやうに、便りありて覺ゆ。朝に[15]出で夕に歸りし暇のなさも休まりぬ。たゞ眼の前なれば、我も人も宿の蓄なる物を引き寄するやうにて、煩ひなくて、たゞうち遊びて明し暮らせば、此所に[16]て世を過ぐさんと思ひて、子に云ふ、「[17](い)まは暇[18](あ)めるを、己が親のかしこき事に思ひて、教へ給ひし琴習はし聞えん。彈き見給へ」と言ひて。りうかく[19]の風をは、この子の琴にし、ほ[20]そを

〔校異〕1〔イ〕も。2〔イ〕四字ナシ。3〔夜〕は。4〔イ〕ナシ。5〔イ〕を。6〔イ〕る。7〔イ〕ナシ。8〔イ〕く。9〔イ〕は。10〔イ〕ら。11〔イ〕る。12〔イ〕ま。13〔夜〕にアリ。14〔因〕考異三字ナシ。15〔因〕考異ゆき。16〔因〕考異ナシ。17 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。18 一字〔イ〕ニヨリテ補フ。19〔イ〕ナシ。20〔イ〕う。

1をば我弾きて習はすに、敏く賢く弾く事かぎりなし。人2けもせず、獣、熊、狼ならぬは見え来ぬ山にて、かうめでたき業をするに、たま〳〵聞きつくる獣、たゞこのあたりに集まりて、憐3びの心をなして、草木もなびく中に、嶺一つを越えて、いかめしき牝猿子供多く引き連れて来て、この物の4手を5聞きめでて、大きなる空洞を又館じて、年を経て、山に出で来る物6取り集めて住みける猿なりけり。この物の音にめでて、時々の木の實を7、子供も我も引き連れて持て来。かくしつゝ、この琴8弾くを聞くほどに、この子七になりぬ。かの僧父が弾きし七人の師の手さながら弾き取り果てつれば、夜晝と弾き合せて、春は面白き9種々の花、10夏は清く涼しき蔭に眺めて、花紅葉の下に心を澄ましつゝ、我が世11はかぎり12命13あらむにしたがはんと思ふ。琴は殘る手なく習ひ取りつ。この子變化のものなれば、14こ15の16手母にもまさり17て、母は18父の手にもまさりて、物の次々は劣りこそすれ、この族は傳はることにまさる事かぎりなし。かくて、この子十二になりぬ。かたちの麗しく美しげなる事、さらにこの世の物に似ず。綾錦を着て、玉の臺にかしづかるゝ國王の女御后19天女大人よりも、かゝる草木の根を食物20にして、岩木の皮を著物21にし、鬚を友22にして、木の（一）此のカ」洞窟を住處として生ひ出でたれど23、月もあやなえ光り添ひてなむありけ

校異 1 [俊]風アリ。2 [俊]音。3 [俊]み。4 [俊]音。5 [俊]改めて聞く。これは。6 [俊]をアリ。7 [玉]持ちアリ。8 [俊]考異をアリ。9 [俊]木草。10 [俊]秋。11 [国]の。12 [国]はアリ。13 [俊]のアリ。14 [俊]琴。15 [俊]は。16 [俊]考異音。17 [俊]ナシ。18 [国]ちゝ。19 [俊]二字ナシ。20 [俊]三字ナシ。21 [俊]と。22 [俊]と。23 [俊]もアリ。

る。母も、父君添ひていつきかしづきし時1よりも顔2かたち3はまさりて、めでたき事かぎりなし。この年頃、たゞこの猿どもに養はれて、こよなく便りを得たる心地するも哀れなり。水は、蓮の葉の大きなるに包みて持て來、薯蕷、野老、果物4、樣々なる物の葉に包みて持て來集まる。

かゝる程に、東國より、都に仇敵ある人報せむと思ひて、四五百人の兵にて、人離れたる所を求むるに、この山を見占めて、恐ろし5げにいかき者ども6一山に滿ちて、7眼に見ゆる鳥獸8、いろをも嫌はず殺し9食へば、鳥獸だに山を離れて逃げ隱るゝに、隱れ所もなき木の空洞に、親子籠りて、草木を10も食ふべき便り11なく、天地をも眺め12見るべくもあらず、いみじき時に、年頃養ひつる猿、猶この人を哀れ13と思ひて、武士の寢靜まるを窺ひて、靑葛を大きなる籠に組みて、いかめしき栗、橡を入れて、蓮の葉に冷かなる水を包みて來る日に、木の下15ごとに臥せる武士ども、猿の渡るとも知らで、木の葉のそよくに驚きて、「こゝに山の物の音す」とて、幾多の人火を燈して圍しるにせん方なし。母の思ふ16ほど、我が親はこの二つの琴をば、幸にも禍にも、極めていみじからむ時、17彈き鳴らせとこそ宣ひしか、我今よりまさりていみじき目を何時か見む、さは言へど、かくはかりにやはありつる、これこそかぎりなめれと思ひて、このなむ風の琴を取り出でて、一聲18彈き鳴らすに、19主の七人の20人の調べてし聲にいさゝか變らず。一聲搔き鳴ら

校異 1 [イ]二字ナシ。2 [イ]け。3 [イ]ナシ。4 [国]はアリ。5 [イ]き。6 [イ]二字ナシ。7 [イ]一字ナシ。8 [国]のアリ。9 [反]考異てアリ。10 [イ]ナシ。11 [イ]もアリ。12 [反]考異や。13 [反]考異に。14 [イ]ナシ。15 [イ]ども。16 [イ]やう。17 [イ]搔。18 [イ]搔。19 [イ]父アリ、[イ]俊蔭アリ、[イ]地にアリ。20 [イ]二字ナシ。

すに、大きなる山の木こぞりて倒れ、山逆様に崩る。立ち閣めりし武士1崩るゝ山に埋もれて、多くの人2死ぬれば、山さながら静まりぬ。猶明くる午の時ばかりまで、ゆ3ごむ〔〔遺言カ〕〕の手を4をり返し彈5く、その日、帝北野の御幸し給ふ6日にて、その山のあたりなど御覧ずるに、その日さぶらひ給ふ右大將の大殿、御馬を引き廻して、この琴の調べを聞き付け給7ひて、御兄の右の大臣に聞え給ふ、「この北山にかぎりなく響き上る8物の音9手なむ聞ゆ10。琴の聲と聞ゆれど、多くの物の音合せたる11聲にて、内裏にさぶらふせた風の一つ12そらなるべし。いざ給へ、近くて聞かん」と宣ふ。右の大臣、「かく13遙かなる山に、誰か物の音調べて遊び居たらむ。天狗の14するにこそあらめ。なおはせそ」と聞え給へば、大將、「御人などもかくこそすなれ。さらば翁雅一人離らんかし」と宣へば、例のす15まひ歩きなめりかし。さらば早う」とて、御馬添ばかり16して入り給ふに、武士17殘れるは、おほやけの18使の憚へに來ると思ひて、谷に落ち入19る20ごと山に逃げ隠れて、一人もなくなりぬ。二所續きて入り給ふに、いみじき物の音21響きまさり22つゝ聞ゆ。25谷にもつかず地にもつかず聞ゆる時に、怪しく聞きわづらひて、猶山の末をさして入り給ふ。向

校異 1 [イ]くづ物。 2 [底]亡せ。 3 [イ]いアリ。 4 [イ]押し、 5 [イ]さぬ。 6 [底]二字ナシ。 7 [イ]ふ。 8 [イ]琴。 9 [底]ナシ 10 [底]なるアリ。 11 [イ]やう。 12 [イ]族。 13 [イ]深き。 14 [國]考異わざ。 15 [イ]さび。 16 [國]に。 17 [イ]のアリ。 18 [イ]御アリ。 19 [底]り。 20 [イ]舞。 21 [底]のアリ。 22 [イ]て。 23 [イ]大。

ひたる峰すぐれて高し。その峰の空に1聞ゆ。いかめしう茂りて、森の2ごと茂りて見ゆる3中にこの琴4今の琴聞ゆ。かの峰をさし5入り給ふに、6空につける山に、獣は、衾を敷きたらんやうにある時に、7兄8の大臣聞え給ふ、「さればこそ聞9きつれ。むくつけくもあるかな。10猶帰りなむ。いざ給へ」と宮へ11ば、「12悪き事をも宣はする13かな。これこそ面白けれ。深き山に獣住まずば、何14か山と云はん。清涼山に入るとも、兼雅15獣に施すべき身かは。この獣害の心なすや16と17見給へ18」とて、御馬を走19り20内へ入り給へば、21飛びに飛ぶ御馬にもとより22も23乗り給24ひつれば、雲につきて翔るやうにて入り給ふに、御馬添も更に劣らず、その麓に止りぬ。兄の大臣は御馬もおとりて、え追ひ著き給は25ず止り給ひぬべけれど、26昔父母の賀茂詣の時騒ぎ宣ひしを思し出でて、亡き御影にも、さる獣の中に一人入27りて止りぬるとは見え奉らじと励み給へど、彼は大将におはす28れば、胡籙負ひたれば、獣も去り聞ゆ、この大臣はさもおはせねば、いと恐ろしう29、30猶え登り給はず。大将はいみじき31丘32を左33く越34えておはするに、獣は35やう

【校異】1安二字ナシ。2[イ]五字ナシ、国ごと。3[イ]なる。4[イ]ナシ。5[イ]てアリ。6[イ]外。7[イ]何。8[イ]ナシ。
9[イ]こゑ。10イたゞ。11[イ]ど。12国惜。13[イ]ナシ。14[イ]をアリ。15[イ]らアリ。16イナシ。17安試み。18安おアリ。19イらせ。20イ打ちて。21[イ]五字ナシ。22国ナシ。23[イ]の。24[イ]へ。25イで。26[イ]ナシ。27[イ]れ。28[イ]二字ナシ。29[イ]てアリ。30安考異ナシ。31安山、国考異山尾。32[イ]など、国をば。33[イ]つ。34[イ]ク。35[イ]なほ。

貝を伏せたらんやうに、同じ上に立ち籠みたるに、分け入りて、この琴の音を尋ねて、空洞1 2ある杉の木の下にうち寄りて、馬より下りて見廻り給ふ。この木の前3には、萬の木懐かしう、苔を敷き砂を撒きて、清げなる蔭に立ち寄りて謦作り給へば、この空洞の人4に琴を彈き止みて、怪しがりて見給へば、いと清げなる人立てり。子の言ふやう、「いと珍らしく怪しきわざかな。物の音を聞きて、天人の下り給へるにやあらむ」と言へば、5名を聞かまほしくて、苔の7簾垂の内ながら、「かれは何8の人のおは9します10にかあらん。熊狼11を友達にて、世の中12人も參うで來通はぬ山懐に、13いかで入らせ給14へるならん」客人、さればこそ人ありけ15りと思して、「かくて人住み給ふと聞きて、眞事虚事見給へ16に參うで來つるなり」17いらへ、「この年頃この山に籠り侍れども、から尋18ね訪はせ給ふ人もな19けに、何20事によりてか尋ねおはしましつらん」と聞えて、苔の上に出でたり。衣はたはかなき單の萎えたるを着たるに、顔かたちは21たゞ光るやうに見ゆ。怪しみ驚きて、客人、「今日は北野の22行幸なり。御供に仕うまつれるに、面白き物の音の聞ゆれば尋ね參23る」とて、行縢を24解きて苔の上に敷き、「此方」とて据ゑ、我も居給25ひて、事の由を問ひ給ふ。

校異 1 [イ]のアリ。2 [夜]なし。3 [夜]ナシ。4 [イ]ナシ、[天]は。5 [イ]狗。6 [イ]は。7 [イ]亂れ。8 [イ]ナシ。9 [イ]二字ナシ。10 [夜考異]るアリ。11 [イ]なし。12 [イ]のアリ。13 [イ]三字ナシ。14 [イ]ひつ。15 [イ]れ。16 [イ]は、[イ]むとて。17 [夜考異]いで。18 [イ]ね。19 [イ]き。20 [イ]ナシ。21 [イ]二字ナシ。22 [イ]みゆき。23 [イ]りつる、[國]り來つる、[安]りつ。24 [イ]三字ナシ。25 [イ]ふ。

「そも／＼獣といへど1、2虎狼ならぬは住まざ3なり、鳥といへども、鷲山鳥ならぬは4住5まぬ所に、何の御心にて、稚きほどには宿り給ふ6ぞ」子のいらへ「この山に罷り籠7りにし事五歳よりなり。その後跡絶えて罷り出づる事なし。その籠り8侍り9しやうは、思ふ心ありてなり。10こま／＼に聞ゆべきにも侍らず」と聞ゆ。客人、「こゝら激しき道11にうち越えて、深き山の奥12を疎ましき獣の満ち／＼たる中を、尋ね13たる心14をばえ疎に思さじ。なほ宣へ」と責め15問ひ給へば、「はか／＼しくも身の上をえ知り侍らず、母に侍る人に、せめて問ひ侍りしかば、父母に一度に後れ侍り16にしかば、あひ顧みる人なくて、心細き住ひをし侍りけるに、はかなき人の、物の便りに立ち寄り給へりし17になむいさゝか返答など聞えしに、生れにしとばかり語られ侍れども、そもはか／＼し18うも聞19き侍らず」と聞ゆれば、ありし京極20の事をふと思し出でて、「なほ確かに宣へ。さてその御親はおはするか、おはせぬか。怪しう、宣ふやうにては、稚き21ほどより、かゝる怪しき22所／＼おは23しけれど、さらに24此所におはすべき人になむ見えぬ25へ。たゞあらむまゝに宣へ」と宣へば、子のいらへ、「此所に籠り侍りし事は、さてはかなき様にて出で26まう

校異 1[イ]もアリ。2[イ]熊。3[内]考異るアリ。4以上十八字[イ]ナシ。5[イ]み。6[イ]ナシ。7[内]考異れり。8[イ]二字ナシ。9[内]考異にアリ。10[イ]たゞ、[イ]たう、[内]たふ、[イ]たに。11[イ]ナシ。[内]を。12[国]に、[内]ナシ。13[内]て来アリ、[正]来アリ。14[イ]ばへは。15[正]二字ナシ。16[内]ナシ。17[イ]かば。18[正]く。19[イ]こえ。20[内]考異にてアリ。21[イ]時。22[イ]所に、[イ]所ゞに、[イ]はどに、[イ]所、[国]所々に。23[イ]すな。24[正]三字ナシ。25[国]なアリ。26[イ]三字ナシ。

で1來2に侍りにけ3る身を、また知る人4もなくて、年頃もてわづらひて、三つばかりになり侍り5にけるほどになむ物覺6ゆるに侍りける。いかでこれを養はむと思ひ7侍りしかど、すべき方なく8て見給9へしに、たゞ明け暮れ、いかで鳥の聲も10せざらむ山に籠りにしがな、今や11恐ろしく疎ましき目を見むずらんと、さかしらに人あり12て見て人の窺ひなどするに、尋ね出でられて、親の御面伏せ13、我が身もいとどいみじくならむ事と嘆き侍りしかば、年頃に14とに籠り侍るなり。木の實葛の根15あな16かを、さても養はむと、願ふ所に思17ひ給18へて、山の見ゆる方を尋ね參うで來て、この空洞を見出19でて侍りしに、しかじかなむ侍りし。いかでか20は21満めんと思ひ侍りしに、童出で參うで來て、22から（）捕ひ23あけて住ませ侍らするに、また自から獸など、木の實葛の根など取り參うで來て24、25げにこの願ひ26 27侍りしに28似侍29り30」と言へば、「かの御親未だ見奉り給はずや」子のいらへ、「31すべて見侍らず。母もその人とはえ知り聞えず。たゞ、父母に後れて心細き住ひせしほどに、その時の大臣、家の前より賀茂に詣で給32ひたりしかば、見33に34走り出でたりしに、35(36汝37いかて來べきにや、38物39)覺えぬ人に見合せ聞えたりしかど、年かへ

校異 1 [イ]ナシ。2 [イ]ナシ。3 [イ]り。4 [イ]ナシ 5 [皮]考異にアリ。6 [イ]え、[国]ゆる事。7 [イ]てアリ。8 [皮]ナシ。9 [イ]ひ。10 [皮]考異聞え。11 [イ]くアリ 12 [イ]き、[国]と。13 [皮]にアリ。14 [イ]こ、15 [イ]のアリ。16 [イ]る。17 [国]う。18 [イ]ふ。19 [皮]考異し。20 [イ]掃き。21 [イ]なしアリ。22 [イ]は。23 [イ]の。24 [皮]母子の命養ひてアリ。25 [イ]母子。26 [皮]満ちアリ。27 [イ]満ち、[国]侍りし事。28 [イ]ナシ、[国]見て。29 [国]る。30 [皮]考異しアリ。31 [イ]二字ナシ。32 [イ]ふ。33 [国]んとて。34 [イ]端に。35 以下十字[イ]ニヨリテ補フ。36 [皮]きんだちか。37 [イ]出で。38 [国]ナシ。39 [イ]もアリ。

るまで知らざりしに、今思へば、今日明日になりにけるに、其所なりし人の、さる事あ1めりと教へ2しをなむ聞きしに、その後、その人影3も見え給はずなりにき。いと4憂き事なれど、我亡くなりなば、聞き置けとてなむ5と申さ6るゝ。されば、すべてえ知り侍らず」と聞ゆ7るに、悲しう哀れに思さるれど、氣色にも出だし給はず。恥かしと思はゞこれより深くもぞ入ると思せば、「いと哀れに悲しき事8もあるかな。なほかくて籠り居たらむと思す9る。また例の人のやうにてあらんとや思す」と宣へば、子のいらへ、「何10か11、世は憂きものにこそ12侍りけれ。人の身を受けながら、如何に契り置きて、かく疎ましき際の中に、それを友とし13て、彼等に養はれて、今日やうやうと身を施しつべく、魂14の休まる時なくて、恐ろしく悲しき日を見侍るらむ。前の世の15罪思ひやられ侍れば、天地の免されなき身に侍16るめり。いよいよ深く、むづかしき頭剃し捨てゝ、罷り罷らむとなん思17ひ給ふる」と言ふ樣の、惜しく淸ら18な19るほど20十五六ばかりと見えて、いみじうめでたきを、他所人に聞21き見むだに22有るに、え塞き23あえ給はず。ためらひて、「げに24たも言はれたる事なれど、何でふ人かかゝる住ひにて世には經ん。25頭を剃る人も、26師に就27きて、28僧と

校異 1 不ナシ。2 不ナシ。3 不にアリ。4 国浮きたる。5 不ナシ。6 国れ侍れど。7 不二字ナシ。8 国にアリ、不どなにアリ。9 不か。10 不にアリ。11 不はアリ。12 不あた。13 不ナシ。14 不ナシ。15 不報ひ。16 不二字ナシ。17 図考異う。18 不かアリ。19 国り。20 図はアリ。21 不こゑ。22 二字ナシ。23 不二字ナシ。24 不さ。25 不擬置け。26 不佛。27 不い。28 不そら。

なること尊き事なれ。1さてこそまた山籠りもすれ。2今日の獸の樣は3堪ふべしとやは見えたる。かた4く、こそ5かく見許す6あらめ。たゞ京へ出で給へ。かゝる物に害せら7れぬる人は、菩提も8取り難きものなり」と宣9へば、子のいらへ、「かくて侍らんよりも、さてしもこそ中々に見入るゝ人なくて侍らんは、益々堪へ難からめと思10ひ給11ふれば」と言ふ。「そは、かくて籠りおはせん人を、あながちに勸め出だして、見入れぬやう12はありなんや」と宣へば、「母に侍る人に語らひて13聞えん」とて、奧へ入りて、「かく宣はする人なむおはする。如何聞ゆべき」と言へば、「かくゆゝしき樣を見初め給14ひつらん人の、何とか思すべき。口惜しき15しな16に思ひくたし給ふとも、17もとよりのがれ所なく18こそあらめ、又御心さ」と言へば、「まろが思ふやうは、この山に住む19事八年になりぬ。憂き事も悲しき事も思ひ馴れにたり。何し20にか出でん、かくて過ぐしてむと21なん思ふ」と言へば、「さればこそさは聞ゆれ。かく憂き身なれば、今更22によろしき事もあらじ。かく珍らしき有樣をうち見給ふほど23宣ふにこそあらめ、深うもあらじ」と言へば、出でて聞ゆ」「このもて煩ひ侍る人、今更に何でふ世づいたる目をか見む。山の見る目も恥かし24と

校異　1[イ]四字ナシ。2[イ]稀有の、[イ]三字ナシ。3[イ]尊、[イ]たゆたふべ。4[イ]へ。5[イ]二字ナシ。6[イ]もアリ。[因]方もアリ。7[因]考異る。8[イ]得。9[イ]ふ。10[国]う。11へ。12[イ]に。13[イ]聞き。14[イ]へら、[イ]へ。15[イ]さま。16[イ]三字ナシ。17[イ]理。18[イ]より。19[イ]も。20[イ]ナシ。21[因]考異二字ナシ。22[イ]ナシ。23[イ]にアリ。24以下廿三字[イ]ナシ。

て勤きげな1申されば、一人はまた何のかひも侍らじ」と2言ふほどに、日も傾けば、「3何か強ひ4て千聞えむ。契り深くは又も参り来なん。今日は御供にさぶらひつれば、百居籠りなりとて歸り給はん、便なかるべしとて立ち給ふほどに、この猿六七匹連れて、様々の物の葉を5葉腕にさして、椎栗柿梨薯蕷野老などを入れて持て来るを見給ふに、いとゞ哀れに、さばこれに養はれてあるなりけりと、珍らかに6思さる。例ならぬ人のおはすれば、猿7驚きて、うち置きて逃げぬ。大将歸り出で給へば、8丘一つ9越え給ふほどに、10馬添も、右の大殿も、さる11嶮の中に入り給ひぬる覺束なさに、尋ねおはする12、見付けて、「さて如何ありつる」と宣へば、「尋ね得べくもあらず。谷に聞ゆ、峰に聞え高う登れば地の底になり、谷に降れば雲の上に聞えて、獣は具を伏せたるやうに13、道しなければ、分け煩ひてなほ参うで来ぬる。なほ辿る〳〵と思ひ給14へつれど、御供に侍15りつるひが〳〵し16きになむ」と聞え給へば「さればこそ。天狗な17なり」とてうち18續きて出で給19ひぬ。上は、「怪しくて失せぬる朝臣たち20かな。好き女の有所21聞きて、好き者どもは往ぬるな22らん」とて歸らせ給ひにけり。昔若小君と聞えしは大將、兵衛佐23にておはせしは右大臣にな24むおはする25か。かくて道のまゝ26哀れにいみじう思ひおはす。各々歸り給ひて、つく〲と思し續くるに、飽かず27悲

校異 1 [内]侍ら。2 [イ]思。3 [イ]なかに。4 [イ]ナシ。5 [イ]蜘蛛手。6 [イ]はアリ。7 [国]どもアリ。8 [イ]山のアリ。9 [イ]たて。10 [内]御アリ。11 [内]烈しきアリ。12 [イ]にアリ。13 [内]にアリ。14 [イ]ひ。15 [国]らざ。16 [イ]き。17 [イ]二字ナシ。18 [イ]連れ。19 [内]考異ふ。20 [イ]あ。21 [内]考異なアリ。22 [イ]二字ナシ。23 [イ]と。24 [イ]り。25 [イ]ナシ。26 [内]にアリ。27 [イ]をか。

しう、如何にして迎へ出でんとのみ思ひたばかりて、御方々へも渡り給はず、すべて異事覚え給はねば、心も浮き立ちて、先づ率て出でん所を思し廻らすに、一條に、廣く大いなる殿に、様々なる御殿造り並れて、院の帝の女三の宮を始め奉りて、さるべき御子たち上達部の御女、多くの1仔人まで集めさぶらはせ給ひけれ2ば、此所には、3さかしき中に迎へ出でじ、と思して、三條堀川のわたりに、又大きなる殿、御女の東宮に參り給4ふべき御料と思して、年頃5造り磨き、様々の御6料ども7も整へ置き給へる8に、其所に迎へ9は出でんと思して、しつらひ置きて、三日ばかりありて、御供に限りなく睦まじきかぎり10人二人、我11と御馬に乗りて、女の御料に袿一襲、綾小袿指貫、子の料に絹の指貫、摺狩12衣、13袿袴など袋に入れて持たせて、何處とある人に14は宣は15で、乾飯16たゞ少し御袋に入れて、いと忍びておはします。言ふよしなき山を越えて17おはしまして、かの木の下におはし着きて、しはぶき給へば、子出で來て見て、「先におはしたりし人こそおはしたれ」と言へば、「いでや、あな恥かし。何人にはおはすらむ。怪しくて、又さへ見え奉り給ふこそ」と言へ18ば、「19かく、ふりはへ給へるに、いかで隠れん」とて出でたり。一所入り給ひて、「20女は見知らじ。21君に對面せむ」と宣へば、「さなむ」と母に語れば、「やがて亡せぬる人にてこそあらまし

校異　1［仔］御アリ。2［仔］ど。3［玉］騒か。4［仔］へる。5［仔］御アリ。6［仔］調度。7［仔］ナシ。8［仔］ナシ。9［仔］ナシ。10［玉］のアリ。11［illegible］。12［仔］ぎぬ。13［仔］打。14［仔］ナシ。15［仔］せアリ。16［近］二字ナシ。17［illegible］考異六字ナシ。18［仔］ど。19［玉］こと。20［仔］ましまさば、［仔］夜か。21［国］持アリ。

か。何しにか知らせ奉る」と言へ1ばかひなし、入りおはして、「先に。も聞えむと思ひしかど、まだきに聞えらたば、かうもぞあらがひ給3ふとてなむ4ぞ、加茂詣の御供にて見奉りし。その時は、聞えしやうに、求め騒がれけるに、5參りたりしかば、いみじうむづかり給6ひて、おはしまし7ゝかぎり片時も御身8放ち給はず。隱れ心ある人な9り。逃すなとて、いさゝかも立ち10退けば、人を付けて守らせ給ひしかばなむ、如何ならん世に參り來んと思はぬ時なかりしかど、自らならでは、おはせし所見たる人もなくて、え聞11えざりしに、殿籠れ給ひて後、12住み給ひし所を見しかど、いとゞ野13(の)やうになりて、尋ね聞14ゆべき方もなかりしかば、行方なく覺束な15きを年頃思ひ嘆きつるは、16さば、かうておはしけるなり」と泣く〳〵宣へば、恥かしさ言はん方なけれ17ど、むげに聞えざらむも若々しければ、この苔の簾のもとに寄りて、「こよなき程の事なれば、かく宣はするも覺束な18(な)がら、夢のやうになむ、さもやありけんとばかり覺え侍19る。怪しかりしほどに、かゝる人さへ出で來にしかば、いとゞ所狹く、これを人に見せざらむ住處もがなと思20ひ給へしほどに、かく世離れ果てて侍る。昔をだに類な21く身と思22ひ給へしに、またかかる事も侍りけり」と泣く〳〵言へば、「何かそは。世の常の樣にて、淸げなる住ひし給はんを見ましかば、昔の心ざしは失は2324

校異 1 不ど。2 不ナシ。3 因考異はむ。4 不我アリ。5 国歸りアリ。6 不ふ。7 不ナシ。8 不をアリ。9 不る。10 不急げ。11 不か。12 以下廿二字不ナシ。13 不ニヨリテ補フ。14 不えつ。15 不さ。16 不二字ナシ。17 不ばと。18 国ニヨリテ補フ。19 不り。20 国ら。21 不き。22 国う。23 因考異れアリ。24 不ぬ。

•むものから、心憂からまし。世を思し離れにけ1•ると、この御住處になむいとゞ深くは思ひつる。とまれかうまれ、御迎へにとてなむ參り來つる。此所にもおとらず、人目稀なる所2し置きたり。其所にて覺束な3(か)らず4•を開え5•情る•け•む」と宣へば、女6「げにいと好き事に侍れど、今7•は8かぎりに思ひ入りにし山路を、今更に9•思•ひ•給へ歸らん空も恥かしう侍るべき。たゞかの人ばかりを、ありけりと思し置かれなむ10•を、後安く思ひ給へ11て、ひたみちなる行ひに思ひなりなむこそ嬉しからめ」と動きげもなければ、男君、「さも思さるべき事なれど、この人も年を數ふるに十12•二ばかりにこそなるらめ。大きさ掟こそ賢くとも、人の世に經る有樣かぎりあるものなれば。率て出でて交らひなどをこそせ13•さ•せめ。その後見も誰か14•せ•ん。親なき人は身もいたづらになるものなり15。昔千蔭の大臣のたゞ一人子を繼母に計られて、今は音16•めも聞えずとなん云ふな17•る。この人に就きてこそ18かゝる住ひ19•も思し立20•ちけるを、これをいたづらになさぬに思し取りて、猶出で給へ」と切に宣へ21•ど、女22猶あるまじき事に思23•ひ•離•れたれば、「吾兒一人を率て出でても、此所に留り給24•ひて、靜心なく通ひあ25•るかむに、知らぬ人なく皆知りなむ。26吾兒27•をかく見置きて、28•か

校異 1因り。2囗をアリ。3囗ニヨリテ補フ。4囗ナシ。5国侍ら。6因君アリ。7囗も、8因とアリ。9国思う給へ、囗御前。10囗ナシ。11囗なりアリ。12国三。13囗二字ナシ。14囗二字ナシ。15囗けりアリ。16囗に。17囗り。18囗はアリ。19囗を、囗ナシ。20囗て。21囗ば。22因君アリ。23囗ふるな。24囗ふ。25囗り。26囗又アリ。27囗も。28囗わ。

れも心のどかにえあるまじ。この日頃のほどだに、魂[1]の鎮まる方なく思ひ[2]いられつるを、早や聞[3]えそゝの[4]かせ。年頃知らでまどはし[5]かしつるも我が罪にあらず。子も親にしたがひしなり。今は[6]孝すると思ひて出だし奉れ」と宣へば、子もかく宣ふを忝けなく、何れも同じ親[7]なれば、さる孝の[8]子の心にて、母に、「かゝる淺ましき所にだに、稚なき身一つを頼み[9]て入り給ふ[10]に、今は[11]また出で給はん事も、己が故と思せ」と切に言ひ、大殿も、「一つ所にあら[12]じと思さば、參り來でもあらん。たゞこれを思ほす所にて[13]」と切に宣へば、[14]この御心ざし[15]はすげにた[16]しと[17]見てしかば、げにこの子につ[18]きて[19]かゝる所にも來すやはありしと思ひなして、ともかくも言は[20]れ[21]と弱りたる氣色を[22]「今は又否[23]と宣ふとも、御心に任すべきにもあらず」と、たゞ急かしに急がして、衣取り出でて著せて、「そゝのかし給へば、[24]昔にもあらずな[25]がら出で立つ。この遺言の琴どもは空洞に隱し置きて出でて行く。母をば乘り給へりつる馬に乘せて、我も子も後先につきて押へな[26]どして、人留め給[27]ひし所までおはし著きて、其所にて、二人の乘りたる馬に[28]我と子とは乘り給ひて、侍二人なば[29]母の馬につ[30]きて、秋の夜一夜出で給ひて、曉方になん三條の大路より[31]

校異 1〔異〕考異ナシ。2〔イ〕め。3〔イ〕き。4〔イ〕ありべをアリ。5〔イ〕ナシ。6〔イ〕孝。7〔異〕考異の事アリ。8〔異〕心の子。9〔イ〕ナシ。10〔異〕考異ナシ。11〔異〕ナシ。12〔イ〕ん。13〔イ〕はアリ14〔イ〕二字ナシ。15〔イ〕も。16〔国〕さし。17〔イ〕ナシ。18〔イ〕け。19以下十九字〔イ〕ナシ。20〔イ〕ず。21〔イ〕ず。22〔異〕口給ひてアリ。23〔イ〕み。24〔異〕我。25〔イ〕つゝ。26〔イ〕ほ。27〔イ〕ふ。28以下馬ニマデ十九字ナシ。29〔国〕女君。30〔イ〕け。31〔国〕はアリ。

北、堀川より1西なる家におはしつきけ2る。御馬添に口固め給3ひて、「若しかゝる事世に聞えば、汝らをさへ罪にあてん」と戒め給ひて、御手づから、しつらひ置き給4ひし所に率て5入り給ひて、人に知らせ給はねば、御殿油も參らざりければ暗うて6も見えねば、御手づから御格子一間あげて見給ふに、秋の朝ぼらけに、玉と磨きしつらひ7たる所に、ことなる飾りもなく8やつれ、9なかなかなる樣なれど、言ふ由なく持てはやされて、清げに10類な11く見ゆるを、天女を12率て13下したると驚かれ給ふ。子14のはかなき水干裝束なれど、かたち勝りていとめでたし。女は、年頃にいみじうや15つれぬらんと思ふに、いとまばゆき16にて恥かしきに、母をも子をもつくづくとま17もり給へば、せめて暗き方18に入り19行けば、我も奥へ入り給ひぬ。「吾兒は其所に20。眠たからむ」とて、御几帳のもとに臥せ給へど、端の方に21出で22給ひ。御前の有樣を見る。

[詩詞]23この殿は檜皮の大殿五つ、廊渡殿、さるべき宛々の板屋どもなど、あるべきかぎりにて、倉町に御藏いと多かり。

かくて後、大殿一條殿にあからさまにもおはせず、こと御心なし、大人廿人ばかり、髫髮下24使ひなどいと

[校異]1[イ]はアリ。2[イ]り。3[イ]ふ。4[イ]ふ。5[イ]二字ナシ。6[イ]ナシ。7[イ]給ひアリ。8[イ]破れ、[イ]きこゆれ。9[イ]ほのか。10[イ]たひ。11[イ]る。12[イ]二字ナシ。13[イ]おは。14[国]も。15[イ]ぶ。16[イ]ま。17[イ]ば。18[イ]へ。19[イ]給へ。20[イ]寝よアリ。21[イ]居アリ。22[因]て。23[因]考異此所は三條殿。24[因]仕へ。

多く召し集めて、遣はせ奉り給ふ。夜晝昔の事を悔い、行く先の事を契り、哀れに飽かず思さるゝまゝに聞え書し給ふ。北の方御年三十に少し足らぬほどな1る。御かたちたゞ今盛りにて、思ほす事なく2ておはするまゝに、光を放つやうに見え給3ふ。子4はた更にも言はず、この世の人にも似ず、いと有難く類なし。琴をば更にも言はず、5殊更も、さるべき師ども召して、笙横笛6も習はせ給ふ。彈物は、北の方さる上手におはすれど7、琴の8なかりしかばこそあれ、9箏和琴など習はし給10ふ、御暇今は11殊におは12せ13ぬ14ど、殿の出で給15ひつ16る暇などに、氣色ばかりの17事の様を聞え給へ18は、19いと勝れ20て彈き取り給ふ。何事も師に二度問ひ給はず、21笛22もども23もいと華やかに心ありて、書は書を二24三卷も讀み、琴25笛を五六調26と吹き彈き取り給へば、「大將は、何處よりかゝる子を尋ね出でて、世の物の上手27 28生し立て給ふらむ」と言ひのゝし29る。名高くなり給ひぬ。京に30出で給ひし三年がほどに、すべて31せぬ事なくなりぬ。大將殿たゞこれをかしづき思すより外の事なし。

十六といふ年二月に冠せさせ給ひて、名をば仲忠と云ふ。上達部の御子なれば、やがてかうぶり32賜ひて、

校異 1 イり。2 イナシ。3 イひ。4 国はアリ。5 イ異才。6 国ナシ。7 イもアリ。8 イかぎりアリ。9 イこと。10 イひつ。11 国異所。12 国さ。13 イね。14 イば。15 イへ。16 イば。17 イ琴。18 イど。19 頭考異二字ナシ。20 イナシ。21 イ吹く。22 イナシ。23 イナシ。24 頭卷アリ。25 イ書。26 イも。27 イをアリ。28 イ押。29 イり。30 イ率てアリ。31 イ世にアリ。32 イせさせ給。

殿上せさせ1、上も東宮も召しまつはし2、うつ3くし4み給ふ。5大將に、「何處なりし人を、からにはかに、いと俊にては取り出でられたるぞ」と問はせ給へば、「年頃6は侍7る所も8知り給へざりし9、一年見出でて侍10り。物など少し心11みて後まじら12はせんと申ししかば、さも侍る事なりとて籠め侍りつるなりと」奏し給ふ。「誰が腹ぞ」と問はせ給へば、「故治部卿俊蔭が女の腹に侍13り」と申し給へば、上驚かせ給14ひて、「何如に15ぞと、三代の手は傳へたらむ16な。かの朝臣唐土より歸り渡りて、嵯峨の院の御時、この手少し傳へよと仰せられ17ければ、たゞ今大臣の位を賜ふとも、え傳へ奉らじと奏し切りて、罷18出でにしより參らで、中納言19なるべかりし身を沈めてし人なり。さるはいみじき有20職なり。たゞ女一人有りける、年七歳より習はしけるに、父の手にいと多く勝りて彈きければ、父この子は我が面起しつべき子なり。これが手より誰21〳〵習ひ取れと22なん言ひけると聞きしかば、俊蔭が在りし時に消息などして、亡くなりて後尋ね訪ひしか23ど、無くなり24にたり25しと聞きし26は、其所に隱されたるにこそありけれ。いと興ありや、27かの手は三代はまして賢からむ」と宣は28すれば、大將、「さ侍29るべけれど、異なる事30も侍らざるべし。

校異　1［イ］給ふアリ。2［イ］うアリ。3［イ］く。4［イ］び。5［イ］上アリ。6［イ］ナシ。7［因］り。8［イ］えアリ。9［イ］をアリ。10［国］る。11［イ］え。12［国］ひ。13［イ］る。14［イ］ふ。15［イ］ぞ、［国］そは、［同］考異二字ナシ。16［イ］仲綱。17［イ］三字ナシ。18［イ］り。19［因］にアリ。20［イ］職、21［イ］もアリ。22［イ］二字ナシ。23［国］ば。24［因］考異ナシ。25［イ］ナシ。26［イ］かば。27［因］考異こ。28［因］考異へ。29［イ］り。30［イ］どアリ。

代々のついでとして一手二手などもや仕うまつらむ」と奏し給ふ。かくて後なむ、さばこの三條の北1方は俊蔭の女と人知りける。「年頃は如何なりける人ならん。いみじき色好みをかく、あからめ2せさせ奉らぬ事」と3怪しがり聞ゆるもあり。又「賤しき者を取りすゑて、言ふがひ4なくまつはさ5れ給ふぞ、色好みの果てはかくぞあるや。怪しき者に止まるとは」など6目易からず聞えける。このな7(かた)だ(〇仲忠)帝も東宮も片時離れさせず召し使はせ給ふ。琴は、さる世の一なれば、た8ふくにせねど、異遊びは、仲頼、行正が手を傳へし物の音なれど、この師の手にも似ず、物よりことに抜け出でて、何處より誰が手を傳へけるぞとのみ聞えたり。かたちよりはじめ、9まじらひたる樣など、もどかしき所10なく、かどかどしく、目も及ばず勝れ11出でたれば、上達部御子たちよりはじめ12(た)13てまつり14、褒め愛で給ふ。年十八にて侍從になりぬ。その年の五15節の試の夜、16后宮よりはじめ奉りて、多くの17女御更衣參う上り給へるにも、この出しの五節18かたも用意はかたくうちふるまひ19つるも、人にはことにて、上御心20留めて御覽ず、舞果てて、曉方に、21先づ時蔭な22る(〇仲)頼行正かやうの人々召し出でて、この仲忠も召して、23奏する際も人に24は勝れて、ことに聞ゆれば、上聞召して、御前に召し出でて、「常よりも物の音まさるべき曉25になむ26ある。かの三代

校異 1[イ]のアリ。2[国]もアリ。3[イ]もアリ。4[イ]もアリ。5[国]せ。6[イ]ぞ、[底]目。7一字[イ]ニヨリテ補フ。8[イ]う。9[イ]ふ。10[イ]もアリ。11[イ]出で、[底]ナシ。12一字[イ]ニヨリテ補フ。13[イ]ナシ。14[国]てアリ。15[底]節。16[イ]后。17[底]女。18[国]のアリ。19[イ]へ。20[イ]と。21[底]松方。22[イ]か。23[イ]唱歌。24[イ]ナシ。25[イ]ナシ。26[イ]めり。

1（の）手今宵つかうまつれ」と仰せられければ、畏まりて仕うまつら2んは、父大殿、「なほ手のかぎり仕うまつれ。度々仰せ事承は3らぬ、いと畏4う」と切にそゝのかし給へど、とかく躊躇ひて、御前より賜はせたるせた風の琴を、五箇の聲にて調べて5彈くに、面白くめでたき事更に類なし。聞き給ふ人々涙こぼれて哀れがりめで給ふ。上、「俊蔭の朝臣、唐土より6歸りて、嵯峨の帝の御前にて仕うまつりしをほのかに聞きて、又かかる事7にはあらじとのみ思ひしを、これはこよなくまされり。いかで8母の琴を聞かむ。嵯峨の院9なむかの俊蔭10が琴は11よく聞召し置きたらん。仲忠12出でまさりて聞召し比べさせむ13かし。かの14の父の朝臣の15事をいとほのかに、二聲とも聞かずなりにしかば、いと覺束なくて過ぎにしも、かれが音に若し16も似たる事もやあると聞き渡れども、夢ばかり覺えたるもなきを」など、いと切に思したり。「かの里に隱れたらん人。暫し參らせて、職の曹司の方などにやは住ませ給はぬ、さらば渡りて聞きてんかし」など宣はす。大將いたく畏まりてさぶらひ給ふ。

かくて仲忠の侍從何事にもすぐれ17、たゞ18す世に類なく、拔19け出でたる人なれば、萬の上達部御子たちも、聟にせむ〳〵と、思し餘る20は、御氣色取り給へど、更に承け引かず、殿にのみあり。人知れず思ふ事は、

校異 1一字〔イ〕ニヨリテ補フ。2〔イ〕ねば。3〔イ〕り。4〔国〕し。5〔イ〕やがてアリ。6〔イ〕罷りアリ。7〔イ〕世アリ。8〔イ〕かのアリ。9〔イ〕二字ナシ。10〔イ〕二字ナシ。11〔イ〕二字ナシ。12〔イ〕率て參。13〔因〕考異昔。14〔イ〕ナシ。15〔イ〕琴。16〔イ〕ナシ。17〔国〕給ひアリ。18〔イ〕今。19〔イ〕き。20〔イ〕る。

左大將殿にこそさるべき世の有職は籠りためれど、又をかしき君だち數多ありて心もやらめ、其所ならではあらじなど思ひて異心なきなるべし。年かへりて八月に、この殿に相撲の還饗あるべければ、大殿北の方に聞え給ふ。「饗の事すべきに、早やかつけ物の事1せさせ給へ。この度の事、此所に2て初めてする事なるを、心ことに設けの物など3いたはりてし給へ。例は中將より始めて、官の人皆祿は取らするを、今年は其所に物し給ふと聞4く人も心にくく思はんものぞ。5四府の主たち6も設け給へ。7例は中將には女の裝束一く8ゝりづつ、少將には白き袿9一襲袴をなむ物す10かを、この度は中將に11なほ細長12を添へて、少將には綾の袿三重襲13の袴などを設け給へ」と聞14え給へば、「いさ、如何にする事にかあらん」と宣へれ、物の色し樣など、なべての15物のやうにもあらず、すぐれてめでたくし出で給へり。

[畫詞]16三條殿17に、殿北18方並び19ておはします。御臺參れり。侍從內裏よりま20うで給へり。國々の21 22莊より、23こう絹布など持て參れり。御いそぎの料にとて、綾、羅、練24絹など多く奉れ25たれば、御匣殿する人御前26にて計らひ定む。27うめ(○染)草何くれの事28(定めあへり。)庄々の物どもは、

[校異]1[不]をアリ。2[不]し。3[陽]考異もアリ。4[国]き。5[不]衛。6[国]のアリ。7[不]れ。8[不]だ。9[不]へりさね。10[不]る。11[不]はアリ。12[不]ナシ。13[不]かさねアリ。14[不]き。15[不]世のアリ。16[国]此所はアリ。17[国]ナシ 18[不]のアリ。19[不]にアリ。20[不]か。21[国]御アリ。22[国]莊。23[国]國府、(○又ハ貢)、[不]たう(○唐カ)、[陽]太布。24[陽]のアリ。25[不]二字ナシ。26[不]まで、27[不]そ。28以下五字[国]ニヨリテ補フ。

一條殿にも分ち添ひ給ふ。おはする事は1ただ2てなければ、御方々に思し嘆き、様々に3（4開キ籠かし給ふもあ5はれ6と、すべてただ今はこと人に物）聞えむとも思した7ゝず。

あ8かじ（〔饗〕）廿二日なれば、その日9々になりて、いとになく設け10させ給ふ。御前に砂撒かせ、前栽植ゑさせ、階新しく、けうて、寝殿の南の廂に御座装11はす。うち円き、褥新しくせられたり。めでたき四尺の屏風几帳ども、方13々に立てられたり。内に御14達うなれども、襲の裳唐衣汗衫ども着て居並みたり。うなゐは15あを色二藍通わて着たり。大殿人16に。内に心して17あれ。我が18中務の輔も恥かしき人ぞや。左大将の御子、左の大臣の19御子20ぞかし。いと恥かしきあたりなり」と宣ふ。北の方は琴どもの装束し21すぐりて、琵琶箏など同じ聲に調べ合せて置き給ふ。左22大將宣ふやう23、「右大將の三條の家にて、相撲の還饗し給24ひつるなる25かに、いささかの業するにも必らずいまするを、彼處にし給はむ事も必らず遊ぶべし。さて26名にに27きこ（ ）名高き）人の珍らしくし給ふ所なるを、見習ひもせむ」など宣ひて、御28供の君達引き續きて出で給ふ。人に許され氣高く物し給ふ君なれば、多くの人29垣下來おはす。右の30大殿も渡り給へ

校異 1 イ絶えて。2 イに。3 以下こと人に物マデ廿四字イニヨリテ補フ。4 国開え、浜二字ナシ。5 国ナシ。6 国ど。7 内ら。8 イる。9 イナシ。10 国せアリ。11 イひ。12 イしアリ。13 イナシ。14 イ子。15 イ東宮。16 イ々、浜々に。17 イ我。18 イつかさ、浜考異下つかさ。19 イみ。20 イナシ。21 造。22 イナシ。23 イはアリ。24 イへる、イふべか。25 イる。26 イ心。27 イくアリ。28 国子ども。29 イ垣下に、イ退き。30 イ大殿。

り。主の大殿喜び1て畏まり給ふ。かくて皆著き渡り給ひぬ。上達部御子2たちの御前に3は、紫檀の机に綾の表參4れり。中5少將には蘇枋の机、官人には皆摺6につけてし給ふ。かくて御箸下7し給8ふ、御土器はじまり、相撲9出10で、左手六手ばかり取りて、ほ11ね（〇最手）出で來て布引きなどする12に、主の大殿裝束き置かれたる箏どもを取う出させて宛て〳〵に奉13り給へれば、各々取りて掻き鳴らし試み給14ひて、「爪覺えて調べられたる御箏どもかな。人のえせぬ15はや」と宣16ひて、遊ば17せ18ぬ。笛ども吹き合せて遊ばす、いとになく面白し。例は舍人相撲人などには、19品々布を賜ひけれ20ど、今年21は心ことに陸奥の絹を賜はす。すは22ら（〇蘇枋カ周防カ）の脚つけたる中取机23に24いづみ25に束絹積みて、御前に舁き26立てて、政所の人裝束して出で來て、召し立てつゝ賜ふ。御使の長相撲の最手には四疋、たゞの舍人相撲には二疋賜はす。またこの中將少將の御隨身には、一疋づつ賜はす。かづけもの、垣下の御子たち27に、赤朽葉28に29作30斑綾の小袿、31菊の摺裳綾か32は（〇掻）練一襲、袷の袴、33宰相よりはじめ34て35中將までは、綾の摺裳、黄朽葉の唐衣一襲、袷の袴。少將よりはじめ36垣下の佐たちには薄色の裳、黄朽葉の唐

校異 1[イ]ナシ。2[イ]二字ナシ。3[イ]ナシ。4[イ]ナシ。5[因]考異將アリ、[イ]ナシ。6[イ]々アリ。7[イ]り。8[因]ひ。9[イ]果。10[イ]つ。11[イ]手。12[イ]ナシ。13[イ]れ。14[イ]ふ。15[イ]二字ナシ。16[イ]ふし。17[国]し。18[因]考異ナシ。19[国]信濃の。20[イ]ば。21[イ]ナシ。22[イ]う。23[イ]ナシ。24[イ]三つ、[因]九つ。25[イ]の。26[因]出で。27[イ]ナシ。28[国]の。29[イ]はな。30[イ]文。31[イ]雉。32[イ]い。33[イ]少將。34イナシ。35以下少將よりはじめマデ廿七字[イ]ナシ。36[因]衛府。

衣一襲、袴1色2おられり。3まうち君達、官の4そら5までは、白き綾の單衣襲、袷の袴、人々の6御供なる官ある人には、白張の袴7ひとへ、府生には白き單衣襲賜ふ。今日8參りたる人祿賜はらぬ者かつ9なし。かかるほどに仲忠の侍從かづけもの取りて、今ぞ出で來たる。左大將引き止め給10ひて、度々强ひ給ふ。侍從、「かしこければ」とて11飲みわづらひて、「いと恐ろしき目を12も見侍るかな」と言へば、13左大將、「我が主を醉はし奉るも心ありや。醉ひて14も15はらし給はねば本16上現はし給へとぞや」17戲れ給18ひて「まこと19かの物の音いさゝか聞かせ給へ。今日の御饗にこの御琴の音せねば、春の山に鶯の鳴かぬ朝、秋の池に月の浮ばぬ夕になむあるべき」と切に責め給へば、父大殿内に入り給20ひて、りうかく21を取り22て出で給へれば、左大將取り給ひて、「これに23 24たゞ御手一つ遊ばせ。25去年の五節の夜、ほ26のかに承はりて、いよ／＼なか／＼なる心地なむする」と宣へ27れば、侍從、「年頃むげに忘れ28たて29侍りし30に、切なりし宣旨の31恐ろし32きに、辛うじて思33ひ給34へ出でて、一手仕うまつりしを、そ35も／＼はか／＼しうや侍りけむ36とだに覺え侍らず。今はましてかけても覺え侍らず。その37中に38今日の御饗に、仲忠が手仕う

校異 1[イ]のアリ。2イ劣れ、イおくれ、[イ]をとね。3イ諸太夫。4[イ]尉。5[戻]考異たち。6[イ]きに。7[戻]一くだり。8[戻]考異はアリ。9イがぬアリ。10[イ]ふ。11[イ]二字ナシ。12[戻]考異ナシ。13イ右。14[イ]ナシ。15[イ]七字ナシ。16[国]性。17[イ]とアリ。18[イ]ふ。19イはアリ。20[イ]ふ。21[イ]ナシ、[戻]風。22イナシ。23[イ]てアリ。24[イ]二字ナシ。25[イ]内裏。26イナシ。27[湖]ナシ。28[イ]に、[国]は、[イ]ナシ。29[戻]考異二字ナシ。30[イ]かども。31[国]かしこ。32[イ]さ。33[国]う。34[イ]ひ。35[イ]れ。36[イ]にアリ。37[戻]上。38[イ]稀有。

まつらむは、蒸の野邊に蛙の聲する心地なむ仕うまつるべき」1こと聞ゆるに、主の大殿、「好き者や2 3るを仕うまつりて軍き祿やは賜はら4ぬ」左大將、「正賴5から6うたしと思ふ女の童侍り、今宵の御祿には、それを奉らむ」と宣へば、辛うじて萬歲樂聲ほのかに搔き鳴らして彈く時に、仲賴行正、今日を心7しける琴を調べ合はせて、になく遊ぶ時に、なほ仲賴感に堪へで、下り走り、8萬歲9てを舞10ひて、御前に出で來たり。行正琵琶、大將和琴、皆調べ合せて、あるかぎりの上達部、聲を出だして遊び興じ給ふ。11仲忠例の12こくの手をば彈かで、思ひの13物を彈く時に、「かくては御祿も如何はせむ。なほ少し細かに遊ばせ」と切に宣へば、調べ變へて彈く。面白き事かぎりなし。未だ仲忠かやうに彈く14時なし。御前にて彈きしよりもいみじう15この聲も16統17へきて18習ひ來たれば、なつかし19う和かなるものの、いと珍らかに面白し。萬の人20興じ21めで給ふ。22たゞ少し搔き出でたるに、御殿の內響き滿ちていみじきを、遺言23（の）24こゝ25のみつ26を聲のかぎり搔き立てて彈き給ふに、いとゞありとある人賞でまどひて、左大將の大殿まして哀れがり

校異 1[不]ナシ。2[不]なアリ。3[不]猶。4[国]む。5[不]辛。6[不]めでアリ。7[不]みアリ。8[不]萬。9[不]樂。10[不]う。11[不]なり。唯。12[不]曲、[不]極意。13[不]外のアリ。14[不]とく。15[因]琴。16[因]功。17[不]繼ぎ、[因]づき。18[不]など彈き。19[不]く。20[不]めでアリ。21[不]二字ナシ。22[不]仲忠。23一字[不]ニヨリテ補フ。24二字[不]曲。25三字[不]手、[国]手三つ。26遺言以下八字[不]ゆいとくの極意、[因]ゆいこく（〇遺曲カ）の手、[因]考異ゆいとくの手こゝののみつを、ゆいとくのここをのみつを、ゆいとくのをこんこくのみつを、みゆいこんこゝののみつを。

1めで給2ひて、3御袙一襲を脱ぎ4て、一御頸の寒けなる5も6かゝれ7ぞかし。
みな人をうづむ紅葉のかからぬも風吹く松と思ふなるべし

仲忠、

8宮人に垣穂の紅葉か9ゝれども散10らせる枝はねたしとも見ず

仲頼感に堪へず、下り走り、萬歳樂を折返り舞ふに、主の大殿袙脱ぎ給ふ。左右の大將御11琴ども合せて、仲頼行正12笛吹き、あるかぎり13の人14拍子合せて遊び給ふ。面白き事かぎりなし。大將殿童におはしける時、嵯峨の院の御賀に落蹲になく舞ひ給15ふ16各々取り給ひけるを、今宵かく遊び17人手を盡くして、珍らしき物の音18落はつにめでたき19に、仲純の侍從落蹲舞ひて、御階の下に舞ひ出でて、折返り舞ふ。仲忠賞で20しれて、大將のかづけ給へる袙を打ちかづ21けて、諸共に舞ひ遊22び、仲純舞ひて出づとて、御23さい松燈してさぶらふ25左近の尉近正に打ちかづけて入りぬ。かくいとになく遊び26て、夜更けぬれば、辛うじて27ぬ28すまは29れし30えうふの所におはして、と淺ましく大將殿の強ひ給ひて、31きぬ仕うま32いらせ給33へ

校異 1[イ]二字ナシ。2[イ]ふ。3[イ]ナシ。4因給ひアリ。5[イ]に。6[イ]これはありしこそアリ。7[イ]ばアリ。8[国]昔な。9[イ]く。10[イ]りけ。11[イ]子供。12[イ]際アリ。13[イ]のりアリ。14[イ]はアリ。15[国]ひ。16[イ]名。17[イ]入り。18[イ]備。19[イ]事。20[イ]ら。21[イ]き。22[イ]ぶ。23[イ]た、[国]つ。24[イ]などアリ。25[イ]さこ。26[イ]に。27[イ]出でアリ、[国]出で給ひアリ。28[イ]舞も。29[国]て。30[イ]衞府、[国]垣下、31[イ]琴。32[イ]つ。33[イ]ふ。

るに困じにたりとて、御氷飲して參る。其所に仲純の1君おはしければ、對2面して3物語りし給ふ。仲忠「内裏にては時々對面4類はする時侍5れど、6細かなる事は聞えさせず侍りつるを、いと嬉しくもおはしましける7かな」仲純、「甚だかしこし。仲純も聞えさせんと思ひ給へながら、御暇8もなかめれば、え聞えさせずなむ」仲忠、「上9に10仕へなどする折も、大殿一所11放ち奉りて、いさゝか相係見給ふべき人もなければ、心細く、なお覺え侍るを、いかで互に12近う語らひ聞え侍らむ。内裏にもこの頃は、をさ／＼參り給は13ねば、如何なる事に14か」と言ふ。仲純、「如何なるにか侍らむ、亂り心地惡しう侍れば、宮仕15へもし侍らずなむ」仲忠、「たどき16 17物せさせ給ふらむ。若し見18る人戀ふる御病か」仲純うち笑ひて、「今は19逢ふ日も用なきものを」と言ふ。仲忠、「まこと20、宮にも、異なる親族もなかめり。君を深き契り21なして語らひ聞えよとなむ宣22はせし」仲純にも23しか仰せられて、24少將兵衞佐兄弟の契りなしたり。25君達もさる契りな26せとなむ仰せられし」仲忠、「いと嬉しき27と」28など互に宣ひて、仲純、「29いといたう醉ひて、30 31え具に聞えず」と言へば、仲忠、「日頃思32ひ給へつる事を取り申しつるなむ今宵の喜びに侍る」と

校異 1 [イ]侍從。2 [イ]面。3 [イ]御アリ。4 [イ]しアリ。5 [イ]り。6 [イ]かくもアリ。7 [イ]に。8 [校]考異なけ。9 [イ]ナシ。10 [イ]侍ひ。[国]侍り。11 [イ]にアリ。12 [校]考異ナシ。13 [国]ぬは。14 [イ]ナシ。15 [イ]ひ。16 [イ]もアリ。17 [イ]宣は。18 [イ]ぬ。19 [国]遊び。20 [イ]やアリ。21 [イ]にアリ。22 [イ]ひ。23 [イ]二字ナシ。24 [イ]源少將、イ源宰相。25 [国]きむち。26 [イ]そ。27 [イ]事。28 [イ]かと。29 [校]考異ナシ。30 [イ]はかぐ＼しくアリ。31 [イ]ナシ。32 [国]う。

言ふ。「今かの■にさぶらはむ」とて、仲純催出ぬ。1かかくて、これかれ遊びのゝしりて、夜いたう更けて皆歸り給ひぬ。主の大殿北方に聞え給ふ、「物はよく見2給ひつ3や。御子こそなほいと人にまさりためれ」と宣へば、北方、「いでや、己は見知る4（べ）き人かは」「5これぞ御眼ぞ恐ろしきや。故君には天人も6えまさらざりけるを、7皆習ひ取り給へ8りけるこそは畏けれ。それに侍從おと9ゝずこそ人々思ひためれ。才の徳に、躓れにても大將10の君の宣はぬ事なり、春宮の宣はするに11も、出だしたてられぬな取らせんと12宣ふぞ有難き。さばかり13天の下の14肝絶えて15まどふ君を、贋實にはあらねど嬉しくこそあれ」北方、「さるめでたき君かた、御子どもはみな佛の箭にもあらず物し給ふらむ」大殿、「16ひといみじき者ぞや。17さばかり離れてはしたたかりつるに、異人の祭様には似ずかし」など宣18ひて、二所うち臥し給19ふ。侍從曹司へも20行かで御前に臥しぬ。左大將殿も歸り給ひぬ。21御時よく遊び入り給ふ。なる22〔○仲〕賴行正23も御送りし24けり、や25がて宿直せむと言ふ。大殿入り給へ26ば、宮「などか遲くはおはしつる」大殿、「かの御饗の27いとになく饗應たりつれば、皆人たゞ今までなむあり28つる。あて29こそ30本13三條に、面

校異 1イナシ。2イ知りアリ。3イんアリ。4一字イニヨリテ補フ。5イさこ。6イて。7イ見。8イ二字ナシ。9イら。10イナシ。11イは。12イなんアリ。13イのアリ。14イ聞き傳へ。15イ思。16イい。17イ障り。18イふ。19イひぬ。20イ入ら。21以下十一字吏ナシ。22イか。23吏ナシ。24イかゝ。25イと。26イれアリ。27吏考異二字ナシ。28吏二字ナシ。29イに。30イの。31イ御。

白うめでたき物を人聞きつるかな」1宮、「何事ぞ。あな疎まし」と宣ふ。大殿、「例の物の上手どもいと面白う遊ぶに、侍従出で來なむと思ふに、更に出で2この日の暮れつれば、いと口惜しかりつるに、夕づけて、かづけ物3より出で來るものか。そのかみ捕へて醉4はして。例の琴彈き給へと言ふに、更にきかず。父5大殿内に入りて、いとめでたき琴を6御手づから持て出で給7ひて、なほ仕うまつれと宣へど、更にきかず。たゞ8樂の聲を9うやまし10さは物に掻き合せて11は彈くものか。12いと靜心なくて、なほ遊ばせ。祿にらうたしと思ふ女奉らむと言ひたれば、お13ゝ〔一下〕走り舞踏して、になく14く繁調べて、いと數多の手彈きつる。す15べて言ふよしな16く、父大殿涙17落し18たえすつゝげにはたいとめでたき人にこそあれ。遊びたる樣も更に異人に似るべうもあらず。いかで19聞召さ20むと宣へば、21宮、「いかでかれきかむ」大殿、「更にお22とろげにてすべきにあらず。琴を24聞かせ給ひて、25上の26せ27させ給ふ28にだに、手も觸れぬ人なり。今宵もおろかに言はましかば逃げなましを、なほ己こそ29縛にたる翁にて、許さず責めたりつればこそむづかりながら彈きつれ」宮、「あてこそして、なほ彈き給へ、物聞えむなど言はゞ彈きてむや」「30うは彈きも

校異 1イナシ。2イ來で。3[イ]取り、[イ]取りてより、[反]取りて。4[イ]い。5[イ]大將。6[反]考異み。7イふ。8[反]考異琴。9[イ]ぞ、[反]心。10[反]う。11[イ]ナシ。12[イ]は。13[イ]り。14[イ]き。15[イ]ま。16[イ]し。17[イ]ネアリ。18イ給ひ。19[イ]かアリ。20[イ]せアリ。21[イ]君。22[イ]ば。23[イ]もアリ。24[イ]前にアリ。25イ人。26[イ]責め。27[イ]二字ナシ。28[イ]ナシ。29[イ]年アリ。30イそ、[イ]に。

してむ。今折あらむとき」と宣ふ。かづけものどもをあな清らと見給ふ。1つれ〴〵にぞ。

文化十二年乙亥二月以本居氏藏書校合畢橡樟園興之

校異 1 (イ)次々にぞ、(イ)その後いとめでたき御遊び多かりけり。

〔校訂者云、俊蔭の卷は、從來の說のまゝ卷頭に置きたれど、次の藤原の君の卷と置き代へて、藤原の君を先づよみて、次に俊蔭に讀み進むを便宜とす。以下の卷の順は校訂者の新に定むる所に從ふ。〕

一、藤原の君

昔、藤原の君と聞ゆる一世の源氏おはしましけり。童より名高くて。顔かたち心たましひ、身の才人にすぐれ、學問に心いれて、遊びの道にも入り立ち給へ1る、時に、2見る人、「猶かしこき君なり。帝となり給ひ、國知り給はましかば、天の下豐なりぬべき君なり」と、世界こぞりて申す時に、萬の上達部皇子達、婿に取らんと思ほす中に、時の大政大臣の一人女に、御冠し給ふ夜、婿取りて、かぎりなくいたはりて住ませ奉り給ふほどに、時の帝の御妹、女一の皇女と聞ゆる、后腹におはします。父御門、3母后4宣ふ、「この源氏、たゞ今の見る目よりも、行く先成り出でぬべき人なり。我が女此の人に5取らせて6」と宣ひて、婿取り給ふ。三日の夜、御土器取りて、「此所にかく物するとて、かの大政大臣の女を忘れず、等しく通ひ給はん7よかるべき」な8むど宣ひて、

岩の上になら9へて生ふる松よりも雲井におよぶ枝も有り10なん

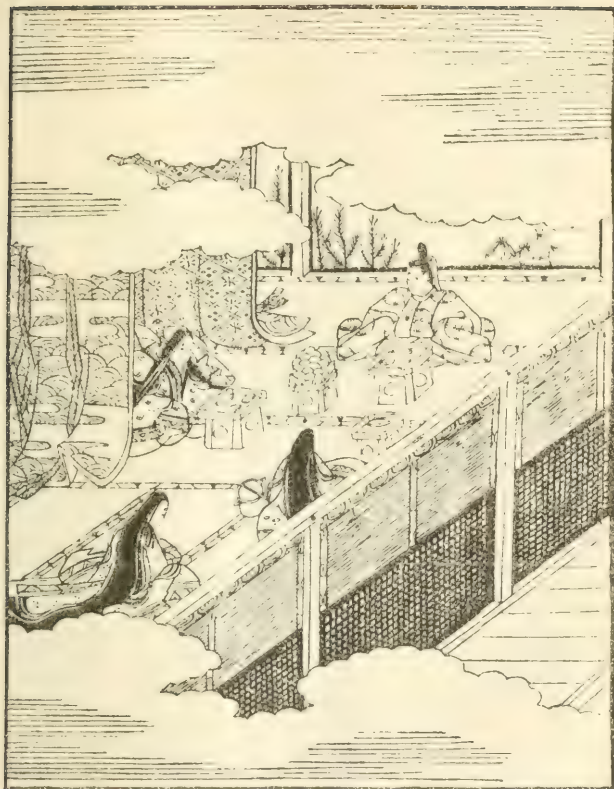
源氏正賴、御土器賜はるとて、

松の根を植うる今日より岩の上を茂き林と人に知らせむ

校異 1因り。2皮皆。3玉御アリ。4团にアリ。5国取らせん。6团んアリ。7团なんアリ。8因ナシ。9因び。10团けり。

1前右大臣橘の千蔭、

岩の上の苔の巣にすむ鶴2は世をさへ永3らも思ふべきかな

左大臣源の忠経、

卵のうちに昨日は見えし鶴の子の今日はたにも並び4ゐるかな

中納言行忠、

あし鶴のうつる千年の宿には今やいさごの岩となるらん

などこれかれ官5ふ6ても、7后の宮、三條大宮の程に、四町にていかめしき宮あり。おほやけ修8か職に仰せ給ひて、左大辨9おとゞして、四町の所を四つにわかちて、町一10へに、檜皮の御殿廊11下殿藏板屋などいと多く建てたる、四つが中にあたり13、面白きを、14本家の御料に造らせ給ふ。それは御殿町なれば、板屋なく、あるかぎり檜15皮なり。此所に移り給ひて、一方には16大殿の御女、御殿町には宮住み給ふほどに、御子ども生み給ふこと17數もまたになりぬ。大い殿の18男四所女五所19に、宮の御20腹に十五歳より生み給ふ男八所女九所、先づ宮21大君太郎次郎三郎四郎とり續き生み給ふ。大殿の御方九郎六郎と生み給ふ。宮七郎八郎と生み給ふ。大い殿に22(九郎、宮に十郎、大23殿に十一郎)中の君三の君四24君、宮五六

校異 1〔イ〕ナシ。2〔イ〕も。3〔イ〕く。4〔イ〕め。5〔因〕考異ひ。6〔イ〕て、〔因〕御母。7〔因〕考異御母アリ。8〔イ〕理。9〔イ〕を督、〔イ〕を取ら。10〔イ〕つ。11〔イ〕渡殿。12〔イ〕二字ナシ。13〔因〕てアリ。14〔因〕此。15〔イ〕は。16〔イ〕大將殿。17〔イ〕と。18〔イ〕御方にアリ。19〔イ〕ナシ。20〔イ〕方は。21〔国〕のアリ。22以下十二字〔イ〕ニヨリテ補フ。23〔因〕いアリ。24〔因〕のアリ。

七八九十さしならびに生み給へり。又大殿に十一十二の君、宮十三十四の君、又さし續き同じ年の男君1・2二所ながら生み給ふ。互にか3ら4みおはしましなどすれど、御仲うるはしく、清らなる事かぎりなし。かくてこの君たち、男はつかさかうぶり5給6へり。女は容貌あ7る、男につき宮仕し、とゝの8(ひ)給ふほどに、父君大將兼けたる正三位の大納言になんおはしましける。何れ9(も)〱10もかたち清らに心よく、おしなべて生ひ出で給へるを、世界の人、「猶この御11ろうはたゞ人におはしまさず、變化のものなり。天女の下りて生み給へるなり」と聞え12給ふ。

かくて太郎13君左大辨忠純年三十、次郎兵衛佐師純年廿九、これ二人ながら宰相なり。三郎14右近中將藏人頭輔純年廿八、四郎15右衛門佐連純年廿七、これは宮の御腹。大い殿の御腹は、五郎16兵衛の佐顯純年廿六、六郎兵17部の太夫兼純年廿五。宮の御腹、七郎侍從仲純18の同じ年、八郎19大い殿の大夫の20[illegible]基純年廿三。大い殿の[illegible]九郎式部の丞殿上人清純年廿[illegible]。宮の御腹の十郎兵衛の尉の藏人頼純廿。大い殿の御腹、十一郎近純21(年六。宮の十二郎行純同じ年[illegible])御22せんな23〔〕女〕宮の御腹の大い君は、御兄24の今の帝につか

校異 1〔イ〕とアリ。〔考〕考異をアリ。2〔イ〕此字ナシ。3〔イ〕う。4〔イ〕生アリ。5〔イ〕しアリ。6〔国〕は。7〔イ〕げ。8一字〔イ〕ニヨリテ補フ。9一字〔イ〕ニヨリテ補フ。10〔イ〕ナシ。11〔イ〕ぞ。12〔国〕あへり。13〔イ〕のアリ。14〔イ〕左。15〔国〕左。16〔国〕左アリ。17〔国〕衛。18〔イ〕ナシ、〔国〕も。19〔国〕大后宮、〔国〕大后宮。20以下九字〔国〕ニヨリテ補フ。21以下十二字〔国〕ニヨリテ補フ。22〔イ〕一字を。23上四字〔イ〕先帝の御女の。24〔イ〕ナシ。

うまつらせ給ひけり。男四人女三人、七人の宮たちの御母にて、一の女御年卅一。大い殿の御腹1に、先帝の御兄弟の中務の宮2北の方年廿一。同じ腹の三3君4右の大い殿の頭宰相の北の方年十九。四の君5右大臣殿の次郎左近6の中将源の實頼の北の方年十八。宮の7腹の五の君8民部卿9の北の方年十七、六の君右大臣藤原の忠雅の太郎10北の方11 12年十六、七の君右大臣13殿14 15太郎衛門督藤原の忠俊の北の方16十四。いまだ御夫なき17(は八の君)18(ちご宮)19(年十三)九の君あ20りて宮と聞ゆる21十二、十の君22ちご宮十一。大い殿の御腹十一24は十、十二は九。こなたの御腹の十三の君袖宮25は、十四の君けす宮七、その御弟の男26宮六になんおはしましける。かくてこゝば27らの男女、男も妻具し給へる28(も)29さらに外住せさせ奉り給はず、「大きなる家な30り、我が世のかぎりは、かくて住み給へ。外へおはせんは、我が子にあらず」と聞え給ひて、四町の殿を、腹一つをば、町一に住ませ奉り31給ふ。五間の大殿一つ、十一間の長屋一つ32奉り給ひて、あなたの御腹の三所、宮の御腹の四所、町々に住ませ奉り給ふ。御夫なき御方も皆設け給へり。

かくて父母33も住み給ふ34家には、寢殿にはあ35りて宮よりはじめ36奉りて、こなたの御腹の若君達、内の

校異 1 因の。2 因のアリ。3 イのアリ。4 国左。5 国右。6 イナシ。7 イ御アリ。8 イ式。9 国宮のアリ。10 イのアリ。11 以下三字国ニヨリテ補フ。12 イナシ。13 イナシ。14 宝のアリ。15 国二。16 イ年アリ。17 以下四字イニヨリテ補フ。18 以下三字国ニヨリテ補フ。19 以下三字因ニヨリテ補フ。20 イナシ。21 国は年アリ。22 国今。23 国年アリ。24 イ十二君は年。25 イ八。26 イ君。27 イく。28 一字イニヨリテ補フ。29 イ御きり。30 因れば。31 イ給ひつ。まづ。32 イいづつアリ。33 イの。34 因町。35 イナシ。36 イ三字ナシ。

女御の御腹1女宮たちなど2皆3御殿一つ殿に、髫髪、下仕な4むどかたち心あるなかに優りたるを、選りさぶらはせ給ふ。西の御殿は女御の君の御方、東の御殿5に宮たち住み給ふ。父母6北の御方になん住み給ひける。7弟君たちは、あるかぎり廊を御曹司にし給ひて、板屋を侍にしてなん有りける。女房の曹司には、廊の廻りにしたるをなん割りつゝ賜へりける8。9太郎宰10（相）の御方には、殿のあたりなりける所11右を賜びつゝ御厩にし御倉町まどこ12こ「〇政所カ」にし13、所々14さし離15ちつゝ16なむしたりける。

かくて何れともなくけう17くにおはしましける中に、あて宮は御年十二と18けける二月に御裳着る、ほどもなくおとなになり19出で給ふ。あるが中にかたち清らに、御心らう〳〵じく、まめ20（き）たる御心に21あり、ものの心も思し知りたれば、父大殿母宮かぎりたくかしづき奉り給ひて、この君を如何にせましと思して在り経給ふほどに、民部卿中将の御弟、左大臣殿の三郎に當り給ふ實忠といふ宰相22にて、此のあて宮に御心つき給ひて、いかで聞えんと思せど、父大殿に聞え給ふとも許され給ふまじ23く、24忍びてあて宮に聞え給はんもすゞろなるべければ、思ほしわづらひて、25たゞ26民部卿の殿の御方に聞えんと思しわたるに、あて宮の御乳母子、かたちも清げに心27こそある人28兵衛の君とてさぶらふに語らひつき給ひて、「實忠殿に

校異 1イのアリ。2国南の。3イおもと人乳母。4因考異ナシ。5イは。6イはアリ。7イ男。8イ所アリ。9国太郎君。イ大后。10一字イニヨリテ補フ。11国々。12イナシ。13イてアリ。14国はアリ。15イし。16イ二字ナシ。17イに。18イ申し、国聞え。19イはて。20一字イニヨリテ補フ、イい。21イもアリ。22因考異二字ナシ。23イナシ。24国ましてアリ。25イ二字ナシ。26イ式。27イこと、国ばせ、因ばへ。28国にアリ。

さぶらふとは、中の御殿に知らせ給へりや」など1て思す事を宣へば、「異戯言は宣ふとも、この2かゝる〔〇方の力〕11遊びは、さらに承らじ」と聞ゆ3れば、「人の初事は咎め出物ぞ」などて、「思ひあまりてこそ、こゝらの人の4御中に、君にしも聞ゆれ」と宣へば、兵衛、「さらば鐘やかなる御心ざしにて宣はする5するか。6さかしては、かゝることは宣ふまじとこそ覚ゆれ」など聞えつゝあるに、宰相珍らしく出で来たる雁の卵に書きつ7ゝ、

卵のうちに命こめたる雁の子は君がやどにてかへ8さゞるらん

とて、日頃は」とて、「これな9ん〔〇中〕の大殿にて君ひとり見給へ。人に見せ給ふな」とて取らせ給へば、兵衛うち笑ひて、「かば10かりに親生みつくらん人のやうにもこそ仕うまつれ11ば」「12いでかばかりぞかし、御心は」と宣ふ。兵衛賜はりて、あて宮に「巣守になりはじむる雁の卵御覧ぜよ」とて奉れば、あて宮、「苦しげなる御13もの願かな」と宣ふ。

かくて又右大将藤原の兼雅と申す、年14卅ばかりにて、世中15心にくく覚え給へる、かぎりなき色好にて、廣き家に16大き17家ども建てゝ、よき人々の女方々に住ませて住み給ふありけり。この君あて宮をいかでと

校異 1[イ]ナシ。2[イ]語。3[考異]二字ナシ。4[イ]ナシ。5[イ]二字ナシ。6[イ]さならで、国さらで。7[イ]く。8[イ]らざるらん、[考]らざらなむ。9[イ]か。10[イ]ほ。11[考]ナシ。12[考異]いらへ。13[イ]事。14[国]四十。15[考]にアリ。16[考]多く。17[イ]なるアリ。

思す。父大殿よき御仲なり。されど親には聞え給はで、あて宮に聞え給ふべき事を1思ひおぼすに、左大将殿の中将、この御司の中将なりけり、御仲いとよく語らひ給ひて、殿に諸共に物し給ひて、遊びたどし給ふついでに、「君に聞えまほしき事あれど、え聞えぬかな」中将、「怪しくも宣はするかな。疎き人にこそ包む事もあれ」主の大将、「今2さへかゝる心のまばゆさに、聞えでもやみなんと思へど、さてのみはえあるまじく思ほゆれば、先づ君に聞えむと思ひてなん。殿に皆人住ませ奉り給ふなるを3なん、などか此所にしもえさぶらはざらんとなん聞えまほしき」中将、「住み所なき人4をこそさもし給ふめれ。怪しくも宣はするかな」主の大殿、「玉の台もとこそ言ふなれ。まめやかには、中の御殿の姫君をなん、小く聞え給ひし時より承りおきたるを、かくなんとだに聞えではやみなんや。かの若宮わたり思し出でて、兼雅が思ひ思し知れかし」中将うち笑ひて、「さる思ひ侍りて、好いたる名立ちて見え騒がれ侍りしかば、人の上にても、今は忘れてもなん。かの人は、如何なればにかあらむ、女子は置かれたらぬ所なれど、一人ばかりは5（ふと）ころ〔の懐中〕作せさせてあらん」とて、春宮よりも宣はすれど、未だも定められざめり。さはありとも、今かくなむと物して聞えんかし」主の大殿、「6若君、聞え盡くすべくもあらず」とて、

我一人いふに飽かねばくれなゐの袖も告げなむ思ふ心を

と宣ふ。中将、

校異 1 イ思は、因おぼ。2 イ史。3 因二字ナシ。4 因考異ナシ。5 二字国ニヨリテ補フ。6 イ語。

思ふ1事おほかる袖の色を見て一人たのまん2ことの苦し3さ

か4へて、春宮の御從弟の平中納言と聞えて、いとかしこき遊び5ごと、色好にて、6あるまじある女を7ば、皇女たちをも御息所をも宣8ふ。例なく名高き色好みに物し給ひけり。それもこのあて宮に聞え給ふべき使9ひ10思すに、兵衛の尉の君なんかの殿に通ひ給ひける。「かう思ふ事なんある。御文持て參11り給へ」と、12聞え給へば、何かは早や聞え給ひけん、それにつけてなん御消息通はし給ひける。それにかくなむ、

「さゞら波立つをば知らで川千鳥猶如何なりと人に告ぐらん

と思ふなん妬かりける」とて奉り給へば、兵衛の尉賜はり給ひて、あて宮を呼び離ち奉り給ひて、見せ奉り給へば、何心なく見給ひて、「うたてある文を見せ給ひけるかな」兵衛の尉、「まさ13にさらんを14ば見せ奉りてんや。平中納言のなり」と聞え給へば、「うたておはする君かな」とて立ち走り給へば、強ひて御懷中に押し入れておはしぬ。

かくて、源宰相は、猶かの兵衛の君に思ふ15ことを語らひつゝ、「夢ばかりの16返事をだに見せ給へ」となん宣ひける。花櫻のいと面白き花びらに、

校異 1〔イ〕人。2〔イ〕ほどの、〔イ〕ものぞ。3〔イ〕き。4〔イ〕く。5〔イ〕人。6〔イ〕あるまゝ、〔イ〕ありと、〔国〕主。7〔国〕も。8〔イ〕ひふれぬ。〔国〕ひ動かし給ひ、例。9〔イ〕を。10〔国〕思ほ。11〔国〕らせ。12〔国〕何やかやと言多く聞え給ひつゝ。13〔イ〕なか。14〔国〕考異ナシ。15〔イ〕事。16〔イ〕御アリ。

思ふ事知らせてしかな花櫻風だに君に見せずやあ1るらん

「これをだに」とて書いて、兵衞2に「3御覽ぜさせ給へ」と4取らすれば、「いと怖ろしき事。かゝる聞えあらば、兵衞が身は何の膺懲にかならん」と聞ゆれば、「何の異なる事聞えさせたらばこそあらめ。花御覽ぜさすばかりにこそ、何心ありてとかは見ゆる。猶おいらかに參り給へ5」兵衞、「さらば賜はらんかし。例の覺束なうこそあらめ」とて、取りて、御前にて書きつく。

ほのかには風の便に見しかどもいづれの枝と知らずぞありける

と書6きて「かく言ひたらば」など聞ゆれば、「誰ぞ、君をかくいふらんは」など宣ふ。兵衞持て出でて、「御覽ぜさせつれば、兵衞が許に賜へるなりと聞えつれば、宣ひ紛らはして笑ひ給へれば。御前にてこれかれが聞えつるなり」と聞ゆれば、「さればよ。君の御7手にこそあめれ。珍らしからぬ8も、降る雪とも聞えつべしや」と聞ゆ。兵衞、「まめやかには、かく怪しからぬ事承らじ。たはぶれにても、人の御化言と聞え給ふべくなんあらぬ」など聞ゆ。宰相、「猶この御返、いさゝかなりとも聞えて見せ給へ。さて後は又も聞えじ。人の身に我かたましひ通は9なんとは、思ふ事を人の知り給はぬ時になん思ほえける」など宣ふ。かくて、銀の火取に、銀の籠造り被ひて、沈を擣き篩ひて灰に入れて、下の思ひに10すゑて、黒方を丸かさ。

校異　1 [イ]りけ。2 [國]の君アリ。3 [イ]これアリ。4 [イ]てアリ。5 [イ]ばアリ。6 [イ]い。7 [イ]上。8 [イ]ナシ。9 [イ]さ。10 [イ]そへ、[國]考異くすべ。

して、それに、

「ひとりのみ思ふ心の苦し1きに煙もしるく見えずやあるらん

雲となる物ぞかし」と書きて、「兵衛の君2御許に」と3てあれば、例のあて宮に御覽せさすれば、「をかしげなる物にこそあめれ」と宣へば、兵衛、「如何これをば宣はん。時々は宣はせよかし」あて宮、「いでや、物言ふらんわざも知らず。今習ひて」と宣ふ。宰相の君、「例の覺束なさの擬4 5いまだ止め給はざりけ6るな」と言へば、「御覽ぜよとたはぶれに言ひなして、笑ひ給ひにしかば又も聞えず」と聞ゆれば、宰相、をかしげなる蒔繪の箱に、綃綾など7し入れて8よらせ給ひて、かゝる事を宣ふ。兵衛、「かく宣はすれば、試みにかくなんと聞えんとて、氣色ばめど、萬に宣ひ紛らはして、すゞろなるべければ、聞え紛らはしつゝなん」9小宰相、「などかさしもあらん。同じ兄弟10を、民部卿11の、中將なむどをば住ませ給はずや12と。」などか鍾愛をしもお13なし落すべき。後おひとも云ふものなり、命をこそ知られ」兵衛、「惡しくおはします14ことにはあらで、15兵衛16かの御方は如何に思すにかあらん、猶かくておはしますべきにこそあめれ。その御つ17れ〴〵に、生ひ出で給ふを念じ給へかし」など聞ゆ。

かくてかの右大將殿より中將の君の御許に、「この頃18殿に參り來んとす19めるを、うちはへ物忌にてなん。

校異 1 因さ。2 国のアリ。3 イナシ。4 イはアリ。5 因考異は。6 イり。7 イナシ。8 イ取。9 イナシ。10 国の。11 国ナシ。12 イナシ。13 イぼ。14 国ナシ。15 国二字ナシ。16 イこ。17 イぎ。18 イ上。19 因ナシ。

今日は春日へなん詣うで侍る。1（か）の聞えし事は未だ物し給はぬにや侍らん。この頃はいと怪しき心地になん。

　怪しくも濡れまさるかな春日野の三笠の山はさしてゆけども

ゆけどゆかれず」と書きて奉らせ給へり。中将あて宮に聞え2し、「大将殿よりかくなん宣はせたる。見給へ」「いかで3か4（御）許に5な6んなるをば見給へ7ん」とて、開きも入れ給はねば、中将「久しくさぶらひて畏まり聞ゆるに、賜はせたるをなん。かの承りし事は、かくなんと物すべき人8見聞かぬ心になん。春日は、

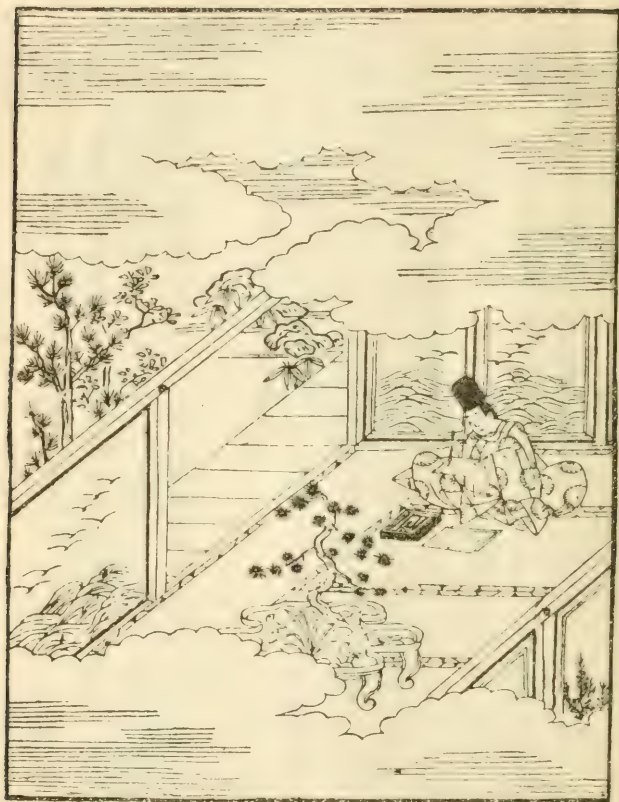
　眼に近く9おもて祈れど春日野の森の榊は色も變らず

かひなき音（〇根カ）にこそ」とて奉り給へり。

かくて、例の宰相は、島のいとをかしき洲濱に、千鳥の往き違ひたるなどして、それにかく書きつく。

　「浦せばみ跡かはしまの濱千鳥ふみやかへすと尋ねて10書く

11（苦しくもたどらるゝかな」とて奉れ給ふ。あて宮見給ひて、）「怪し12く例の13むつかしき14物常に見せ給ふ」15兵衛、「常16に見知らぬやうなり」と聞ゆれば、「例のごと宣17うべかし」など宣ひて、書きつけ給ふ。

校異 1一字[刊]ニヨリテ補フ。2[丙]給ふ。3[国]ナシ。4一字[刊]ニヨリテ補フ。5[刊]あ。6[国]ナシ。7[刊]はで。8[刊]人。9[刊]居り。10[丙]鳴。11以下廿四字[丙]ニヨリテ補フ。12[刊]ナシ。13[刊]五字ナシ。14[刊]ナシ。15[丙]と宣へばアリ。16[丙]考異ナシ。17[刊]まへ。

「濱千鳥ふみこし浦に兵部卿のかへらぬ跡はたづねざらなん

とこそは君の御言にては宮1いふなれ」と宣ふ。「兵衛が名は今なん2いと清らになりぬる」と聞えて、「兵衛に賜へりと聞えつれば、書きつけ給へる」と聞ゆれば、「いと嬉しく、宣ひけると承れば、心ざしの験も見給へける3も、いと嬉しくなむ覺ゆる」4（と宣へり。）また平中納言殿より「辛うじて聞えさせたりし5は覺束なけれど、猶懲りずまになん。

山深み物思ふ沼の水おほみ八重の岩垣越ゆるころかな

おぼろげにや思す」など聞え給6ひつれど御返事なし。又兵部卿の宮より、「思ふも著き御様なめれど、さても止むましければなん。かくは承らぬ物を、あいなう物言はせ給7は8ん」など聞え給へり。あて宮をかしくも答し給へるかなとて御返事なし。宰相、「せめて聞えさすれは畏さに、今は思ひ給へやみなん。

死9ぬと言はゞためしにもせむ物をのみ思ふ命は君がまに／＼

あが君や、後の試み10はありといふとも、11今日の御返事は、つゆ12をも見13給へ。」と有れば、兵衛、「猶此度ばかりは御返事賜へ。物の哀知らぬやうなり。兵衛が言君に聞し召す14にと思せ」、あて宮、「さらば、

校異 1 石ふべか。2 但二字ナシ。3 図と。4 四字図ニヨリテ補フ。5 図かば。6 石へ。7 石ら。8 図ぬ。9 図ね。10 国にアリ。11 国けにアリ。12 国ナシ。13 石せアリ。14 石ナシ。

君の音聞くと、怪しからぬ人にやならん」と宣へど、書きつけ給ふ。

　苔生ふる岩に千代ふる命をば黄なる泉の水ぞ知るらん

とて賜ふ。宰相見給ひて、かぎりなく嬉しと思す1に、兵部卿の宮より、「いと心強くも物2ほし給ひけるかな。このわたりには、かうしも思しうとまざら3れなむ。上にも恨み聞えてしがな。

　我が袖は宿4とる蟲もなかりしを怪し5く蝶の通はざるらん」

と聞え給6ひつれど御返事もなし。

月の面白き夜、源宰相中の御殿に立ちより給ひて、「兵部卿の君立ち出で給へ。月いと面白し」など聞え給ひて、

御前の花盛り色々の花7かげに立ちより給ひて、かく宣ふ、

　花盛り匂ひこぼるゝ木隠れもなほ鶯は鳴く／＼ぞ見る

など宣ひて、松の木の下に立ちよりて、かくなむ、

　岩の上に強ひて生ひそふ松の8跡の誰聞けとてか響き増すらむ

と宣ふ時に、みな人哀れが9り、木工の君といふ人、勞あるものにて、「これを聞き知らぬやうなるは、いと情なし」とて、君たち10なら、「猶これはかりをば聞え給へ」と聞ゆれば、ちご11君なん御前なる箏の琴に

校異 1因又。2[イ]ナシ。3因ナシ。4因か。5国小。6[イ]へ。7[イ]のアリ。8[イ]根。9[イ]る。10因に。11[玉]宮。

彈き鳴[1]みし給ひける。

響くとも昔には聞えで末の松今宵も越ゆる波[2]ぞ知らるゝ

又宰相の君、

涙川みぎはや水[3]に増さるらん末より瀬の聲もよどまぬ

又かくて夕暮に雨うち降りたる頃、中島に水のたま[4]りに、鳰といふ鳥の心すごく鳴きたるを聞き給ひて、侍從あて宮の御方にお[5]ほして、かく聞え給ふ。

「池水に玉藻沈むは鳰鳥の思ひあまれる聲なりけり

とは御覽ずるや」と聞え給へば、怪しう思して、いらへ聞え給はず。この侍從も怪しき戯れ人にて、萬の人の聲になり給へとをさをさ聞え給へども、さも物し給はず、この同じ腹に物し給[6]てあて宮に聞えつかむと思せど、あるまじき事なれば、たゞ御琴を習はし奉り給ふついでに、遊びなどし給ひて、こ[7]れたにのみなん常に物し給ひける。

［頭註］こゝは大將殿[8]宮住み給ふ御殿町の西南、前栽植木面白く、御殿[9]、廊ども多かり。曹司町下屋どもみな檜は[10]ゝ（一皮）なり。寢殿にはあて宮小宮達、女御の君腹の御子達、合せて七所。年十三歳より下なり

校異 1 国らし。2 イの。3 国の。4 国れる。5 イは。6 イナシ、給ふト訓ム。7 イな。8 イのアリ。9 イもアリ。10 イだ。

御達大人卅人ばかり、童六人下仕六人。乳母どもな1んどあり。みな童2あて宮の御人なり。西の御殿3女御住み給ふ。下仕童大人同じ數なり。内より御文あり。見給ふ。東の對には、女御の御腹の男皇子たちいと數多おはすなり。4みな碁打ちなど5に。北の御殿は宮父大殿住み給ふ。大殿内裏へ參り給ふとていそぐ。これは御子どもの住み給ふ町。御殿六つ板屋6たう〔○廊〕さ7りん〔○曹司〕藏どもあり。寢殿8民部卿9の10同じ11腹の12六の君年十13八。14子二人、又生み給はむとする15と、いとおほく勢ひたり。16右の御殿、民部卿の殿の御方同じ御腹の七君御夫左の大い殿の太郎君年十六、子生み給はんとす。東の御殿、17左衛門の督の殿の御方年十五、北の對18い19たづらなり。今生ひ20はて給ふが料なり。池廣し、植木あり、反橋釣殿あり。これは大い殿の君住み給ふ御殿町、21屋22ども同じ數なり。寢殿23、北の方住み給ふ。御達いと多かり。西の對24、中務の宮25北の方、こなたの御腹の中の君なり、年廿26三。男君たち27は、宮の御腹の四人28（は、廊を御曹司に29しておはす。）東の御殿30、31頭宰相殿の御

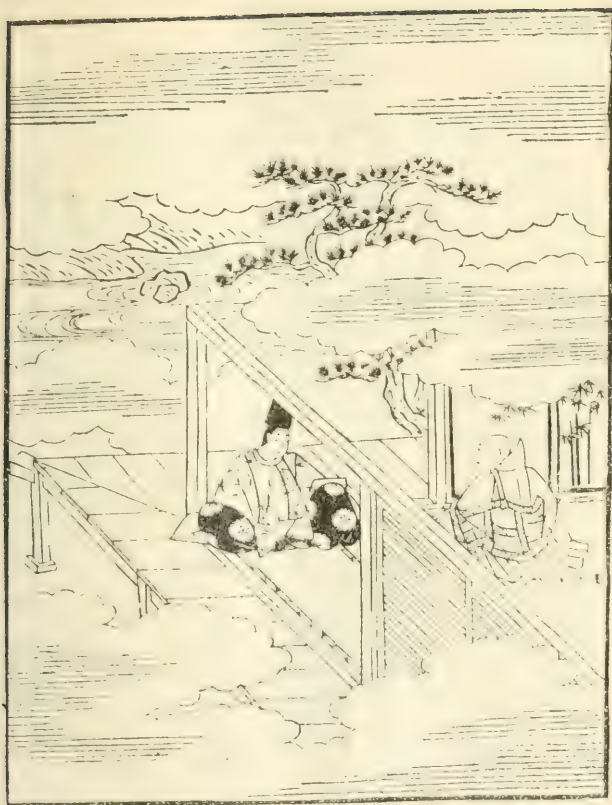
校異 1[国]ナシ。2[イ]はアリ。3[イ]にアリ。4[イ]二字ナシ。5[イ]す。6[イ]ら。7[イ]うし。8[国]にアリ。9[因]殿アリ。10[国]宮住み給ふ。北方宮のアリ。11[国]御アリ。12[国]五。13[国]七。14[国]御アリ。15[イ]も。16[国]西の御殿に同じ御腹の六の君年十六、子生み給はんとす。御夫右の大臣殿の太郎君なり。17[国]に同じ御〔○因ナシ〕腹の七の君年十四〔○因五〕。御夫右衛門の督の殿。18[イ]の。19[イ]辰巳。20[イ]出で。21[イ]ナシ。22[イ]間。23[国]にアリ。24[因]はアリ。25[因]のアリ。26[国]一。27[国]もこ。28以下十二字[国]ニヨリテ補フ。29[因]ナシ。30[国]にアリ。31[国]同じ御腹の。

方三の君、年1廿二、御夫2右大将殿の3三郎君、4（子）一人。南の御殿5、同じ御腹の四の君、子なし、年廿、源宰相の北の方。

かくて又、上野の宮とて古7親王おはしましけり。その親王は物僻8給へる親王にてお9はし10け11る12はいたゞ今世にある上達部親王たち、この殿の聟になるを、今さ13ら我をもせんとて、妻をも追ひ拂ひて、「今左大将の家に往きて我住めらむに、14召す人15たらば、思ひうとみなむ」と宣ひて待ちおはしますに、生ひ16うで給ふまゝに、みなこと人々に奉り給ひつ。この親王、さりとも我を聟數に入れ給はざらんやはと思ほすに、八17件18と生ひ19（出で）給ふと聞きて、これならんと待ち給へば、20左衞門の督に奉り給ふと聞召し、驚きて宣ふやう、「怪しくこの大将の、我が思ふ事を未だなさぬかな」と宣ひて、數多度御消息あれど、21殿うち22に笑ひ嘲りて、御返事たし。「大方は九に當るあ23んたり。それをさし延へて言はむ」とて、あて宮に御文あり。されど怪しきものに思ほし24聞え給はず、この親王、萬に25思ほし騒ぎて、陰26陽師、か27んなぎ、博打、京わら28はべ、嫗翁召し集めて宣29はく、「30ほに我この世に生まれて31後、妻とすべき人を、六十

校異 1[国]十九。2[国]左の大臣。3[国]太。4一字[国]ニヨリテ補フ。5[国]にアリ。6[国]十八。7[考異]きアリ。8[国]しアリ。9[イ]ぼ。10[考異]ましアリ。11[イ]り。12[国]ほどに。13[イ]ぞ。14[イ]妻据ゑ。15[国]なく。16[イ]出。17[国]のアリ。18[イ]今。19二字[イ]ニヨリテ補フ。20[国]右大臣殿。21[国]大臣。22[イ]ナシ、[国]見。23[考異]ナシ。24[国]てアリ、25[考異]おぼ。26[国]陽。27[イ]う。28[考]ナシ。29[イ]はく、[国]ひかはし給ふ、[考]ふやう、[考異]ふ。30[イ]二字ナシ。31[イ]ナシ。

餘國唐土新羅高麗天竺まで尋ね求むれど更になし。この1左大將源の正賴の主の女ども十餘人にかゝりてあなり。一人に當るをば、帝に奉りつ。その次々ことごとくにとゝのへた2り。殘れる九に當るなむ、四方の國3聞きしに、かく4けり5人聞えず。この女なん井に6つく心につ7は。しかあるに、父大將に8請ひ正9らに請ふに、女も大將も今に承け引かず。如何なる佛神に大願を立て、なでふ事のたばかりをしてか、女のおもむくべき」と宣ふ時に、比叡の山に惣持院の十禪師なる大徳の言ふやう、「か10さき〔〇相手カ、難きか〕を得んずるやうは、比叡の中堂に常燈を奉り給ひ、又な11く〔〇奈良〕長谷の大悲者、12人の願ひ滿て給ふ龍門坂本東坂13もと大寺かくのごとく、すべて佛と申す物、土を動かして、これを佛と言はゞ、御燈明奉り、神14見すには、天竺なりとも15多く幣帛奉らせ給へ。百萬の神七萬三千の佛に御燈明幣帛奉り給はゞ、佛神各々與力し給はん。天女と申すとも降りましたんなる。いはんや16い〔〇婆塞〕の人は、閻王と聞ゆともおもむき給ひなんをや。又山々寺々に17あじき〔〇味氣力食力〕なく物なき行ひ人を供養し給へ」と聞ゆ。親王の君、「いと貴き事なり。御燈明は幾らばかり奉らん」大徳、「一寺に18一合奉り給ふとも、比叡の四十九院に一19日に一石四斗七升なり。大小も同じこと20、各々奉り21給はりなる。ひざう〔〇非常カ〕と22して思ひ

校異 1〔国〕右。2〔イ〕なアリ。3〔国〕にアリ。4〔イ〕ばか。5〔イ〕のアリ。6〔国〕き。7〔国〕く。8〔イ〕う。9〔イ〕身。10〔イ〕た。11〔イ〕ら。12〔イ〕へ。13〔内〕東。14〔イ〕と言は。15〔イ〕大、〔国〕御。16〔イ〕ば。17〔イ〕ナシ。18〔イ〕木アリ。19〔内〕月。20〔イ〕なアリ。21〔イ〕給ふばかりなり、〔イ〕給ふばかりなど、〔国〕給はばかならず、〔内〕給はりなむ。22〔国〕しも、〔内〕こそ。

1ならねど、佛に奉2り物はいたづらにならず、來世未來の功德な3ると聞ゆれば、4いといたうよ5ひこひ、立ち居七度拜み給ふ。「我が聖の6ごと7く〔〕如くカ、德カ〕8なし給へ9らば」大德宗慶、「何か思す。この事御心にしみためり。いとよくかな10ひ奉りなん。もし11御覽宿世なくば、すこし心もとなくなんあらむ。男女の12御中は、むかし緣のまゝなり」と聞ゆ。この君、「しかありとも、我が大事の聖の君。この事おも13んぜしめ給へ」とて、此の14御燈明の料幣帛の料みな取らせ給15へ16、又迫り凝れたる大學の衆17の言ふやう、「哀れ世に18出づるやうは、得難き女を得んとせんやうは、世界にふせう19とのはず、家備なくして、便りな20からん人、道21事におきて22はしきし〔〕進士カ〕にも入り、23とうさ24う〔〕對策カ〕し及第し、學問料賜はり、かく返すがへす物はついでを越さず25りく26ち27べきものなり。しかあるを、才あるものは沈め、無才の男は先に立つ。かくの如く28人の歎き29のぞき給はゞ、人の30歎き願ひ滿つべしとなん文講に言へ31る、まことにしかあるものなり」親王の君、「まことにしかあるべきものなり。數多の人32喜びをなさむに、我が一つの願ひ滿たじやは」と宣ひて、道の人の沈める才をばおほやけにも申し、博士どもに仰せ、33

校異 1給ふらめ。2〔イ〕る。3〔イ〕り。4〔因〕考異二字ナシ。5ろ。6〔国〕ナシ。7〔イ〕ナシ。8〔国〕にアリ。9〔国〕二字ナシ。10〔因〕へ。11〔イ〕さあらん。12〔因〕ナシ。13〔イ〕言むけ。14〔イ〕御アリ。15〔イ〕ひつ。16〔イ〕りアリ、〔因〕考異ばアリ。17〔イ〕けアリ。〔〕助カ〕。18〔イ〕言へ。19〔イ〕とゝのはず、〔因〕とものはず。20〔イ〕か。21〔因〕のアリ。22〔イ〕給アリ。23〔国〕た。24〔国〕く。25出で。26〔イ〕つ。27つアリ。28〔因〕のアリ。29〔イ〕をアリ。30〔イ〕二字ナシ。31〔国〕り。32〔イ〕のアリ。33〔国〕居り、〔イ〕居る。

言ひ所なく、食物なき人のためにとて、錢衣綿車に積みて出し立て給ひ、1へかさ得べき人の沈みたるをば京めさせ給ひて、我が御庄はみな賜ふ。京わら2はべの聞ける3ほどに、「これは易くしつべき事なり。」とおゆかり西、東の合せて六百人ばかり、又この學生の官達さばかりいますらん4。それら5みな走り集まりて6叩かは7色ふかうじ「博8打どもの「9いて、あるまじき10こと言ふく11う達かな。四面四町の殿に、12思ひこことに御門を立てゝ、甍の如くに造り重ねたる御殿13隔14木のごと上達部親王たち住み給ふ所には、天下の15いうたき軍人なりとも、うち勝ちなんや。さてかくはしてんかし。この東山なる寺の塔の守し給ふべしといふ聞えをなして、16條ごとに政所をしつゝ集まり17ちて、うちならしを為のゝしり、またかくはかりの見物は18 19たかるべしと云ひ20かさなり。かの殿は物見好みし給ふ所なり。出で給へらんを、21おつとりて盛ひ取るはかりぞ」親王の君、「面白き事宣ふ上達かな。ただかうなり。この事は、京くさ注の上給はん事は、この高隆寺の塔の守にまさるもの22はなかるべし23と宣うび24し25ろげよ」うちならしの人の料にとて、錢米車に積みて出だし立つ。

校異 1[イ]つ。2[宮]ナシ。3[国]非は、[宮]考異ほに。4以下廿字[国]ニヨリテ補フ。5二字[イ]ナシ。6[宮]戯は。7[イ]うはぬう。8[イ]打。9[宮]いらへ。10一字[イ]ニヨリテ補フ。11[イ]そ。12[イ]面。13[国]にアリ。14[イ]のアり。15[国]鰻。[宮]いら。16[イ]まちまち、[宮]常住。17[イ]り。18[イ]かアリ。19[イ]な、[イ]多。20[イ]かた、[宮]なさ。21あやとた、[国]集まる。22[宮]考異ナシ。23[イ]おこ(しをカ)アリ。24[イ]ひ。25[国]らせ。

出詞、此所は上野の宮。御殿四つ板屋寸。瀧あり池廣1し、山高し。こ2れ3し4ゝん(〇寝)殿5、宮おはらし7、男ども十人ばかり。松原植木前栽あり。此所8は9わらはべ、博10打集まり居りて物く11うふつ。12御厩あけて、家司どもあるかぎりの物どもを運び出して、この人どもに13興ふ。

かゝる事を大將の大殿聞きて、14笑ひ給ふ事かぎりなし。「我をはかなしと思して、は15かり給16(はん)と思すなり、何かははかられ奉らん17」とて、負政の少將に、「道隆寺に、上野18親王の大いなるわざし給ふなるを、政所の男どもや19がて所取らせよ。若き子どもや20がて物見せむ」と宣ふ。少將御寺に往きて、大蔵、21所取らす。宮の男ども、「我が宮の御供におろそかにいますがる殿には、なでふ所か取らすべき」といへば、少將「たゞ御車一つばかりなり。中の御殿の姫君の、お22かしろかるべき事なり。見給はんと聞え給へばぞ」と言へば、「よし。仇は德をもちてぞと言ふなる」とて取らせつ。その日になりて、大殿、下臈仕うまつる人の女、年若くかたち23よげなるを召して、裝束いとよくせさせ給ひて、舍人の女大人二人、童一人24木樵の女なり25けり。黃金造りの車一つ、檳榔毛の車二、黃金造りには下臈の女大人童を乘せ、26りやり毛27かりは蝦の御達乘せて出で立つ。「あてこその御德に、この人のかの君の御妻にてあらん事28に、階下のよき

校異 1 [閑]く。2 [イ]の、[国]こ。3 [国]はアリ。4 [イ]ナシ。5 [イ]にアリ。6 [国]す。7 [イ]ますアリ。8 [イ]に。9 [閑]京アリ。10 [国]打。11 [イ]らふへ、[閑]ふ、[閑]考異へば。12 [イ]ば。13 [国]贈。14 二字[閑]ニヨリテ補フ。15 [イ]ばアリ。16 二字[イ]ヨリテ補フ。17 [イ]かしアリ。18 [イ]のアリ。19 [閑]り。20 [イ]り。21 [閑]打ちアリ。22 [イ]も。23 [イ]清。24 [イ]はアリ。25 [閑]考異二字ナシ。26 [イ]びら。27 [イ]に。28 [イ]よ。[国]そ。

にはまさりなんかし。ゆめ氣色見すな。あてこその御正身と思ひなしてあれ」と宣ふ。

【畫詞】此所1に大將殿。物見に人出し2〔立〕て給ふ。下臈の女は年十四、かたち3はいと清げなり。大人童下衆な4んどかたちよ5し。

かくてこの寺には、今日のいろふしにて、怪しからぬ6いと多かり。遊びの7しのそは嵯峨の院の8げし9。講說の所には、講說の長、樂とて10鼓打ちて遊びす。講說とては乞食する眞似をする。かゝるほどに、大將殿の御車御前川人げかりして立ちぬ。親王の君、11しそむしへとおぼすやう、「御講始めよ」と宣へば、牛飼12辻遊びす。13すそゝくども集まりて、聲を合せてのゝしれば、物見に來たる人々、いとほしくもあ14るをかし15きもあり。傳16打京わらは17數知らず集まりて、一の車を奪ひ取る。殿の人々客騷ぎすれば、車の簾垂を掲げて18宣ふ、「奪ひ得つ。これやこの惜しみ給ふ御ためし19を罪ではからるゝ。おろそかなる罪ぞれうぜらゝる。雙六の主達」と言ひて、牛飼ども手鼓20ども打ちて、草刈笛吹く。

【畫詞】此所は21てう。らうそく〔〇雙六カ〕22そし〔〇牛〕飼集まりて居り。傳23打京わら24はべ車25むばひたり。親王の君か26こ〔〇片カ〕尻切して車に走り乗り給へり。

【校異】1国は。2一字イニヨリテ補フ。3イナシ。4丙考選れ。5イく。6国こ、丙ことい。7国のしる、イしのう、丙師に。8イ牛飼。9国なりアリ。10イはアリ。11国信實に思すにや、イ仕損じつと思すやう、丙信實に思ほして。12イつら、丙註筒。13イらうそく、丙雙六。14イり。15丙く。16国打。17イべアリ。18国見給ひ。19イり。20一字イナシ。21国寺、丙だうりう寺。22イう。23国打。24国ナシ。25イう、丙ナシ。26イた。

かくて、宮におはしまし著きて、年頃思し設けたりし所に据ゑて、七日七夜豐の明して打ち上げ遊ぶ。博打又祈りせし大德宗嚴召して、「吾が佛達の御德に、年頃なめき1み侍りつる心地しづめて2めで喜び申し侍り。今はかの佛の御3は六現はし奉り、萬の神たちに返り申しの幣帛奉らん」とて、河原に出で給4ふとて、「祈りのごとくも、諸共にこの返り申し果すこと、神佛世の中にいますがらぬものにやはありける」とて、北の方に、「吾6ろ君の御爲に、かく萬の神佛になん祈り申しし思ひもしる7く、も8ろともに果し奉ること、9などて10、

千早振る神も祈りはきくものをつらくも見えし君が心か」

北の方、

住みなれぬ宿をば見じと11行しを我には神もかひなかりけり

など氣色もなく云ふ。

〔書詞〕此所は上野の宮、女率て歸り給へり。御浴床立てゝ、北の方据ゑ奉り、又供の大人12いたり〔〇居たりカ二人カ〕朱の臺立てて、金の坏して物まゐれり。13御子達仕う14〔まつり〕まかなひし給ふ。博15打16わら17はべらうそく〔〇雙六カ〕集まりて、杌立てゝ物食ふ。京わら18はべに物かづけたり。19し

校異 1 イめ、国め見。2 イ二字ナシ。3 国德。4 イひ。5 イ事ど。6 イが。7 イし。8 イナシ。9 イよと、イなむど、異考異かなと、因と。10 国かはアリ。11 イ祈り。12 因ふ。13 国御。14 三字因ニヨリテ補フ。15 国打、16 京アリ。17 国ナシ。18 国ナシ。19 イふうく、国しうとく、異らうそく。

うく〔〇饑へカ〕に物かづけたり。此所は佛造る。此所は河原。1から一つ車にて出で給へり。容車に2

かくしのを積みて、陰陽師先馬に3出でたり。4一をきてのと申。

かくて、賤しき人の腹に生れ給へる帝の御子、三春と云ふ姓を賜はりて、若き時より國を治め位まさり、と5く〔〇年〕の高くなるまで妻もまうけず、使ひ人も使はぬ人あり。人の國にありし時は、物も食はせず衣も著ぬ人を使ひて、自らの料には三合の米おろして食ひつゝ、一國を治むるに、おほやけ事またくな6して、わたくしの7數おほくたくは8ふ、大きなる藏9は一10國治むるほどに財を積みて、11六國治むるに多くの藏どもを建てゝをさめつれば、宰相にて左大辨兼けつ。暫しあれば、衞府兼けたる中納言になりぬ。かくて京に住むにも、物食は12せ衣着で13も使はるゝ人なし。内裏に參らんとて14は、板屋形の車の、輪缺けたるに、せ15きりたる牝牛をかけて、小さき女のわら16(は)をつけ一[illegible]鞦はつれたる伊豫簾垂をかけて、布の太さを上の御衣に染めて太き調布を下襲上の袴にはきて、衞府兼けたれば、隨身舍人には、小さきわらは17べ18に木太刀を佩19きて、古わ20うう21へ〔〇蘗穀カ、大穀カ、蘗脊カ〕に22(あ)し〔〇葦〕の葉さし集めて、木の枝に細纓を23すげて、弓とては持たせて、參り罷出すれば、京のうちに誹り笑ふことかぎりなし。それを知ら

校異 1因宮。2国齋出。3イにてアリ。4因此所は祓のところ、国七字ナシ。5イし。6イどアリ。7因財アリ。8因へ。9因ナシ。10因つに。11イひ。12国ず。13国ナシ。14イめ。15ま。16一字イニヨリテ補フ。17国ナシ。18イナシ。19国かせ。20イら。21イづ、因つぼ。22一字イニヨリテ補フ。23イつげ。

ず顔にてま1てらひ給ふ。御心の賢こく、政事2長してある3く〔○歩く、力荒るるカ〕。武夫獣類もこの主にはしづまりぬ。ゝるによりなんおほやけも捨て給はざりける。かゝるほどに大臣までになりぬ。やもめにてゐあるまじ、我物食はざらん女得んと思して、布衣にある徳町といふ市女の富めるあなり、それを召し取りて北の方にし給ふ。「御かゝる車装束にて歩き給ふ事、人誹り聞ゆなり。人のそこら來るな4がき〔○名書カ、名簿カ〕を留めさせ給5ひて、衣食賜はずとも仕うまつりなん。かく小さき女の童なのみ使はせ給ふ事、見苦しきことなり」と聞ゆれば、「さも言はれたる事なり」とて、人のさるべき6使はせ給ふ。かくて人參りなどするを、徳町市へ出でたるまに、侍に人參りて晝開7しり侍8〔る〕にさ9るな〔○肴〕なしとて、上に申しければ、大殿心まどひて、我か人10かにもあらで宣ふ、「か11くればこそは人なくて年頃へつれ。如何なる費ある12をし13て14あたらしきとを、人16は十五人17、つけ豆を一さやあてに出だすとも、十まり五つなり。18たねな19くしていくそばくなり。20ぬ21るごを一つあてに出だすとも、十まり22〔五つ〕23かり。な24くして取らば、多くのぬ25るご浮出で來ぬべし。雲雀の乾鳥、これらを生けて囮にて捕らば多くの鳥出で來ぬべし」と思ひ呆れてゐ給へり。徳町歸り來て、「など物思したるやうなる」26「口惜しう物の費ある事を

校異 1伯じ。2国長して、図考異よくして。3伯ゝ。4伯づ。5図へば〔○はばカ〕。6国をアリ。図考異、者をアリ。7国汁に。8一字図ニヨリテ補フ。9伯か。10伯ナシ。11伯ゝ。12図事アリ。13伯りアリ。14上五字国あるらん。ましこ。15伯く。16国ナシ。17国にアリ。18国これ。19国ら。20伯はアリ。21伯か。22二字国ニヨリテ補フ。23伯な。24国ら。25伯か。26伯いらへアリ。

數ふれば多くの損なり。くやしく人の言をききて、我世に知らぬ事を聞く事」と宣ふ。徳町いほしき事かぎりなし。大殿、「男ども酒買ひて肴乞ふぞや。1かけて明けば心地こそまとへ」市女うち笑ひて、爪弾きして聞け、「かくばかりの事なやは心地まどはしては思しつる。賤しき身にだにさばかりの事は思2ひ給へぬものを」とて、納殿あけて、よき果物干物3あけて出だす。大殿物も覺え給はず。住み給ふ所は、4七條の大路のほどに二町の所、5四面に藏立てならべたり。住み給ふ屋は三間の萱屋、片し6は土、編み垂れ蔀、狭りは檜垣、長屋一つ、侍7小舍人所帳た8れ、酒殿9方は蔀のもと10めで畑作れり。殿の人11上下鋤鍬を取りて畑を作る。大殿自ら作らぬばかりなり。かかるを或る人、「御蔀のもとまで畑作られ、御前近き對にてかくせしめられたる事、あるまじき事なり。この御藏一つ開きて、清12ら13なる殿かい造らせ給へ。財寶には王よく、14あなん申すなる。天の下謗り申す事侍るなり15と申す。一あぢきなき事は、これ大將ぬしい、大きたる所によき屋を造りたてて、天の下16好色者どもを集めて、物をのみ盡くすは、何の清17らなる事か見ゆる。その物をたくはへて、市18し商はぬこそ賢からめ。19(我かかる)住居すれども、民のために苦しみあらじ。清20ら21する人こそ、おほやけの御爲めに妨をいたし、人の爲に苦しみをいたせ」など宣ふほどに、小さくて病して、ほとほと

校異 1〔女〕考異かげにて。2〔女〕考異う。3〔女〕三字ナシ。4〔イ〕一。5〔イ〕に。6〔国〕崩れ。7〔女〕ナシ。8〔イ〕た。9〔国〕のアリ。10〔イ〕ま。11〔イ〕上。12〔イ〕う。13〔イ〕二字ナシ。14〔イ〕と。15〔国〕いらへ、いな。16〔イ〕のアリ。17〔イ〕ら。18〔国〕に。19 四字〔イ〕ニヨリテ補フ。20〔イ〕う。21〔国〕にアリ。

しかりけるに、親大きなる鰐どもを立てたりけ1り。亡くなりにける時に言ひ置きけれど、かゝる財宝の王にて果たさず、その罪に恐ろしき病2「ふきて〔○吹き出カ、付きてカ〕、ほとほとしくいますか3る。市女祭り祓せ4すせんとする時に宣ふ、「あたら物を、我がために饗ばかりのわざすな。祓すとも散米に米要るべし。籾にて種なさば、多くなるべし。修法せんに五石要るべし。壇塗るに土要るべし。土5三寸の所より多くの物出で6て、瓜7の核8を一つに質のなる歟あり。菓物に食ふによき物なり。胡麻9す油にしぼりて賣るに多くの錢出で10て、その糟味噌代へ使ふによし。粟麦豆大角豆かくの如11き雑役の物あり」とて、せさせ給はず。かくて隠れ給へるほどに、まうで12ぼる物、日に橘一つ柚三つまで13たまは14らず。「いたづらに多くの橘食ひつつ、核一つに木一本15なり生ひ出でて多くの實なるべし。今は食はじ」と宣16ふ、いさゝか17物18まう19ぼらで日頃へぬ。「此所20にはあらで、橘一つ食はむ」と宣ふ。五月中の十日頃21橘22これ23は、24なつてなし。この殿のみそ25〔の〕〔○御園〕にあり。みそかに市女取りてまゐる。大殿26 27干市女の胸に28五つばかりにてある、は29ら〔○腹〕30と怨じて31父に申す、「32こゝ33の橘を取りてなんまゐりつると申さんと言ひつれば、粟34米を

校異 1 周る。 2 [イ]つ。 3 [イ]り。 4 [イ]さ。 5 周三。 6 国来。 7 [イ]ナシ。 8 [イ]ナシ、国は。 9 国は。 10 国米。 11 周く。 12 [イ]のアリ。 13 国う。 14 国ら。 15 周考異二字ナシ。 16 周ひて。 17 [イ]なるアリ、国もアリ。 18 [イ]もアリ。 19 [イ]のアリ。 20 国たらむ」。 21 周ナシ。 22 周な。 23 周ば。 24 周たべ、国かつ。 25 一字[イ]ニヨリテ補フ。 26 [イ]のアリ。 27 国此の。 28 [イ]はアリ。 29 [イ]は。 30 国を。 31 [イ]大殿。 32 周まゝアリ。 33 上四字[イ]まことと。 34 [イ]舗めて。

仰みてなん哭れたる」といふ。弱きみこゝ1ろに、胸つぶ2る3かしき事を聞き給ひて、物も覺え給はず。市女、「いと人聞き悲し。この吾兒を罵れ4ど、腹立ちて、制し給ふ事とて申し給ふ5ぞなん6ど云ふ。業にやあらざりけん御病癒りぬ。かくて、市女の思ふほどに高き人につきたれど7は、我が賣り商ふ物をこそ、我が身より始めて8つ着れ、我がほどに9あ10らむ夫をこそせめと思ひて、逃げ隠れぬ。市女のありて、知らせでとかく傷しにならひて、侍の人々時々物申しければ、大殿、「おほやけに仕うまつればこそ人のなきも苦しけれ。畑を作りて、一人二人下衆を使ひてあらん」とて、位を返し奉り給ふ。11例なき事宣ふ。「つ12たなき身にて、高き位13をもちゐるべからず。山賤ら14しらを15（し）たがへて田畑を作らむ。この位を返し奉り16て、一國一を賜はらん」と申す。さも言はれたりとて、大臣の位を止められて、美濃の國を賜ひつ。

畫詞　此所は七條殿。四面に築地て17り。寢殿は端18はつれたる小さき當屋。編み垂れ蔀一間あけて、簾簾垂懸けたり。御座所九幅なる席敷きたり。つ19は（（御）立障子立て、太き綱引きて布の御衣かけたり。み走20つら（（御枕）榑の頭。大殿物まう21のぼれり。三脚の臺、裏黑の坏、しら22し（（白米）に麥のおもの混せたり。23みちものなきいはし、水仕所、寢殿、24北の方、頭白き女一人水くむ。女童一人

校異　1〔イ〕ち。2〔イ〕ら。3〔万〕は。4〔万〕ば。5〔万〕に。6〔万〕と。7〔イ〕ナシ。8〔国〕は。9〔万〕考異な。10〔イ〕たアリ11〔国〕ナシ。12〔イ〕き、〔イ〕さ。13〔イ〕ナシ。14〔イ〕二字ナシ。15一字〔イ〕ニヨリテ補フ。16〔国〕なん、〔イ〕て。17〔万〕にアリ。18〔国〕崩。19〔国〕い。20〔イ〕く。21〔国〕ナシ。22〔国〕げ。23〔国〕あはせの物なし。こゝは、関めぐりの物なし。こゝは。24〔国〕のアリ。

おもの1ほり仕うまつる。これは2て〻店に3女居り4つ〻物賣る。5から出して女しはらひ、6これは侍7の人ども畑作る。大殿くゝりあけて、榑の足駄8はきて、錫つきて、布の直垂着て立ち給へり。9荷車に魚鹽積みに持て來たり。預どもよみ取りて店に据ゑて賣る。

かくてあり經給ふに、このあて宮10御かたち、萬の人聞き過ぐし給はぬを、この大殿、かゝる御心にいかでと思しけれども、聞え給ふ便もな11し。思ほしけるやう、かの殿の聞き給ふに、かゝる住居せじと思して、四條わたりに大きなる殿買はれて、財寳を盡くして造る。家の内の調度、あるべきかぎり調じ、よき人の娘品々數多使ひ、綾帯ね著せ12つかひ、自らも綾、手織ならぬ物著、13錫の臺、金の坏ならぬ物食14いず。かくいかでと思ほすに、あて宮の御方の宮内の君といふを、殿に召して宣ふ、「かしこき事なれど、中の御殿の姫君に、年月聞えさせんと思ふを、畏まりてなんえか15くとも16(聞えぬ。かくひとり住し侍るを、かたじけなくとも)渡りおはしましなんや。御身一つさぶらひ給は17ん。上下の人は心もとなき事あらせじ。司返し添へ18譲り侍れども、家の内になき物はなし。時の上達部も貧しきものなり」宮内の君、「げに一所物し給ふを、殿の君達の數多おはしますを、さて物し給はゞよからめど、19きやうに大人しき住居し給ふべきなんおはしまさぬ。此所に當り給ふは、誰も、聞え給へど、思ひ定めすなん。さはありとも、かくなん

校異　1イ盛。2[?]ナシ。3[?]若異扁。4[?]て。5[?]此所は田居女ども布織る。6[イ]う。7[?]所。8[?]をアリ。9イ馬。10イのアリ。11[?]く。12[?]て。13[?]失。14[?]は。15[?]考異う。16以下廿字[?]ニヨリテ補フ。17[?]ば。18[イ]てアリ。19[?]さ。

と聞えて、御返事は1」2(と)3いふ、大殿、「畏まりも喜びも一度に聞えん」とて、大きなる衣箱二に、麗しき絹疊み綿など入れて、「これは賜はれる國の物なり。さき〴〵の國の物もいと多くさぶらふ」と言ひて歸しつ。

〔書詞〕此所は致仕の大臣殿、四條の寢殿、對4(四)、5かた(○渡)殿あり。寢殿に帳立てたり。蒔繪の厨子、被して6奉り。綾の屛風、褥、上席敷きたり。新らしく大人童裝束したり。物參る。臺四して、裳唐衣着たる人賄す。上の鋺7青し著た8る童參れり。宮内の君に折敷して物參れり。は9た(○箱)に物入れて据ゑたり。

かく10(て)四月ばかりになりぬ。侍從の君猶この御心ありて、いかでと思せど、この二所をば、あるが中に畏まり聞え給へど、え思し忘れず、かく聞え給ふ。

「鹽の海も身につゝまるゝ物ならばかひなきまでも知らせざらまし

思ひ止むべかりせば、まさにかくもと聞え給ふ。いらへも聞え給はず。その夜、簀子に御殿籠りて、御達に物宣ひなどしつゝ、「怪しく明けがたき夜かな」11など12聞え給ふ13に、郭公數多度鳴く。14中納言の君、「鳴く一聲とこそ云ふなれ。怪しうも宣ふかな」侍從の君、

校異 1 [国]聞えさせんとアリ、[異考]異聞えむアリ。2 一字[異]異考ニヨリテ補フ。3 [古]一字ナシ。4 一字[仁]ニヨリテ補フ。5 [仁]わ。6 [仁]立てたり。7 [異]あこめ。8 [仁]り。9 [国]こ。10 一字[仁]ニヨリテ補フ。11 [仁]と。12 [仁]宣。13 [国]ほどアリ。14 [異]少。

一聲に明くなるものを時鳥こゝら（本）[1]しのゝめ

少納言の君、「みた[2]今宵は」など言ひて、

郭公旅寢する夜のしのゝめは明けすく惜しきものに[3]こそありける

またつとめて、蜘蛛の巣かきたる松の露に濡れたるを取りて、あて宮の御殿籠りたるを見て聞え給ふ、

「さゝがにのいかで根松に白露のおき居ながらも明かしつるかな

羨ましくも御殿籠りたるかな」と聞ゆ。聞かぬやうにて物も宣はず。例の[4]宰相、[5]簾に詣で給ひて、それよりかくなん、「日頃は山籠りしてなん。

憂き事を思ひ入るとはなけれども深き山邊をいくら見つらん」

と聞え給へり。[6]（あて宮）

繼かへり數おく[7]露の時の間に枯れぬる山[8]に見えは網また

又兵部卿宮よりかく聞え給へり、「たびたび覺束な[9]くなると、心に籠めてとかいふなる。さてもかうおはしますをば、承るやうもやあるとて、

校異 1〔イ〕四字ナシ、〔イ〕鳴なるしのゝめの空、〔西〕旅寢の惜しきしのゝめ、〔宮〕鳴く音にくらきしのゝめ、〔宮〕若異鳴けども明けぬしのゝめ。2〔イ〕人アリ、3〔國〕そ、〔イ〕ナシ。4〔宮〕若異寶忠。5〔イ〕志賀、〔西〕志賀比叡。6 三字〔イ〕ニヨリテ補フ。7〔宮〕霞。8〔國〕と。9〔國〕く侍れど、〔宮〕ながら。

滝つ瀬も泡にな1らはぬいとひがは（○糸魚川か）結へる人のあれ2になりけり」

あて宮、

「いとひがは結びも知らぬ心には泡なら3ぬともあらじとぞ思ふ。

かくて聞ゆるをも見給へかし」と聞え給ふ。宰相殿より、

「水籠りて思ひしよりも池水の云ひての後ぞ苦しかりける

思ふ事聞えし人は聞えけるものを」とあり。御返しなし。4中納言殿より、

「夏衣薄くはいつも見ゆれども涙漏りそふ頃にもあるかな

珍らしげなき御心を、怪しく」など聞え給へ5ろ、御返りなし。女御の君の御腹の皇子も6りて7又御妻もなくて、あて宮をと思せど、ついでなくて8え聞え給はぬを、外より聞え給ふ（ひかへ）、御返りなど聞え給ふもあるを見給ひて、「かくよそなる人だに聞え給ふものを、此所にこそ怪しうつゝま9しけれ。

音にのみ聞ゆる風10に吹き立つる雲のあたりに何かすみけむ

ねたくも」など聞え給へ11る、御いらへなし。

また死にける良岑の12しひとつに、花園と云ふ、殿上童に使ひ給ひける、年十歳はかりなる、かたち清

校異 1[活]りぬる。2[活]ば。3[国]ず。4[国]字アリ。5[国]り。6[活]一字ナシ。7[国]まだ。8[活]ナシ。9[活]れ。10[活]も。11[活]ど、[国]考異り。12[国]一人子に、[国]四位の一人子に。

に心賢1く、帝生ひ出でぬべき者と御覽ずるに、父が供に筑紫に下りて、2唐船の檢視に出で立つ。唐土人、「我が國に生ひ出づるものにも劣らぬものかな」とて、誘ひ取りて率ていぬ。父母續ひ3し悲しびて、死ぬるも知らで唐土に渡りて、文を一に二讀む。そ4ゝれならぬものも、賢き人の5末6わざせぬなし。7いまよりはじめて、萬の物の音知らぬなく上手たり。十にて8わたりて、八年と云ふに、交易の船につきてこの國に歸りぬ。帝聞し召して、「怪しく9隱れにし童の參りて來たなり」と宣ひて、召して御覽ずるに、童10のいにし時よりも、かたちも清らに見給ふ。さらにかく11くこうせぬわざなし。帝、「上にさぶらひし者なり。12もの13 14し仕うまつらせて聞かん」と宣ひて、式部の丞兼けたる藏人になされぬ。暫しありてかうぶりえて、兵衛の佐になりぬ。春宮にも、上許されて、琵琶仕うまつる。15若宮16かふもさ17子〔○箏〕の御18はく仕うまつる。かくて、いと賢き時の人にて、夜晝内裏春宮にさぶらひ19て、定めたる20女なし。思ひかくまじき人に物聞えなどして、このあて宮の名高くて聞え給ふを、いかでと思ひて、言ひたはぶるゝ人に物も言はず、よき人の娘賜へど得で、大將殿の兵衛の佐の君同じ司に物し給ふを、うるはしく語らひ聞えてあるを、大殿見給ひて、「此所に〔○は力〕かく若き男子ども許多侍21つる所なり。定めたる里なんども設け給はざな

校異 1［イ］し。2［イ］唐土。3［国］ナシ。4［イ］ナシ。5［国］する。6［イ］にアリ。7［宮］琴。8［イ］い。9［イ］てアリ。10［国］にて。11［国］し、［イ］う。12［イ］琴。13［イ］のアリ。14［国］音。15［宮］若宮后。16［国］に。17［イ］う。18［イ］琴。19［イ］き。20［イ］妻も。21［イ］べ。

るを、顯純が侍る所を見（〇）（然とカ）1思ほせかし。宮あこまろを弟子に2かし給へ。いかでこれをだに物聞き知りたる者に生し立てん」と宣ひければ、行正喜びて、兵衛の佐の君の御方に曹司造りて、たゞ其所にのみなんありける。3（年かはりて）三月ばかり、御前の花の盛りに、4花の宴し給ひけるに、行正歌作り遊びもしければ、君達の御衣一襲賜ひけるにも、思ふ心ありけれども、その日にはあらで、宮あこ君に言ふ、「5ほに君にいさゝかなる事聞えん。6人に宣ふな。行正を思ほさば」宮あこ君、「なほ宣へ。人にも言はじ」と宣ふ。7（行正）

「8四方の海9に玉藻かづきし蜑しもぞ荒れたる波の中10も分けける

おほけなき心つき11（ぬる）ものになん。」と書きて、宮あこ君に「これな12る（〇中）の御殿の姫君に奉り給ひて、御返事取りて持ておはしませ。さらずは御13文も習はし奉らじ」宮あこ君あて宮に奉らせ給ふ。「た14るぞ」と宣ふ。「まろに15文習はし給ふ人のなり」と言ふ。「16御ざましの事や」とて見給はず。「なほ見給ひて御返り賜へ」と宣ひて、「今言はんものぞ」とて、泣きのゝしり給ふ。あ17こ宮、「かゝる人の返事はせぬものぞ。たゞ、見せつれば目ざましとなん言ふとを宣へ」あこ君、「さらば、まろに18文習はさ

校異 1［イ］とアリ。2［イ］ナシ。3五字［国］ニヨリテ補フ。4［イ］二字ナシ。5［国］今日、［因］やう。6［因］考異行正を思ほさば人に宣ふな。7二字［国］ニヨリテ補フ。8［因］考異他所。9［イ］の。10［イ］に。11二字［因］ニヨリテ補フ。12［国］か。13［イ］笛。14［国］が。15［イ］笛。16［イ］目。17［イ］て。18［イ］笛。

じを1おや」など泣き給ふ。2いま宮、「幼なき子に女を取らせて、淵3瀬も知らせず責めさするは、かしこきわざかな。聞きにくしとて、見よとすめりかし」と宣ふ。

〔畫詞〕此所は大將殿。あて宮いま宮物まうづる。簀子に侍從の君4障籠れり。御達簾の内に居て物言ふ。侍從松の枝折5もて持ち給へり。6やゝ逃げてあて宮に文奉りて、足摩をして泣く。君達二所兵衛の君など居て、人の御返聞えたり。三の皇子琵琶彈き給7ひて8居給ひて、あて宮9物聞え給へり。

10宰將のうつ滋野眞菅といふ宰相、年六十ばかりにて、子どもある妻、道11まで失ひて、上り來たり、あて宮を聞きつけて、いかでと思ふ。ついでなくてえ聞えぬを、そのわたりに住む12女、かゝる事を聞きて言ふ13ほどに、「大將殿にこそ君達數多おはすれ。皆14み方に15(むこ)取りし給16ひつれど、今一柱はまします」師、「よろしき事なり。父主に17たびまつらむ18(と)思ふ」坊の帶刀なる御息子のいらへ、「かの君19の宮よりもいと切に召す。上達部皇子達も數多聞え給へど、たゞ今は思ほしも定めざめり。自ら少將委しき事は聞え給ひてん」父主のいらへ、「かの父主は物20はさふらふべきとせざりし主ぞ。されば21をしめぬなり。22ますらをが莊物總23りしめて、仲媒にわきざし等打して請はしめむ。24おしくのみかたはくづすとも、得

〔校異〕1〔古〕ナシ。2〔国〕あて。3〔古〕と。4〔図〕御アリ。5〔古〕り。6〔古〕やがて、〔古〕やとて、〔国〕宮あこ君。7〔図〕う。8〔古〕四字ナシ。9〔図〕にアリ。10〔古〕太宰の師、〔国〕又太宰の帥。11〔国〕に。12〔図〕婦。13〔図〕やうは。14〔古〕御。15二字〔古〕ニヨリテ補フ。16〔図〕へ。17〔国〕乞ひ、〔古〕たて。18一字〔国〕ニヨリテ補フ。19〔国〕は嫁、〔古〕東。20〔古〕いひ、〔国〕い、〔図〕考異はいひ。21〔図〕せ、〔図〕考異しを。22〔図〕眞菅ら。23〔図〕ら。24〔図〕多くの財寶は盡く、〔古〕多くのみかたははへ。

かわてんやは」1女のいらへ、「しか2や。何かは聞し召さ3らん。世界は一に4とぞ。事は猶5女たばかり聞えん。父大殿にもな聞え給ひそ」主のいらへ、「さもせしめん6かし」7女、「かの殿の御乳母、なかどの〔〇中將カ、長門カ〕8ゝお9(み)とといふ知り給へり。それにこの案内な語らひた10いまつらん」とて、大將殿に11女往きて言ふ、「12ほに此の頃參うでんとしつれど、雨のかく降れば、頭もさし出で13でなん侍りつる14なり」と、霖雨の降れば、事たばかりも得せで、わら15かつれぞれて頽らふ。女ども「御世の中は如何にぞ」16女のいらへ、「怪しきやうにてぞ侍る」なか17らと18るい19らへ、「我な此の頃は騒がれて、ひと喜びもせでぞ籠り居る」20女、「暇にましますなるを、21女の宿りにみ22さい賜は23らむ。この今日24ばかり、ありしはた25えけ〔〇畑カ、腐カ、肌巳カ〕打剝ぎて、麥さすばかり、昨日なんちぎり集めて侍る。何の粉もつ26ほじり〔〇窟尻カ〕に入れて參うで來ぬ。27甘28ひら29うとも一口參らん。さて物語らひも打聞えむ30か。知れるどちこそあど語りもす31なれ」「さ32や。よく宣へり。此の頃は騒はしき物なり。殿には人いと多かれども、我らが友達にすべき人もなし。乳母たちも若くとて、あるかぎりぞある。我のみ貧しく老い

校異 1因嫗。2国なり。3伊ざアリ。4国こそ。5因嫗。6伊二字ナシ。7因嫗。8伊ナシ。9一字伊ニヨリテ補フ。10伊て。11な嫗。12国げに、因やう。13国がたく。14国なかどの、因長門のいらへ、因考異長門。15伊はべ。16因嫗。17伊ナシ。18因が。国のか。19因考異ふ。20因嫗。21因嫗。22伊まは。23伊ナシ。24伊たアリ。25因け、因考異き、因考異え。26因考異をしく。27因甘。28因か。29因ず。30伊かゝ。31伊ナシ。32国なり。

痴れにたるや」といふ。1女、「何れの君にかは仕うまつり給ひし」「太郎左大辨の君になむ仕うまつりし」「兄におはします君に仕うまつり給ひければこそ老い給ひにけれ」とて、もろともに出でて往く。

[畫詞]此所は帥殿。檜皮屋御藏どもあり。主の御子ども、右近の少將、木工の助、藏人兼けた2り式部の丞、ば3く(○坊)」の帶刀、並び居たり。娘三人、御達廿人ばかりあり。主物4さる5か。だ6は〔○摹〕7こよろひ。祕色の坏ども。女ども8朱の臺金の坏取りてまう9のぼる。男ども10朱の臺金ま11るして物食ふ12べし13ども。透き箱餌袋置きこし、男ども居並み14て、15色なる娘ども居並みて、綾羅纏え16か。主、「大將殿物要りげなる殿なめり。白き米17二百石が祭作らせよ」と宣ふ。此所は主の御子ども、男、女、つ18とめて物語す。筑紫船のつ19るへ人20も來たり。「三百石の21舟22着〔○搗カ〕きにたり。今かたへはこそ」と云ふ。

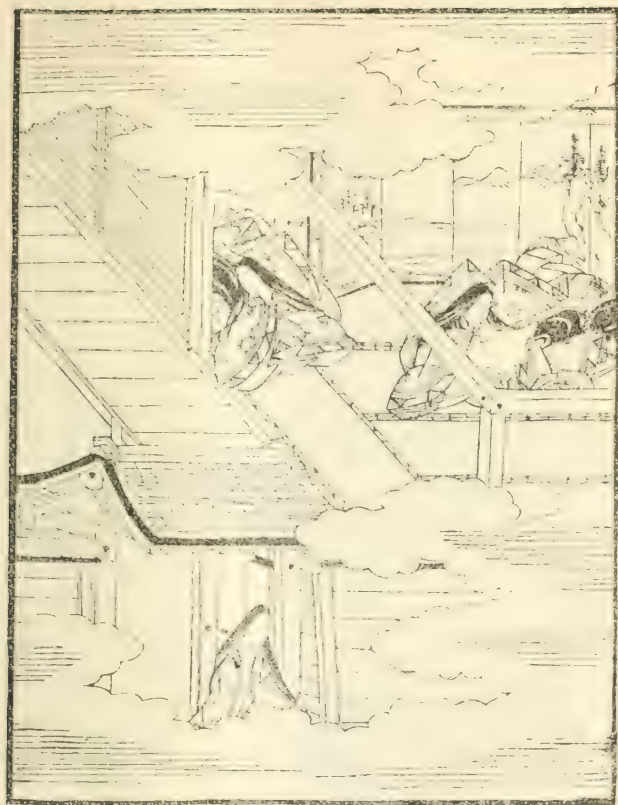
かくて、23だなか24とを帥25殿へ率て行く。帥の主、「翁やもめにて26つきなく覺ゆれば、殿の若き御達、父主に申さんとなむ思ふ。申し27へき給ひてんや」なか28とがいらへ、「大殿には聞え給ふとも、とみにも成らじ。御文を賜はりて、あて宮に參ら29ん。30女は男君になん仕うまつ31(り)て侍る。32むまごなん此の御

[校異] 1[因]嫗。2[イ]る。3[イ]ら。4[イ]ま。5[イ]る。6[イ]い。7[イ]二。8[国]錫。9[国]ナシ。10[国]錫。11[イ]り。12[因]考異人。13[国]とす、[因]考異ともす。14[国]たり。15[因]此所は。16[国]る。17[イ]三。18[イ]どひ。19[イ]か。20[国]どアリ。21[イ]米。22[イ]は。23[因]嫗。24[国]殿。25[国]のアリ。26[国]い。27[国]つ。28[国]殿。29[イ]せアリ。30[国]嫗。31一字[イ]ニヨリテ補フ。32[国]う。

方に仕うまつり侍1りぬ」「よろしき事」とて、御文書かんとて帯刀に宣ふ、「我かくやもめにてあれば、ほれぼれしきを、女人求めしめむとするに、よばひ書の和歌なきは、人あなづらしむるものなり。2和歌一つ作りて」と宣ふ。帯刀をかしう思ひながら、「3じぎをばせぬ宮仕のはじめに侍る4に、名附5にも添らしめんと思はしむるを、彼れ庵な見すべかりし女人6は、旅の空に離れましにしかば、物語らひすべき人もなき所には、たゞかくなんおはしむる」とて、

「あさぢ7野に茂る宿には白露のいとゞ翁を住みうかりける

刈り捨て給はんや」と書きて、「かやうにて如何あらん」と聞ゆ。「宜しかめり」とて、清らなる香の色紙に書きて、「これ必らず御返り事取らしめて」と宣ひて、なかと8か〔〇中殿カ、長門カ〕に錢五9百貫、10女に米二石取らせ給ふな11りと12喜びて参りぬ。13孫のたてきと云ふを呼びて、「14娘君は何處にかおはしますぞ」たてき、「侍従の君と御琴遊はす15に」「これ人16さに奉れ。殿の大い君の御文と言ひて奉り給へ」と言ふ。たてきあて宮に奉れば、見給へば、鬼の眼を潰しかけたるやうたる手にて、こと17ぞかくれば、あて宮驚き給ひて、「これはかの君の御文にはあらず。なかと18が得たるにこそあめれ」とて、か19くし給ひつ。

校異 1 [古]る。」手。 2 [国]やまとうた。 3 二階鈔、辭宜をもせぬ、[内]繁きおはさん。 4 [古]たアリ。 5 [国]ナシ、[内]を。 6 [国]の。 7 [古]のみ。 8 [古]ナシ、[国]の。 9 [国]ナシ。 10 [内]嫗。 11 [古]か。 12 [国]のアリ。 13 [内]孫。 14 [宮]姫。 15 [古]ナシ。 16 [国]門。 17 [古]ばかゝ、[国]ば書け。 18 [国]のアリ。 19 [古]へ。

か1くれ2その主、3女を召して、「かの文は奉らしめてきや」4女、「乳母5子いとよく聞え申さんと宣6うひ7て、御返は必らずあらん。た8そ〔〇賜〕9はりて參うで來む」と申す。主、「早10來たれ」と云ふ。11女たかと12がもとに往きて、「この御返賜はりにぞ參うで來つる」な13(か)と14〔〇長門カ中殿カ〕返し給へり15(と)16言はで、「何れのよばひ書の返しをかは一度には宣はん。度々の中にこそひ17(と)〔〇一〕度もし給はめ」18女「さらば、主の君の御もとに、お19とどの御文20を21、事の由聞え奉れ給へ」なかと22〔〇長門カ、中殿カ〕「いとよき事なり」23「殊更に大臣の御方に聞えになん奉る。かの仰せ事はいとよき折に聞えさせてき。いかゞは何時しかと24は聞え給はむ。我が大殿の君物な思ほしそ。あ25り物とを思したれ。26女し侍らば」と書きて取らす。27女持て參うで28奉る。帥の主かの御返と思ひて見るに、29女の手なり。こと30ばを31見咎めて、投げ遣りて言ふ、「32本にこの33女よき盜人なり。いかでか汝は、34右大將主の娘の文とて、35 36女の文をば持て參うで來る。我を謀らしめむとて、もど37ろかしむるにはあらずや。事成せとておこなはしめし米二石、たゞ今奉らしめよ。事を僞りて物を盜めるなり。おほやけにたゞ今奉らん」と

校異 1国くて、イかれば。2国帥。3因嫗。4因嫗、イナシ。5因考異に。6イナシ。7因き。8国ま、因ら。9因ば。10因行き。11因嫗。12因考異の。13一字国ニヨリテ補フ。14国のアリ。15一字イニヨリテ補フ。16因とはアリ。17一字イニヨリテ補フ。18因嫗。19国もと。20国に。21因奉りてアリ。22国のアリ。23イとてアリ。24イナシ。25イが。26国嫗。27因嫗。28イてアリ。29因嫗。30イナシ。31因ばえ見で。32国げに、イには、因やうは。33因嫗。34国左。35国異アリ。36因嫗。37イめ。

て、髪に綱をつけて後手に縛り、大きなる木に縛りつけたり。1女縛られ居りて言ふ、「2本にかの文は猶見そ3ゝなはせ。かのめ4給と〔乳母カ、求め給ふカ〕5事の由聞えつるなり」6その投げ遣りつる文を取りて、下り走り、7女のもとに往きて8、「9本に我10が11女12どもや、あやまち仕りてけり。かの女人の文かとて見るに、手のあらざりつれば、しか申しつるなり。かの仲媒の、由言ひ遂れるなりけり」とて、手づから解きゆるして、率ていまして、簀子に席敷きなどして、物食はせたり。米二石布十匹取ら13す。「事成りなむ時、千匹の綾錦も渉さむ。怪しからぬ事は忘れてましね」14女「賜はる事は貴けれど、15心もあ16からしくひ17と縛らせ、贈18へる物をも召し返せば、行く先も御覧19あやまちなば、かくこそはあらめ。事成りなん時綾錦も賜はらん」と言へば、又うち腹立ちて、「大方20は21女のなどかくは申22し候。やつ、今23くた縛りかけよ。汝口入れ24ずとも、我が財25あらば26ありなん」と罵り給へば、逃げて去ぬ。かくてあて宮の御方に、殿守といふ27なる人ありけり。これを家に迎へてこの事言ふ。殿守「いとよき事なり」と言ふ。「この事成し給28ひつらば、29ますを白き頂の上に据ゑ奉りて、30頂きに31頂き奉らん」と言ひて、綾十匹、錢卅貫取らす。

校異 1因遍。2国げに、不ナシ、因やうは。3不ナシ。4不の。5不のアリ。6因帥。7因遍。8不言ふアリ。9国げに、因やう。10因ナシ。11因遍、因考異ナシ。12因考異おもとや、国翁。13因考異せ。14因遍。15御アリ。16不らゝ、国ら〳〵。17不ナシ。18因ひつ。19因じアリ。20国の。21因遍。22不す。く。23不ま。24不せアリ。25不しアリ。26因成。27不古。28不へ。29国汝。30不三字ナシ。31不二字ナシ。

1るくて、例の宰相兵衛の君を呼びて、物語などし給2ひつる、「いと嬉し3かく御返りを聞え4て5給へりしを、すなはち6お7持た8すへりし。比叡の9 10たりに、物忘れせさせ給へと申しつるほどになん」兵衛、「久しくおはしまさざりつれば、何處にならんと11御殿の君も聞え給ひ、12大將よりも聞え給ひしは、13山籠りし給14ひつるにこそありけれ」15「心靜かにてこそ宮仕もすれ。世にあるべくも覺えぬには、誰が留め16かは交らひをもせん」と宣ひて、御返17書き、「奥山に賜はせたりし18は、すなはちこそ聞えさせんと思ひ給へりしか。塵19へ山はさ20のみやは」とて、

恨むれど嘆く數にも居ぬ塵や深きあたごの21はね〔(峰)〕となるらん

とて、兵衛の君に、「これ參らせ給ひて、御返賜はりて給へ。た22ゞかぎりなく嬉23(し)かりしを、24今までなしてなん。猶御心とゞめて思ほせ」兵衛、「さ思ひ給ふれど、古里物し給ふとこそ思したためれ」「いで、まろ25う綻縫はん26だにぞ持た27らぬ。よし見給へ」とて、紋搔練の袿一襲、小袿、袷の袴賜ふとて、

唐衣解き縫ふ人もなきものを涙のみこそ濯著せけれ

とて取らせ給ふ。兵衛、「この御綻こそ心うけれ。

校異 1 [イ]か。2 [イ]へり、[国]ふ。一日。3 [イ]ナシ。4 [国]ナシ。5 [内]考異賜は。6 [国]ナシ。7 [内]贈り。8 [イ]ま。9 [国]わアリ、[内]御アリ。10 [イ]堂。11 [国]中のアリ。12 [内]大殿。13 [国]さばへアリ。14 [イ]へ。15 [国]いらへアリ。16 [イ]にアリ。17 [国]り聞え給ふ、[内]かく聞え給ふ。18 [内]かば。19 [内]の。20 [イ]やアリ。21 [イ]み。22 [イ]ぐひ。23 一字[イ]ニヨリテ補フ。24 [内]命と。25 [イ]ぞ。26 [内]人アリ。27 [イ]え。

縫ひしをも綻1びまでに忘るれば結ばん事もいかゞとぞ思ふ

更に見給2へじ。何にか參りつると宣はんも3のを。召ありとも今は參り來じ」いらへ、「怪しくも宣ふかな。對面したりつる、4た聞え給ひそ5かし」6(「あ7たりも怖ぢ聞え給ふ8かな」9など物語10多くし給11ひて、兵衛は12今ぞのぼりぬ。13兵衛此の御文奉りて宣ひし事ども聞け14、いらへもし給はず。15宰相中の御殿の簀子に立ち寄り16て、兵衛の君呼び出でて、「いかにぞや」17など宣ふ。「いとよく聞え18しかど19物20も宣はず」21など22聞ゆ。夕暮に外より23取り持て24來たる、鳥の子の塒も知らで鳴き歩くを見給ひて、

「巢を出でて塒も知らぬ雛鳥25のたぞや暮れゆくなよと鳴くらん

我一人にはあらざりけり」と宣ふを、26あて宮聞し召す27。28父、兵部卿宮より、「久しく思29ひ給へ、侘び30たる心地も、ほのかなりし御返りになん思31ひ給へ慰めつる」32とて、

夏の野にあるかなきかにおく露をわびたる蟲は賴みぬるかな

校異　1国ぶ。2国は。3国苦しき。4国とアリ。5国二字ナシ。6以下三百五十餘字国ニヨリテ補フ。7国ま。8国に。9国考異とて異。10国考異うアリ。11国考異ふ。12国參う。13国二字ナシ。14国れど御アリ。15国かくて、海アリ。16国給ひアリ。17国聞えし事は聞え奉り給ひしか。いらへ。18国給ひアリ。19国もアリ。20国考異ナシ。21国考異二字ナシ。22国二字ナシ。23国二字ナシ。24国參り。25国も。26国内にも。27国たるべしアリ。28国ナシ。29国う。30国つ。31国う。32国さろは。

1と聞え給へり。御返りなし。

2右大將殿より3も、「かひなければ、聞えにくけれど4も、えさも思5ひ果てぬものになんありける。

かくばかりふみ見まほしき山路には許さぬ關もあらじとぞ思ふ

深き心は頼もしくなん」と聞え給へり。御返りなし(6)。平中納言殿より、「聞えそめては久しくなりぬれど、覺束なきは如何なるにか」とて、

幾度かふみまどふらん三輪の山杉ある門は見ゆるものから

度々のは如何なりけむ」とあれど、御返りなし。人々の御返り聞え給ふを、三の皇子、御前近き松の木に蟬の聲高く鳴く折に、かく聞え給ふ。

「かしがまし草葉にかゝる蟲の音よ我だに物は言はでこそ思へ

住み所7ある物だにかくこそありけれ」あこに宮聞き入れ給はず。侍從の8、御琴遊ばすついでに、

人を思ふ心9いくらに碎くれば多く忍ぶになほ言はるらん

例の聞き入れ給はず。行正あこ君10にかく聞えたり。

山がつのあとなる水も濁ければ空行く月の影を待つかな

校異 1 [国]この度は。2 [イ]左。3 [国]ナシ。4 [国]ナシ。5 [国]う給へ。6 以上二百五十餘字[イ]ニヨリテ補フ。7 [イ]のアリ。8 君アリ。9 [国]はちゞ。10 [イ]して。

[畫詞]此所は大將殿。あて宮おはす。侍從の君と御碁遊ばす。三の宮御碁遊ばす。御達いと多く、[illegible]などさぶらふ。此所は北の大殿。宮。御臺立てて物參る。人の奉れる物いと多かり。帥の奉れるとて、透き箱唐櫃に絹綾など入れて、陸奥守の奉れるみちのく1紙あり。宮透き箱開けて綾など見給ふ。大殿內裏へ參り給ふとて急2ぐ。御車に裝束して立てたり。御廐よりうつし馬ども引きたり。御送りに君達うち連れて參り給へり。此所は政所。四位五位七八人ばかり、おろし3をく(〇置くカ)。此所はたてま所。厨雜仕合せて五人ばかり。別當、預ども就きたり。鷹飼鷹据ゑて、鵜4ゐどもあり。御鳥の魚屋、むとみすと小さい(〇鯛カ)ども多かり。俎ども立てて魚料理る。

かくて帥の主、九の君は宮仕へし給ふべしと聞きて、腹立ちて、殿守の曹司に忍びて入りて、「5人のいましむる五月は去ぬ。今はかの事なし給へ。物言ひきりになす(〇せカ)そ。事は間たゆましむるは悪しきわざなり」いらへ6には、「7思ら給へるを、煩らはしくぞ思ひ給ふる」帥腹立ち8、「9もすゝ10らをなむたけあらしめ11ば、ひ12たじらひやせんと思はしめ13。何か煩らはしからむ。筑紫より上り參うで來し14に、女人は隠れましにき。豐後の介の愛女、わら15たうにとて與れたりしを、この春、子一人生してかくれましにき。童をぞ取りて侍る。さて國王に奉るべしと聞くは、何でふ事ぞ。何れの人の、き16こしおける女人

[校異]1 [イ]にアリ。2 [イ]ぎ。3 [類]食ふ。4 [類]飼。5 [イ]かくアリ。6 [国]そ。7 [類]思ひ給ふる方のありと聞し召して。8 [イ]てアリ。9 十二字[国]さ宜ふは、持て侍る女人の猶無禮、[類]腹立ちて、持。侍る女人の無禮。10 一字[イ]ナシ。11 [国]て。12 [国]こ。13 [イ]しアリ、[イ]めアリ、[国]ししアリ。14 [イ]ナシ。15 [類]考異と16 [イ]さし、[国]こえ。

をかしかはせしむべき。よく思ひ計りて、しかはせしめん」殿守、「よ1にしかあらじ。内には女2の君おはしませば、如何3参り給はん」帥の主、「女人の見たいまつるべくば、4をく率て給べ5りや」殿守、「うたても宣ふかな。所謂あて宮ぞかし。何時6かしか我が主にもてあ7そばせ率らん」帥、「翁をし、かの女人にあ8そばせ給べ9らば、何物かは乏しか10たらん。大11室にて、皆夫12しましまさふ中に、やもめにて捨て置きた13いまつるよりは、翁の片庵に率てまして、14翁の15食べん物16の17先づほごとに取り18よそひしはいにをくらしめてこそは、かしづき19置けらめ。20荘物らは、た21み身一つ22(に)た23いまつり、御衣24うつ物25にても乏しくてはあらじはや。面醜まして、人の見た26いまつるべくあらば、國27はらの一の妻になり給べ28らむにも劣らじをや」など言ふほどに、宰相の君「兵衛の君29は30など言ひてさし覗きたるを見て、31うち腹立ちて言ふ32ほど「33見れ34ば實忠の宰相にあらずや」「35いでさなり。などか此所には住みます。36心た37いれた38けひて、御39妻もなし。かくてなむ物し給ふ40」帥手41からみをして言ふ42ほどに、「な

校異 1[国]も。2[国]御アリ、3[イ]は又はアリ。[図]考異は又アリ。4[国]近。5[図]らむ。6[図]ナシ。7[図]は。8[イ]はさ。[イ]は。9[イ]ナシ。10[イ]ナシ。11[図]ぞう。12[イ]なし。13[図]て。14[図]ナシ。15[国]食う。16[図]は。17[国]まつけ、[図]御穗。18[国]よそひし初を食う、[図]夜晝魚を食は。19[国]たいまつら。20[国]雑物。21[図]ど。22一字[国]ニヨリテ補フ。23[イ]て。24[国]かつ、[図]考異だつ、[図]器は。25[国]ども、[図]まで。26[イ]て。27[イ]土。28[イ]ナシ。29[イ]ナシ。30[イ]と。31[イ]帥。32[国]げに、[図]やう。33[イ]に、[国]そ。34[国]は。35[国]いらへ。36八字[国]ぞ。殿守の君も今は、[図]ぞ。此の殿守のおとゞも今は。37一字[イ]は。38一字[イ]ま。39[図]夫。40[国]かアリ。41[イ]かき。42[イ]ほに、[国]げに、[図]やうは。

その寡婦の1ましますす所にか、やらめ男は住ましむる。心つけし2め給ふな、よく思ひ計りてしかはせしめん」3（4なかしと聞え給ひて、5宰相は外に出で給へ6は）、殿守一さきにしふありな7らんや。さる御心も見えず」「一揃ひこの8御曹司は如何にぞ、9御休ひ10明日賜11ら12びつるはみなまはり物たてま13だせん」など言ひて去ぬ。

かくて七月七日になりぬ。賀茂川に御髪すましに、大宮よりはじめ奉りて、小君たちまで出で給へり。賀茂14川の瀬に桟敷うちて、男君達おはしまさふす。その日15節供河原に16参れり。君達御髪すまし果てて、御琴調べて、七夕に奉り給ふほどに、春宮より大宮の御許に、かく聞え給へ17る。

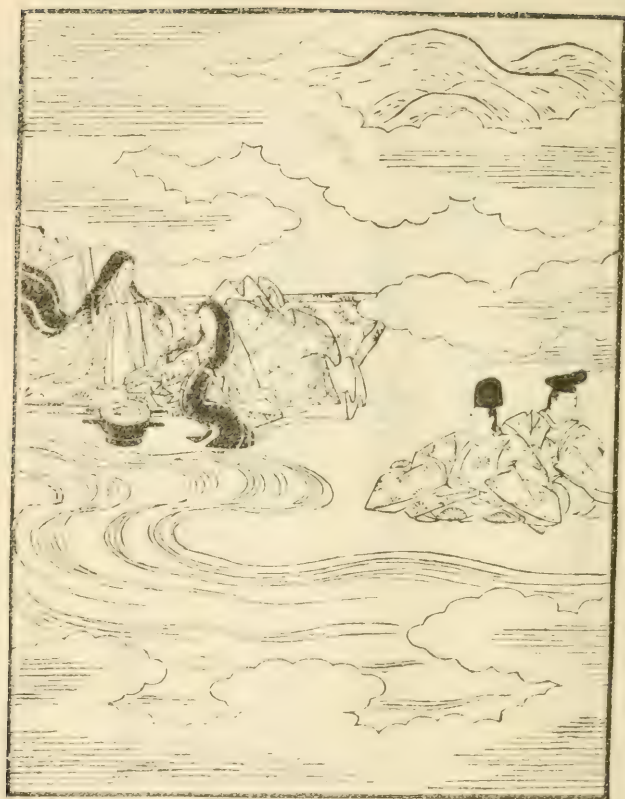
「思ひきや我が待つ人はよそながら七夕つめの逢ふを見んとは

今日さへ羨ましく頼くこそ覚ゆれ」と聞え給へり。大宮の御返り聞え給ふ。

七夕は逢ぐさめものを姫松の色つくく秋のなきや何な18り

今日とかも有れ難き人々になん」とて、御使ひに女の装束一くだり賜ふ。宮、「あてこその上につけて、人の御文見ることぞ哀なれ」とて、東宮の御文にかく書きつけて、あて宮に奉り給ふ。

東守19こと思ひしものを鷲鳥の木綿つくるまでなりにけるかな

校異 1 伍二字ナシ。2 図ナシ。3 医宰相アリ。4 以下十九字国ニヨリテ補フ。5 底三字ナシ。6 図り。7 伍なし。8 底御正身。9 国つれ／＼たるアリ。10 図だに。11 国う。12 国びつるを待ちて、嬉べらば、まらぼり。13 国つら。14 国の川。15 国のアリ。16 国てアリ。17 伍り。18 国る。19 国よ。

とて奉り給ふ。あて宮うち笑ひて、女御に奉り給へ1り。「などかは聞え給はぬ」とて、

珍らしく孵る巣守2にいかでかは木綿つけそむる人もなからん

と聞え給ふほどに、夜に入りぬ。君達3君、御琴ども掻き合せて遊ばすほどに、彦星天の川渡るを見給ひて、

4式部卿の宮の御方、

白露の置くと見し間に彦星の雲の舟にも乗りにけるかな

中務の5御方、

秋6あさみ紅葉も知らぬ天の川何を橋にて逢ひ渡るらん

7左大臣殿8御方、

年ごとに逢ふと見ながら天の川幾世渡ると知る人のなき

9式部卿の御方、

手も10やま11に我が繰る絲を彦星の夜の衣に12なるやたなばた

左衛門の督の殿の御方、

明けぬとて待つ宵よりも七夕は歸る朝や佗しかるらん

校異 1 イはば。2 イの。3 イ達。4 国民。5 イ宮のアリ。6 国をアリ。7 国右。8 国のアリ。9 イ民。10 国守。11 国ず。12 国織。

1宰相殿の御方、

年ごとに我がよる絲のたちかへり千歳(とせ)の秋もくらんとぞ思ふ

中将殿の御方、

七夕のまれに逢ふ夜の東雲(しののめ)は見る人さへも惜しくもあるかな

いま宮、

たなばたの逢ふ夜と聞くを天の川浮かべる星の名にこそありけれ

あて宮、

七夕の逢ふ夜の露を秋ごとに我がかす2●機(は)の玉と見るかな

など、これかれ御琴遊ばしたどするを、宰相川(かは)3ほとりに眺(なが)め暮らして、あて宮にかく聞え給へり。

雨と降る涙はいつ4●と分(わ)かねども今日5●水●の●泡●と●おくり●暮●らすかな

三の宮、

七夕のつま待つ宵の露にだに濡れみてしがた戀はさむやと

行正(ゆきまさ)、

我こそは棚機(たなばた)づめに劣らねど逢ふ夜をいつと知らずもある哉(かな)

校異 1国藤アリ。2国糸(いと)。3国のアリ。4国も。5国の水泡(みなわ)となりくたす、因はみたわとなりくたす。

など聞え給へり。御返りなし。

「祓詞」此所は河原に御祓すましたり。あて宮琴の御琴、いま宮箏の御琴、御息所琵琶、大宮倭琴調べ給へり。東宮の御使ひに、物か1へけたり。此所2に人々、あて宮の御琴遊ばすと聞くとて、河の邊に居給へり。君達の御前に、浮れ女廿人ばかり、集ひ唱歌ひて、御衣賜はれり。

かくて歸り給ひぬ。

晦日ばかりになりぬ。東宮よりあて宮4御許にかく聞え給へり、

「初秋の色をこそ見め女郎花露のやどりと聞く5は苦し6き

聞く事の様々なることぞあひなけれ」と聞え給へり。あて宮、

秋の色も露をもい7さや女郎花木隠れにのみ置くとこそ見れ

例の宰相、

旅寢するよには涙もたかなたんつねに浮きたる心地のみする

あて宮、

たびごとに空に立ちぬる煙だれや雲ばかりにも浮かぶたろかな

8左大將殿より、

校異 1 イづ。2 国は。3 国のアリ。4 国のアリ。5 イが。6 国さ。7 国ま。8 国右。

わび人の淚を拾ふものならば袂や玉の箱1•にならまし

あて宮、

淚をも箱なる玉と見ましかばよそなる人2•を拾ひ添へまし

3中納言殿より、

沈みなん身をば思はず名取川ふみみてしがな淵4•を知るべく

あて宮、

瀧つせに浮かべる泡のいかでかは淵瀨に沈む身とは知るべき

兵部卿の宮より、

かくばかり憂きには戀の慰までつらきさま〲歎きますかな

三の皇子、中の御殿にて御琴遊ばし、物語りし給5•ひたに、御前なると6•ころ（〇所カ、燈籠カ）に夏蟲のよるを見給ひて、

「獨り寐る身も夏蟲7•の見ざりせばか8•つしも戀に燃9△らずぞあらまし

いとゞ10•み•な•こ•ひ•し•く。如何ならん」と聞え給へど、聞き入れ給はず。侍從の君、

校異 1 (イ)と。2 涙も。3 (国)平アリ。4 (イ)瀨。5 (国)ふ、(イ)ふ間。6 (イ)う。7 (イ)を。8 (イ)く。9 (イ)え。10 (イ)見まほしう、(国)身のわびしく。

人を思ふ我が身の玉はなからなん空しき殼は歎きしもせじ

いらへ給はず。兵衛佐行正、

蚊遣火の煙ぬ1空となるものを下草をしも結ばざらめや

御返しなし。

文化四年丁卯四月廿日校合畢

同十二年乙亥二月以本居氏之本校合畢與之

校異 1 川雲。

かくて右大將殿に饗饗し給1ふ。それ2は、例のごと3なむ左大將殿もおはしけ4り。さて後に、仲忠の侍從內裏より罷5出るまゝに、左大將殿の御門に來て6なかたくの殿の侍ひの別當藤原の貞親會ひたれば、「仲忠がさぶらふよし侍從の君に聞え給へ」と宣へば、入りて聞ゆれば、「なほ此方に」とて、7曹司に呼び入れ奉り給ひて、對面し給へり。仲忠、「一日淺ましく食べ醉ひて、對面8賜はりけるを、如何にな9がめたる樣10侍りけむ。その畏まりも聞えさせんとてなん參り來つる」源11の侍從、「甚だ12かし13か14し。一夜の無禮はあり15もやしけむ、更に覺え侍ら16むは、仲純が醉こそ進みて侍りけ17る」など宣ひて、美しく物語などし給ふ。仲純、「かく一人のみなむ侍る。時々は立ち寄らせ給へ。罷り通ふ所などもなければ、つれづれ18となん侍る」と宣へば、「などか19はさは20思する。仲忠こそ內裏21に參22るより外に罷る所なけれ23ば、君達のおはする所は牛の毛24むぞや」主の侍從、「仲純がまかる所25隣の角にだに26ぞあらぬや」など宣ふ。物語などいと細やかにして、なほ互に後見どもなど言ひかはして歸り給ひぬ。侍從の此所に時々か

校異 1 [不]ひけ。2 [不]ば。3 [不]にアリ。4 [因]る。5 [不]りアリ。6 [不]叩くに、か、[不]たゞにか、7 [不]御アリ。8 [不]し給ひ。9 [不]めけむ。10 [国]にアリ。11 [国]ナシ。12 [不]一字ナシ。13 [国]こ。14 [不]ら。15 [実]考異ナシ。16 [不]め。17 [不]め。18 [因]に。19 [不]ナシ。20 [国]おは。21 [国]ナシ。22 [国]り。23 [不]ナシ。24 [国]ナシ。25 [国]はアリ。26 [不]ナシ。

く物し給ひければ、大将聞き給ひて、「仲忠の侍従の時々います1なるか、若き男子どもつき／＼しくもてなしてあらせよや。琴をこそ教へざらめ、異事もかの侍従のする事はさ2あらぬをや。いさゝか猶物の音なども聞き習ひあ3られ4」など宣ふ。仲忠あて宮にいかで聞えつ5らむと思ふ心ありて、かく来歩6てになむありける。さて自から殿入になりて、御達などに物言ひかけなどする中に、孫王の君とてよき若人、あて宮の御方にさぶらふにつきて、この思7ひ草をほのめかし言へど、つれなくのみいらへ8つゝあるに、さてのみはえあるまじ9ければ、面白き10萩を折りて、葉に11かく書きつく、

秋萩の下葉に宿る白露も色には出づる物に12ありける

とて、孫王の君に、「これ折らば」とて、13手に14持て参りたれば、あて宮見給ふ。また春宮よりかく聞え給へり。

いつとても頼むものから秋風の吹く夕暮は云ふ方ぞなき

あて宮の御返15し、

吹くごとに草木うつろふ秋風につけて頼むと云ふぞ苦しき

兵部卿宮より

[校異]1[イ]ナシ。2[イ]な。3[イ]は。4[国]よアリ。5[国]か。6[イ]く。7[イ]ふ。8[イ]け。9[イ]げな。10[イ]花。11[国]巻異二字ナシ。12[イ]ざ、[異]ぞあ。13[イ]遣るに、[国]取らす。14[国]やがてアリ。15[イ]り。

たましひや草叢ごとに通ふらん野邊のまに〳〵鳴く蟲ぞする

御返し

「色かける野邊に通ふと聞くからに鳴くなる蟲の心をぞ知る

まして思ひなん遣らるゝ」と聞え給ふ。右大將殿、日頃惱み給ひけれ1ど、覺束なく2思されければ、「日頃淺ましく、3(かくと)だに聞えでやみぬべき心地し侍4るになんいと哀れなりける」とて、

「君がとふ言の葉見れ(〇なカ)5ば朝露の消ゆるなかにも魂や殘らん

とはせ給はましかば賴もしからまし」と聞え給へれど御返りなし。平中納言殿よりも、

わき出づる涙の川はたぎりつゝ戀ひ死ぬべくも6覺え7ゆるかな

源宰相、志賀に行ひしに詣で給へりけり。それより、面白き紅葉の露に濡れたるを折りて、かくなん。

我が戀は秋の山邊にみちぬらん袖より外に濡るゝ紅葉々

とあれど御返りなし。源侍從8(人間に參り給ひて、9かく)「淺ましき10御心とかつは思11へど、いとかくつらき君12にもあ13や14なし(〇此の詞因ニ歌トス」)」

校異 1 [活]ば。2 [因]考異思ほ。3 三字[活]ニヨリテ補フ。4 [活]りつアリ。5 [活]ど。6 [活]思ほ。7 [活]け、[因]考異ぬ。8 十字[国]ニヨリテ補フ。9 [因]二字ナシ。10 [国]ナシ。11 [国]ふ給へながらも、[活]へども。12 [活]ナシ。13 [活]い。14 [因]考異しな。

1など（2宣、3れど）、例の御いらへもし給はず、行正齋宮4へ5登り給ふ御6迎へに往きて、津の國の田蓑の島よりかく聞えたり。

津の國の田蓑の島は渡れども我がながめには濡れぬ日ぞなき

囊詞 7あて宮の御前に人いと多かり。此所彼處より取り8つゝ參らす。

かくのみこの九の君を萬の人聞え給ふとは知りながら、御消息聞え給ふ時、人々の御心少しゆくを、聞え給はぬ時は、熱き火の中に住まふ心地して聞え給へば、あるは御返り聞え給ふ折もあり、遂に聞え給は9ねば、聞えわづらひて止み給ひぬるもありなど、いと數知らずあるを、他所の人のさ10思さんをば如何11はせん、この源侍從の君さへかゝる心のつきたるを、年頃思ひ忍び思ひ返せど、え12敢へかねてなん、なほ13る14など思ひて、猶かく思ふ事なんあるとはかりだに、いかでこの君に知らせ奉らん、時々氣色ばめる事はあ15れど、知りて知らず顏なるにや16あらん17はと、つれなきをなど思ひわづらひて、この18左衞門督の君の住み給ふ六の君は、未だ若ければ19こそ君達の住み給ふやうにて、かたへゝ異にても住ませ奉り給はで、宮おとどの住み給ふ北の御殿に住ませ奉り給ひける、されば、中の御殿に書はおはしましつゝ、夜なん我が御方に

校異 1二字考異と。2五字底ニヨリテ補フ。3河ナシ。4柯のアリ。5底下。6底沒り。7河此所はアリ。8柯次ぎアリ。9河めは。10考異思ほ。11柯ナシ。12柯堪。13河や、柯ナシ。14柯と。15柯りと。16柯はアリ。17柯ナシ。18底右の大殿、考異右大臣殿。19柯異。

はおはしましける、碁打ち琴弾きなど此方にてし給ひつゝ遊び給1ふ事、御2腹よりもよき御仲なり。その君に、この仲純の侍従物語りなどし給ふついでに、「月頃聞えんと思ひ給ふる事のみ侍るかた」八の君3の、「何事ならむ。君達の4男子5が中に宣はぬ事のありけるこそはつらけれ」侍従の君、「聞えさせんにつけて、いとかたはらいたき心地して6こそみそこらね。されど思ふに、逆様の事を聞えたりとも、人に聞7かせ給はんやはと思8ひ給9ふれども、いとこそかたはなれ。月頃侘しく思ひ給ふる事のあるを、異人には夢10に聞ゆべき人もなし。心一つになん思ひ給ふる。思ひ給へ餘りて、如何はせん御方にこそ11は聞えめとてなん」八の君、「何事にかあらん。月頃になるまで宣はざりけること怪しけれ。何事を12思ほさん事はなほ宣へ」侍従、「13見聞きぬにて、わ14かたさは御曹司よかし」など言ひて、「いと怪しき心侍15りける身なれば、16世々の世の中に17涙らずやなりなましと思ひ給へながら、言はではただにとか言ふなれば。かく同じ心におはしますうちにも、いとよき御仲におはしますなれば、かくなんなど物させさせ給はんにも誰かは知らむ。この中の御殿の御方になん年頃思ひ給18ふる事侍るを、心にも、これは物に狂ひたるにやあらん、いと怪しき事なりと思ひ19隠して今までになり侍りぬるに、世の中に立ち舞ふべき心地もせず。御覧ずるに

校異 1国ひ、異。2国兄弟。3因ナシ。4因己ら。5国らアリ。6不こそえ聞えね、因えこそ聞えね、因考異こそえ侍らね。7不こえ。8不ふ。9不へ。10不ナシ。11因考異ナシ。12不おぼ。13不え。14不り。15因考異二字ナシ。16不二字ナシ。17不侍。18不へ。19国返。

は、例の仲純にて1い侍りや。かく侘しき心地して、死ぬべき心地し侍るを、何かはよからぬ事2も聞えじと思ひ給へる。たゞ大殿の思さん事のかぎりなく畏く、身のいたづらにならん事をば思されじと思う給ふるこそ3侍れ。聞えても、思ひ給へ返すにも、同じ4事いたづらになりぬべければ、聞えてもかひなか5 6べかめれども、かく7だにも聞えさせ8ては、身はいたづらになるとも、命だに暫し止まるやとてなむ、いみじく淺ましき心地しつゝなんとて、物に狂ひたる事を、思ひ給へ餘りて聞えさする。吾9る君10〳〵、なほかゝる氣色語らひ聞え給へ。おぼろげに思う給11はんには、かゝる事を聞えさせてむや」など、いと哀れに語らひ聞え給へは、八の君怪しき事とは思すものから、12いといみじげに宣へば、さすがにいとほしく思して、「げにさも思しぬべき事なれども、己が心ながら心に任せぬ事なれば、さはたわりなく思す事な13かるを、何か14はかゝる中に、何事も宣ひ語15らはむに、知る人あらむやは。今事のついであらば、かくなむと語らひ聞えん」侍從、「いと嬉しき事な16り。吾17兒君なんよき樣にを」と宣ふ。かくて中の大殿に渡り給ひて、例の御遊びし給ふ。和琴、箏の琴、琵琶など調べ合せて彈き給ふ。さて御物語りなどし給ふついでに、一夜、侍從の哀れなる物語りなし給ひしかな」と宣ふ。九の君何事も知り給はで、「あ18な淺ましの事

校異 1〔イ〕は。2〔イ〕ナシ。3〔イ〕二字ナシ。4〔内〕如。5〔玉〕るアリ。6〔イ〕るべけ。7〔内〕とアリ。8〔内〕で。9〔イ〕か。10〔内〕ナシ。11〔内〕へ。12〔内〕二字ナシ。13〔イ〕な、〔イ〕ナシ、〔国〕め。14〔内〕考異ナシ。15〔イ〕ら。16〔イ〕む。17〔玉〕か。18〔内〕はれ。

や。我にこそ聞かせ給はましか」八の君、「己(おの)れまさ1り聞えんに」など宣ひて、「まことは、君の御心つらき事なんとて宣ひしかば、何事ぞなど申しゝかば、2月頃聞ゆる事あるを、それさなおはせそと聞えよやと、似げなき事をし給へば、憎しとは思へど、いとほしく、身もいたづらになりぬべき事を宣ひしを、なほ聞え給ふ事あらば、心やりに、いさゝかばかりは答へ給へかし。疎(うと)き人にもこそなげの言(こと)の葉(は)は言ふなれ。かゝる御仲には、何事3も宣ふとも、誰かは知らむ。いとほしくも思ひ焦(い)られた4んめるを、人にさな思はれ給ひそ」九の君面(おもて)5は赤み6て、うちほゝ笑み給ひて、「宣ふ事もなきを、何事かは聞えん」八の君、「聲せめに答ふるものは山彦(やまびこ)のと宣へかし。まことに見苦しき事思ひ初(そ)めぬる君にこそあめれは、えあるまじ7し、わりなき事深く思8ひ入れて、9焦(い)られ歩(あり)き給へは、かくかたちも損(そこな)はれ、惚(ほ)れたるやうにて、いとほしくもあるやと思ふにも、怪しくなほ10き焦(こが)るゝも11みたてあるものを」など宣へば、九の君聞かぬやうにておはします。

かくて日頃經て、長月になりぬ。風涼しくなり、蟲の聲、御前の草木(くさき)12と整(とゝの)ひて、木(こ)の葉は色づき、草叢(くさむら)の花咲き、五葉(ごえふ)の松は長閑(のど)けき色を増し、色々の紅(もみ)13(葉(ぢ))薄き濃(こ)き村濃(むらご)にまじり、月面白き夕暮に、御前(おまへ)の池に月影うつり14て、萬(よろづ)面白き夕暮に、八君、いま宮、姫宮御簾(みす)卷き上げて、15出でおはしまして、例の御琴ど

校異 1 [国]に。 2 [関]日。 3 [仁]を。 4 [国]ナシ。 5 [国]ナシ、[関]さと。 6 [関]考異ナシ。 7 [仁]く。 8 [仁]は。 9 [仁]心アリ。 10 [仁]思ひ。 11 [仁]う。 12 [関]も、[関]考異ナシ。 13 一字[仁]ニヨリテ補フ。 14 [仁]ナン。 15 [仁]二字ナシ。

も彈き合せて遊び給ふを聞きて、男君たちえ籠りおはせで、1式部卿宮も右の大臣2(も)出でおはし3て、「今宵の御琴どもの音4どもに驚きにけり」とて、おはしまして、5式部卿の宮笙の御笛、右の大臣たゞの御笛、篳篥吹き合せ6て、聲々數多の物吹き合せて、いとになく遊ばせ給ふを聞かせ給ひて、何れの人か御心長閑にて籠りおはせん、夜一夜女君達いと清げにて、なほ7おはします端に出で居給へり。この8女御の御9子の三の宮世の中の賢き君にておはします、それなんこのあて10宮を思ひ聞え給へど、好き〴〵しくもやとて、色にも出て給はねど、なほ思しわたるに、この君達の並びおはする所におはして、曙に御簾を卷き上げて見給ふに、いと清げに11おはします中にも、この九の君はすぐれて見え給へば、三の宮は靜心なく覺え給ふ事かぎりなし。見給ひて、物も宣はでうち歎きて立ち給ひぬ。勾欄に押しかゝり12て詠めおはしまして、思す事更にも言はず、顏の上に居る心地して、いやます　ゝに思さるゝに、御前の一本菊いと高くいかめしく移ろひて、朝ぼらけにめでたくいかめしう見ゆるに、露に濡れたるを押し折りて、かく書きつけ給ふ、

「にほひます露し置かずば菊の花見る人深く物思はまし13や

あなわびし」と書きて、そこらの御中に、九の君に、「この花は14近まさりぬべく」とて奉15れ給ふ。九の

[校異] 1[国]民。2一字[イ]ニヨリテ補フ。3[イ]ましアリ。4[イ]二字ナシ。5[国]民。6[イ]ナシ。7[国]おばしまの。8[図]女。9[イ]腹。10[イ]君。11[図]考異ま。12[図]考異ナシ。13[イ]ナシ。14[図]散り。15[イ]り。

君、暗(くら)きほどなれば、書きつけ給へる事は見で、たゞかく書きつけ給ふ、

　露ならぬ人さへおきて菊の花うつろふ色をまづも見るかな

と聞え給ふ。八の君少しあ1てなるほどに、この君の書きつけ給へる事を見て、

　露かゝる籬(まがき)の菊を2皆人は物や思ふ（3本のまゝ）4（と誰か言ひ）らん

5宮子「あなわびし」など聞え給ふ。6 7君達(きんだち)も内裏(うち)に參り給8ふ、人々も9別れ給ふ。

「讃詞」10君達(きんだち)集まり11遊び給ふ。12宮子(みこ)菊を押し折りて13（おは14します）。此所15に御達(ごたち)四十人ばかり、君達16を皆17御前に物參18り、東(ひんがし)の御方より、君達退きおはしますなりとて御果物(くだもの)奉り給ふ。

かゝる程に、平中納言大將殿に參うで給ひて、侍(さぶらひ)におはす中將の君に對面(たいめん)し給へり。中納言、「久しくさぶらはぬ畏(かしこ)まり聞えんとてなむさぶらひつる」と宣へば、「御消息(せうそこ)聞えん」とて入りぬ。おとゞ19「平中納言參り給へり」と聞え給ふ。「彼方(あなた)にこれかれあなり。此方(こなた)にて對面(たいめん)せむ」とて、寢殿(しんでん)の簀子(すのこ)に御座(おまし)よそひて、對面(たいめ)して、20物語り聞え給ふ。中納言、「日頃久しく參り給はねば、覺束なき事多くなん」大將の主(ぬし)、

校異　1伝かく。2伝見る。3伝四字ナシ。4五字伝ニヨリテ補フ。5図二字ナシ。6図かくてアリ。7十七字図考異ナシ。8一字図ひ。9一字伝あか。10伝此所はアリ。11伝てアリ。12十二字伝ナシ。13五字伝ニヨリテ補フ。14図二字ナシ。15一字伝け。16伝ナシ。17二字伝の。18伝る。19図にアリ。20図御アリ。

「甚だ異し。例思ひ侍1り野病2の思ひてなん、日頃いと3ま書4(た)てまつ5りて參らず侍る」中納言、「一日、春宮6に花の宴聞召しゝにも參り給はぬ事をなん宣ふめりし」おと7こ、「誰々か參られたりし」「右の大臣、右大將、民部卿、御子達などなん。博士8ら召したりき。學士正光、式部の大輔忠實の朝臣、右中辨維9房の朝臣、10秀才進士などなん召したりし。11しひ12二つの物など設けられたりき」など申し給ふ。大將の主、「いと右職の者のかぎりなんなり13かし。さて14は歌は如何ありけん」いらへ、「15四韻の16歌なめりき。おに17たい(〇應對カ)たりき」と申し給ふ。「18その文ども19いと物不便なりき」と申し給ふ。「さてその日20不意に人に騷がれ奉りき」大將、「誰にかありけむ。正頼21が22主かや」と宣ふ。中納言、「何れも離れじかし」「23など24に如何なる事にかありけむ」中納言、「一日25 26ついでたとありしかば、『これかれかく參り給へるに、殿の參らせ給はぬがさうぐし27さ』28なんどこれかれ申し給ふついでに、正29時何心なく、『けに怪しく參り給はぬは、惱み給ふ事やあらむ』と申ししかば、上野の宮大きに驚き給ひて、『30か

校異 1国る。2伊を、因ナシ。3伊之文。4一字伊ニヨリテ補フ。5伊らで。6伊ナシ。7伊と。8伊ナシ。9伊雅。10伊秀、因秀。11国詩歌トス。12伊袋。13因考異二字ナシ。14伊ナシ、因御。15伊院。16伊方。17五字因考異たいせき。ないき。18伊み。19因こそ(〇因考異いと)興多かるべき。20伊にいて、因考異ゆくりたき。21三字国かゝりしに。22一字因族。23伊さ。24国は。25伊のアリ。26伊のアリ。27伊き。28伊となん。29国明。30因こ。

の正1時の朝臣2いなと申し給ふ事ぞ』と聲を放ちて宣ふ時に、右大將兵部卿の宮數多これかれ、いと怪しと驚き給ふ時に、春宮3もいと怪しと4思ほしたるに、この宮、『いと怠々しき事は啓し申さるべき。やむごとなき家の男が前にてだに、かく申し5は侍6る給7べば、まして他の所にて8は、如何に9呪詛悪念深く侍り給ぶら10む。かの11右大將12の朝臣13をあ14だにて呪詛した15いまつるなり。に下にその大將を呪詛し16よつし奉りても、中納言の上おほか17る。さても人18呪ふ人は三年に死ぬるなり。大將いさゝかの足手の恙もあらば、朝臣のすると思はん』19(とこ)いと切に20怨じ給へば、春宮もいと怪しと思して、『そもく\この大將には何の21兩かおはしますらん』。22『みこの朝臣には、頼明は23しきい24らをいとや25いんごとなく侍26り。かの27大將の九28へにあたる娘は、頼明が童べにてたん侍る』と申し給ふ。皆怪しがりて、春宮も『かの大將29九30へにあたる女は、31何處よりぞ32い』と33らび給へば、『この34わらの御35腹なり。いとかしこく名だたりて、吉36うし得ず侍りしを、さこそあれ、頼明構へてなん衒ひ取37 38持て侍る』と申し

校異1[玉]明。2[仮]のなど、[仮]考異はなど。3[イ]ナシ。4[イ]おぼ。5[イ]ナシ。6[玉]り。7[仮]考異ぶは。8[仮]考異ナシ。9[玉]もぞ。10[イ]はアリ。11[玉]左。12[イ]を。13[イ]の。14[イ]くまで、[仮]考異てにて。15[イ]て。16[イ]殺。17[仮]り。18[イ]のアリ。19一字[イ]ニヨリテ補フ。[玉]など。20[仮]怨。21[玉]よせ、[仮]一本靈。22[イ]又、こ、[仮]か。23[玉]仔細、[仮]事の、[仮]考異ナシ。24[玉]ナシ。[仮]寄せ、[イ]しを。25[玉]ナシ、[イ]は、[イ]や。26[玉]る。27[玉]朝臣。28[イ]つ。29[イ]のアリ。30[イ]つ。31[イ]幾つ、[イ]いかに、[玉]いづらより、[仮]考異いづこより、[仮]考異いづく。32[イ]は、[玉]ナシ。33[仮]問。34[イ]童、[玉]侍、[仮]玉。35[イ]持。36[イ]しう。37[玉]りアリ。38[仮]り。

給へば、春宮は如何なる事にかあらむとは思しながら、さなり1はてば、民部卿2右衛門督なども皆咎めつへきにこそあなれ、3まして上にも聞召し過ぐさじかし、なほいとをかし。など思して宣ふなり〈○誤アルベシ〉と申し給ふ。皆人怪しがり侍りき。民部卿などは4語り聞え給はぬか。すべて5上が一を取り申すなり。いと6をこなる事ども多く侍りき」と申し給へば、かの大殿、ありし事はかけ7ても宣はで、「いとをかしく怪しかりける事どもかな。この侍るもの8い、かの君ならぬ人に9、たゞ今は未だいと幼く侍れば、奉らんとも思う給へ10(ぬ)ものを、眞實にあるやうにも宣ひけるかな。怪しき事11申す」とて笑ひ給ふ。さて中納言能出給ひぬ。

[書詞]12大殿中納言に對面し給へ13り。侍にて中將の君對面し給へ14る。15(侍)所に15て17男18もいと多くさぶらふ。

かく19てあるほどに、源侍從の君、出で入り起き臥し歎20(き)給ふ。いと侘しく覺えければ、御前の花薄の中に、今本より生ひ出づるは、秋も穗に出でぬを引き拔きて、その葉に書く。

「思ふ事いかで知れとか花薄秋さへ穗にも出でで過ぐらん

[校異]1[イ]とては。2[国]左。3[イ]よし今、[国]まいて。4[イ]か。5[イ]たゞアリ。6[イ]二字ナシ。7[イ]つゝ。8[イ]は。9[国]もアリ。10一字[イ]ヌヨリテ補フ。11[イ]二字ナシ。12[国]此所はアリ。13[イ]る。14[国]り。15一字[国]ニヨリテ補フ。16[イ]ナシ。17[国]男。18[国]どアリ。19[イ]ナシ。20一字[イ]ニヨリテ補フ。

あな侘し。何時1かく。」など書きて見せ奉り給へば、九の君、

「諸共に2「おしつる薄のいかなれば穂3の出で4ぬものを思ふてふらん

かゝる中」とて尾花を添へて奉り給ふ。侍從、「さればこそ5い侘しけれ」と聞え給ふ。

[畫詞6(此所はな)か(　)中」の御殿。九の君おはします。御達いと多くさぶらふ。

かくて行正、津の7國8有馬の湯に行きて、面白き所々9 10歩きてをかしき所々見るにも、物思ひ11果てられ12つゝ、哀れと覺ゆる時に、13(童14 15京に上せて16大將殿に、)

しほたるゝ事こそまされ世中を思ひながすの濟17かはなくて

と書きて、宮18のあこ君に、「これ中の御殿19ふで20奉り給へ、あこ君や。いかで物の苦しさ知らせ奉らん」と書きて奉り給へり。宮21あこ君見給ひて、九の君に見せ奉り給ひて、走り書き給ふ樣などこともなし。宮23あこ君、「淺き心ざしもあるものを、なほいさゝか書きて給へ」と聞え給へば、「あなさがな。何でふかゝる文24か見せ給ふ。かゝる文見すれば、大殿聞さいな25んとて、な26取り27はれ給28ふぞ29よ」と宮

校異 1[イ]もアリ。2[イ]生ふ。3[版]に。4[版]て。5[イ]は、[イ]ナシ。6四字[版]ニヨリテ補フ。7[版]考異ナシ。8[版]のアリ。9九字[版]考異ナシ。10一字[イ]ナシ。11[イ]出で。12[玉]て。13十一字[イ]ニヨリテ補フ。14[国]をアリ。15[版]部。16[版]考異ナシ。17[イ]貝なくて、[国]も貝なく、は[版]かひなく。18[版]ナシ。19[イ]ま。20二字[版]に。21[イ]のアリ。22[イ]ふに。23[イ]のアリ。24[イ]ナシ。25[イ]む。26[イ]どか。27[イ]入。28[イ]ひそ。29[イ]ナシ。

1へおはすとて、聞え給はず2なり。さて行正3使ひに、宮4あこ君5に文書きて遣り給ふ。「この文は、宣ひつる人に見せ奉れど、御返りもなか6らんめれば、まろを如何に憎しと7思ほさん。物の苦しさ8は、君のおはせぬ頃なん思ひ知りぬ9るとて、上り給へ。

あひも見ぬ日のながらふる袖よりは人の涙の落ちぬべきかな

いと久しや。早や〳〵。」と書きて遣りつ。行正これを見て、袖をしぼるばかり泣き濡らして、急ぎ歸りぬ。いとゞし10き魂靜まる時なく思ひ歎く秋の夕暮11に、涼しく月面白きに、たゞ一人詠めおはするに、萬哀れに悲しく覺えて泣き居給へれば、白き御衣の袖に涙かゝりて、掻練なんど移り12て濡れたるを、取り放ちて、それに書きつけ給ふ。

「解きて遣る衣の袖の色を見よたゞの涙はかゝるものか13は

いと珍らかになん。さるは月頃14乾にけりや。」と書きて奉り給ふれば、九の君辛うじて哀れとや見給ひけん、15傍側に書きつけ給ふ。

「袖斷ちて見せぬかぎりはいかでかは涙のかゝる色も知るべき

16きり〴〵す物17うげたる御袖かな。」とて返し18給ふ。又平中納言殿19より御文には、

校異 1 [イ]ひ。2 [イ]なん、因ナシ。3 [イ]のアリ。4 [イ]のアリ。5 [イ]ナシ。6 [イ]ん、国二字ナシ。7 因考異おぼ。8 [イ]ナシ。9 [イ]疾く。10 国く。11 [イ]ナシ。12 [イ]ナシ。13 [イ]と。14 [イ]經。15 因考異片端。16 因返すぐ〳〵。17 国のアリ。18 [イ]奉りアリ。19 [イ]二字ナシ。

「秋の夜の寒きまに／＼きり／＼す露を恨みぬ曉ぞなき

知る人のなきなん侘しき。」とて奉り給へれど、御返りなし。かくてこの源宰相、この殿にのみおはすれば、人々、「この君は、あ1なやうありてやかく籠り居給2ひつらむ。大殿宮知り給3ひてや。九の君に馴れ馴れしき事あらむ」など、内の心を4知らで、この聞え給ふ人々疑ひ聞え給ふ。5左大將殿よりもさる氣色をなん聞え給ひける。「聞えさすれども、かひなくたん承はるやうもあるものを、此所にこそいとかしこく思しおとさるべけれ。

旅人も越えなれぬとか渡守おのが舟路の6近きまに／＼」

と聞え給へれども、御返りなし。兵部卿の宮よりも、「度々聞えさすれど、覺束なくのみあるを、自ら參りてや聞えさすべき。」とて、

住吉に見ゆるや何ぞ覺束なきつゝ答ふ7と人もあらなん

と聞え給へれば、九の君の御返り

年ふれば松は枯れつゝ住吉は忘れ草こそ生ふと云ふなれ

とのみ聞え8たて奉り給ふ。

かゝるほどに、仲忠の侍從は常にこの殿に來つゝ、ある時はこの御前にて琴彈き遊びなどし、琴をば更に彈

校異 1 [作]る。2 [作]へ、[或]ふ。3 [或]はで。4 [或]げアリ。5 [国]右。6 [国]遠。7 [作]る。8 [作]二字ナシ。

かで、異遊びをしつゝ、源侍従の君1を兄弟2と契りて語らふ。「などか參り給はざりつる。内裏にさぶらひたりつれど、君の見え給はざりつれば、さぶらふかひもなかりつれば、3ふか4くつるぞ」5と、源侍従、「參らんと思ひ給ひつれども、怪しく惱ましく侍6ればなむ」仲忠、「など7かくのみは。人思8ふとか」「仲純は、人數に9しは10りられば、さ思ふべき人もなし。君達はしも」「よき身だにもし11え思さんに、まして仲忠らは何處なりしを」など言ひて、「世の中に住みにくきものは、一人住みにまさるものなかりける。罷る所12し侍らねば、事13くてはたゞ此所にたむ。立ち14罷り苦しうし給ふ所は、いとつきなき心地し侍ればなむ」と言ふ。源侍従、「さるも、あなかま、御心に任せたむめるを。15御世の山を」仲忠、「あなたかしつけ。高だに16ぞなき」と言ふ。かくてたほこの君を、人知れずかぎりな17く思ふ。18夢の中には、宮も大臣も、いと恥かしく心にくき者に思したり。おぼろけの折に物の音出だきす。されど、たまさかに琴つか19まつり遊びなどす。九の君と聞け給20ど、仲忠には御眼語め給ふ。いかではつかにも見んと思へど、さるべき折もなし。馴れ／＼しき氣色もたくらも見えて、更に馴れず。さればいと心にくゝて、をかしき者にたん思しける。かゝるほどに、九月廿日ばかりの夜、風いと遙かに聞えて、時雨れなんとす。源侍従の君、夜一夜物語りなどし明して、曉に、仲忠、

校異 1 前と。2 前どち。3 前ま。4 前で。5 内や。6 前りつアリ。7 前かアリ。8 ひ給ふ。9 国ね。10 前べ。11 前か。12 前ぐ。13 前と。14 国まじり。15 前よ。16 前も。17 前う。18 前者。19 前うアリ。20 国げ。

色深なる木の葉1ゝまさて捨人の袖に時雨の降るが侘し2さ　いと人げなきものには思さずなんありける。
とうち誦ふ聲いとめでたし　九の君いとをかしと聞き給ふ。
出雨3　4右大將の曹司に一、源侍從物語りし給ふ。物など參れり。男どもいと多かり。
〔○以下終マデハ、菊の宴ノ卷ノ前半ノ文章ト酷似ス。同一文章ヨリ出亂セルモノト思シケレバ、彼是參照校合スベシ。〕

かくて春宮九月九日、詩作り5し給ひしに、人々たん6ど例の上達部數多參り給へり。左大將7は參り給はず。博士どもなど數多ありて、いとかしこく文作らせ給ふ。御遊びなどし給ふ。事靜まりて、これかれ御物語りのついでに、春宮「8今日此所に物し給ふ人々の中に、こともなき女誰持たる9らひたらん。」左の大殿「この中には怪しう侍らずや侍らん。正明の中納言子や持た10ひたらん。それも未だ小さくなん聞え侍る」源中納言、「右大將の朝臣こそ女子あまた持た11うびて侍るなれ。12これかれ僕13うでなん集びてさぶらふなる。え、さて今一人二人はことあたくてもみせらるなる。季明が身に14ても一人15侍るなり。」平中納言、「一人のみ16なはあらじ。又も聞くやうあり」兵部卿宮「さかなき物語かな」とてうち笑ひ17て、源宰相うち見合

校異 1〔底〕は。 2〔何〕さ。 3〔底〕此所はアリ。 4〔底〕左。 5〔何〕ナシ 6〔何〕ナシ。 7〔底〕のおとゞアリ。 8〔何〕二字ナシ。 9〔何〕ま。 10〔何〕うび。 11〔何〕まひ。 12〔底〕天下の人アリ。 13〔何〕に。 14〔底〕ナシ。 15〔底〕はアリ。 16〔底〕に。 17〔底〕給ひアリ。

せ給へば、いとかたはら痛しと思ひて、物も宣はず。東宮1の「この上野の宮2物咎めし給ひしこそ、こと3なく聞ゆるや。我4にを5ば懸想人の數にも入れざ6たるこそ辛けれ」右の大殿「7仰せ事8あらば、早うこそ率り給はめ。畏まり「こそ參らせ侍らめ」宮、「さしも向ひては言ひにくゝ思はえ9てこそ、東のついであらばと思ふを、ただ10 11見ものせずや」と宣ふを聞きて、源宰相、兵部卿12宮、平中納言など、いと侘しと思ふ事かぎりなし。「13宮召さば必らず參14りなんを、如何にせむ」と15思はす。心魂16まどひ騷ぎ17て何18物19しげ20をも覺え給はずなりぬ。

［畫詞］21東宮、左の大殿、平中納言、源宰相、宮司の上、殿上人、童など22多かり。

かゝるほどに、23右大將東宮に參り給へりければ、宮、「などか久しく參り給はざりつらん。神無月の更衣にも、いたは24らるゝ所ありとありしかば、いと25をかしがり申26しつるを」大將、「27あなかしこ。例思ひ侍る脚病、すべて踏み立て28で、更に罷り歩きといふものもし侍らで、辛29くいたはり止め侍りてなむかくだに參り侍30る」と、東宮、「いと不便なる事31。此所にかく32御うらめしく、聯句一句二句作らせし

［校異］1 囯ナシ。2 国の物。3 国をアリ。4 国ナシ。5 囯も、因考異ナシ。6 因考異ナシ。7 囯思す。8 国さぶらひな。9 因つゝ。10 国大將にはアリ。11 囯三字ナシ。12 国のアリ。13 国東アリ。14 国らせ給ひ。15 国思ほえず、囯覺えず。16 囯三字ナシ。17 囯ナシ。18 国のアリ。19 囯のけ、国のけしき。20 因さ。21 国此所はアリ。22 囯いとアリ。23 囯左。24 囯ナシ。25 国ほ。26 囯ナシ。27 囯一字ナシ。28 国離うて。29 囯きく。30 囯につアリ。31 国やァリ。32 国文人ら召して、天人々召して。

に、もの1し給はずたりにしかば、闇の夜のなにがしの心地たんせし」など宣ひて、その女とも見せ2奉り給ふ。大殿いとかしこう興じ給ふ。さて御物語りのついでに、「3月頃聞えむと思ふ事のあるを、しめやかなる折なくてえ物せぬかな」大将、「何事にかは侍らん。今日より前けき事4見侍らじを、承はりてしがな」東宮、「いさや、さよがに聞えにくければ」などて、「其所5く\に人々集へらるるなめり。己れを6ばその中に入れられぬ、つらしと聞えんとぞや」大将、「あなかしこ。さる仰せ事なき中に、しかさぶらふべきも7侍ら8ず。いと怪しき様9にのみ侍るめれ10ば、さ言ひてうち11は12きめてのみ侍らんやはとて、心にしたがひて、人々に隠り給ふ13となん侍りし」東宮、「さてなん残りあるやうに聞えしは、それをただに忘れ給14ふぞかし。人知れず聞え置きたる心地すれは、さりともとなむ思ふ」と宣へば、大将、「甚だ15たふとき仰せなり。いと小さくなん侍るめる。少し人となりばさぶら16せん」と申し給ふ。17宮、「いと嬉しき事なり。かの御方にも、常に聞えさせんと思ふを、騒がしなど物し給はむ、すずろなる事なれば、うちて思さむやなどとて18なん。時々は聞ゆれども、詩19聞き入れ給はぬやう20たまし」と聞え給へば、大将いといたく畏まりて、「さらば仰せにしたが21はむ」とて罷出給ひぬ。

校異 1 イ宣こ。2 国二字ナシ。3 因年。4 国又、安考異之、因考異ナシ。5 イナシ。6 国ナシ。7 イのアリ。8 国はと思う給へたから。9 国の者。10 国ば、かしこまりて侍るを。11 不い、宛す。12 国ナシ。13 国こアリ。14 国ひそ。15 因かしこ。16 不はアリ。17 国春アリ。18 不二字ナシ。19 国宮アリ。20 不にアリ。21 国ひ侍ら。

【帝の】1春宮、2右大將の大殿御物語りし給ふ。

かゝるほどに、この3九の君をなほかくも思し定めず、如何にせましと思しわづらふほどに、東宮から頻に宣ふこと度々になりぬれば、大將のおとゞ、宮に聞え給ふ、「までこれを如何にせましと思ふに、東宮なお殘りあるをだに忘るなと宣ふを、如何にせまし4」宮、「何5かは奉らせんと思ふを、人々の仕うまつり給ふ宮なれば、如何にせまし。6げにかくよき程なりとていますめるを」「此所に7それをなん思ふ。兵部卿8宮右大將などは、たゞ人にても、事もなき人にこそあめれ」「それ9いと切に宣ふなれど、なほこの九10をば、少し心ことに思へども、内裏には仁壽11殿さぶらひ給ふ。いかゞは又12はと、東宮には13なかなかはと思ふを、いと時なる人々多くさぶらふなれば、物し14給へれど、如何は、御口づから宣15ひつらむをば、院16げに否び聞え17給けん」大殿、「18あり。何かは、かやうの宮仕へは、19よしつかりぬれども、人の宿世にこそあらめ。數多の中に、一人こそは21天子の親ともなるめれ。あまた22かで宣ふを、たゞ今の23太子にこそはおはすめれ。衣は忍ぶればいと不便なり。思ほす事もこそあれ。此所にも思ほし給へたらむ」宮、「何かは、宿世は知らねども、さるまじ24かなせんにも、怪しうは人におとらじ」など宣ふ。

【校異】1〔玉〕此所はアリ。2〔代〕左。3〔玉〕ありて宮。4〔玉〕やアリ。5〔代〕にアリ。6〔玉〕日。7〔代〕をアリ。8〔玉〕のアリ。9〔代〕をアリ、〔玉〕をもアリ、〔周〕將其はアリ。10〔代〕の君アリ。11〔玉〕殿。12〔玉〕ナシ。13〔代〕か。14〔代〕け。15〔玉〕へ。16〔玉〕く。17〔玉〕奉ら。18〔代〕二字ナシ、〔玉〕さたり。19〔代〕下。20〔代〕らアリ。21〔玉〕帝。22〔代〕た。23〔玉〕帝。24〔代〕ら。

〔畫詞〕此所1に、大殿2の宮3の御物語り。中の御殿に君達おはします。御菓物など參る。

かくて内裏より女御退出給はむとし4てあれば、御迎へに奉り給ふ。御車御前などいと多5くかり。暁に罷出6賜はりて、うち休み給7ふ、かゝ〔〇斯かカ〕れば未だ對面し給けず。8宮内裏の渡り給ふべ9きか10なりとて、御寳11ども引き縣けなどし12ておはし給ふ。宮「おはしまして13と〔〇疾うカ〕物し給へ。そなたにはえ14參らぬや」と宣ふ。さて内の君に、兵衛の君15の宮して、「此方16なむ侍る。參らん」と聞え給へれば、御息所、「亂り心地のいと惱まし17くて侍れば、うち休みてなん、18今たゞ今其方に參りて」と聞え給ひて、すなはち渡り給へり。宮、「其方にこそ參り19さぶらはんと思20ひ給へつれ21ど。いと久し22く、長居し給23ひつる度にこそありつれ。覺束なき事がちになむ」御息所、「いとま24た聞ゆれども、をさ〳〵許し給はずなどあれば、えぞ退出ぬる。この25度は辛26くして」など聞え給ふ。宮、「惱ましげに27と聞くは例の事か」御息所「しかも28ぞ、見苦しき事」宮、「なにかは。久しかり29つかし。何時より。」30「この31二月ばかり32なん、例33に似ず惱ましく侍れば、それにかこちてなん、今暫し一度にまかでよと仰せ宣へれ34どに

校異 1[イ]は。2[玉]ナシ。3[イ]し、[玉]ナシ。4[イ]ナシ。5[イ]ナシ。6[国]着き給ひ、[天]給ひ。7[イ]へ。8[国]彼處に、[天]落葉宮内裏へ。9[イ]ナシ。10[国]約。11[国]二字ナシ。12[国]四字ナシ。13[イ]ナシ。14[イ]えアリ。15[イ]二字ナシ。16[イ]にアリ。17[国]う。18[イ]ナン。19[イ]來。20[国]う。21[天]ナシ、[国]など。22[国]う。23[イ]へ。24[イ]ナシ。25[天]度。26[国]うじ。27[天]ナシ。28[イ]そが。29[イ]ナシ。30[国]御息所アリ。31[国]七。32[国]二字ナシ。33[国]ナシ。34[イ]ナシ。

るかぎりは参り給はん。たゞ今は宮のみこそは1時異におはしませ、それを2放ちては、怪しうはなかるべし」3「あぢきなし。数多あれど、大殿などこそ4は、少しやむごとなくては物し給へ」5「さ6れど一日もいかで7人参らせんとなむ宣ふなりし。かく8思すにこそありけれ、我9もともに若き人のなき事、いかでよき人もがなと宣ひし10はこ早う参らせ給へ。人は数多あれど、かゝるまじらひは味気なきものなり。たゞ今は内裏にも11如何多12しさぶらひ給ふ。13されど参う上り給14はゞ一人二人こそあれ15。なほ16こそ物せらるめ17れ。それにはな思し18障り19てそ」など宣ふ20に、21宮はこの宮の御おと22そと23な24り25。宮、「いさや。らうたしと思ふものを、若し如何ならん26もと思ふぞ恐ろしきや。御許にもあえものには怪しうはあらじかし」27女御「あたゆゝしや」など笑ひ給ふ。宮、東の御殿に渡り給ふとて、「此方に、人々いざとく28かへ」と宣ひ置きて渡り給ひぬ。

[書詞]29(こ30れは)君達物聞し召す。宮東のおとゞ31渡り給ふ。御達いと多かり。髫髪四人御几帳さしたり。方々より皆物参りたり。

校異 1[玉]よき程。2[イ]ばアリ。3[玉]宮アリ。4[国]三字ナシ。5[玉]御息所アリ。6[玉]りや。7[玉]大殿も。8[国]はアリ。9[イ]がもと。10[玉]かばこ。11[玉]いと。12[イ]く。13[国]ナシ。14[玉]はんは、[図]ふは。15[玉]どアリ。16[玉]〳〵にアリ。17[国]り、18[玉]憚り給ひ。19[イ]ナシ。20[玉]ナシ。21[国]東アリ。22[イ]う。23[玉]におはし給へばアリ。24[イ]る。25[国]けりアリ。26[図]ナシ。27[国]御息所。28[イ]さぶら。29三字[国]ニヨリテ補フ。30[図]こ。31[イ]にアリ。

かくて1十一月になりて、御神樂し給ふべき設けし給ふ。大殿2右大辨の君3、「此度の神樂は極月4(す)べき度なるを、少しよろしくせんとなむ思ふ」辨の君「かゝる事は、始むる時はいとかめしくはせで、後5まさるなどなん申す事侍る」。大殿、「なほこれら上達部6いかにしあひて見給ふに、いよ物は7とかくて物しからむ。8笏ども醜よろしからんなど擇びて物せられよ」と宣ふ。辨の君、9政所につきて、家司どもにこの事仰せ給ふ。「御神樂十三日10せらるべき事仰せらるゝを、人々の見る所もあるを、同じくは少しよろしくせんとなむ仰せらるゝ事あめる。左近の頭の少將、またこの少將滋野の眞正、政所の別當11定め申す。たゞ12く今内裏の13御14神樂の召人は、15左近の尉松方、16左兵衛尉時蔭、右近の尉平の維則、左衛門尉紫原の師直、平の維輔、宮内の少輔源の直松、17右衛門の輔藤原滋正、内藏の允平の忠遠、18舍人行忠、通忠、雅樂の允楠武、村19金、20小松俊康、21近保22近、大和の介直明、信濃の介兼幹など、すべて三十人の者どもこそは、たゞ今の道々の物には侍る23たれ、これらは内裏の召ならでは、たは易く罷り歩かず。さりとも、殿の召にけ參りなむ。それに24皆廻文を作りて遣はさん」25さて、良則この御神樂の事、才ども26饗の事、又祿ども、27物のふし、28舍人29も、この祿賜ふべき布の事など定め給ふ。「布は、甲斐武藏よ

校異 1[国]七字ナシ。2[国]左。3[国]に聞え給ふアリ。4一字[イ]ニヨリテ補フ。5[国]にアリ。6[イ]にし、[イ]いとみ。7[イ]か。8[イ]才。9[因]政。10[イ]にアリ。11[因]にアリ。12[イ]ぞ。13四字[国]ナシ。14二字[イ]藏。15[国]右。16[国]右。17[イ]玄蕃。18[イ]内アリ。19[国]君。20[国]右馬の允河俊。21[イ]ナシ。22[因]ナシ。23[イ]二字ナシ。24[イ]はアリ。25[国]と。26[イ]のあり。27[イ]武士、「[国]武士ら。28[国]とれ。29[イ]にアリ、[因]どアリ。

絹召しに遣はす。白絹二十四奉れり。召人1廿人か、細長一襲、袴一2具づつなむ設けられける。一言司3辨の君4御達、物裁5つ6(こ)め(〇染)物せらるゝ。おと7ゞ宮おはします。伊勢より絹持て參れ8る9。政所に柴焼などさす。山より榊持て參れり。10御神樂の日騷がしかるべしとて、十一日よき日なれば、御11か12つら參13りとて政所のゝしる。

御神樂の日になりて、多くの幄ども打ちて、寢殿の御前になく設け14たり。日暮れて、おども數を盡くして參り、御神子15 16人さぶらふ。大殿宮河原へ出で給ふ。御供におと17ゞ君達、四位五位六位合せて八十人ばかり仕うまつる。黃金造りの御車二、人賜の御車18いつ具し19く出で給ふ。御車皆寄せ騷ぐ、河原よ20ゝり暗く踊り給ふ。御神21二四人下りたり。池山もいと面白22く、上達部親王達、右の大臣、23左大將、24式部卿、左衞門督、平中納言、源宰相、親王達は例の上達部ども、中務の親王など多くおはしまさず。例の仲頼、行正、仲忠、例よりもいとめでたく26すづきて、心遣ひして出で來た27り。28かくて皆樂始まりぬ。言詞29四五人女君達、女宮よりはじめ奉りて、方々の君達五人集ひおはします。方々の30御子達八十

校異　1国卅。2国くだり。3国此所はアリ。4国のアリ。5イたち。6一字イニヨヤテ補フ。7イこゝ。8国あり。9イにアリ。10イナシ。11三字イから、イくう、国くら、国考異かつ。12一字イく。13国る。14国られアリ。15国四アリ、国考異ニアリ。16イ部、国ナシ。17イこ。18イ五つ。19イて。20イナシ。21イ子。22イし。23国右。24国民。25国の親王アリ。26国装束イ、装束。27国れアリ。28国御神子下りて舞ひゝる。召人ら物の音出だし、神遊び仕うまつる。29国此所は。30国御。

人はかり1童女廿人ばかり、下仕へ廿はかり、南の庭に客人御達、簀子にな2り（へ）仲頼、行正、仲忠、殿の侍従達さながら、此所3に火焼きをり。笙の幄机などして、4物のふしども、あなたの事言ふ。

5召人、6廿人ながら7歌ったふ。

榊葉の香をか8うばしみ求め来れば八十氏人ぞまとゐせりけ9る

優婆塞が行ふ山の椎が本あなた10うば／＼し床にしあらねば

さひらでを手に取り持ちて11さよ深く我が折りて来る榊葉の枝

山深く我が折りて来る榊葉は神の御前に枯れ12なで13くたん

かよ賞ごほどに、兵部卿の14宮あこ宮して、宮に御宿直間奉れ給ふれは、典の皇子に御上へて封し給へり。兵部卿の親王15、「月頃、時々16式部卿の宮の何方に参れど、17折なくて18で、御消息も聞えさせねを、今宵松方、諸陵が騒19い、必ず聞し召すらんを、此所にも近くさぶらふを、かゝるついでにたてなんに宮、「此所に20そ、おはします時もあり」と承はれど、心あわたゞし21くなむ出でて、え聞えさ月頃にもなりに行22る。如何にぞ。嵯峨の院へは参り給ふや。23悩み給ふと承はりしを、如何におはしま

校異 1国童。2イか。3国は。4イ武士、国武士ら。5国かくてアリ。6国廿、7国神アリ。8国くけ。9イり。10イそ。11国山。12イせ。13イら。14国親王。15イのアリ。16国民。17イ面。18イナシ、イよ、国え。19イは。20イナシ。21国う。22イり。23イ上。

すらむ。えこそ參られ。そこはか1なくあわたゞし2 3心にて、萬の事忘られぬれば」など聞え給へば、親王、「一日も參りたりき。思なる御事にもあらざりけれ。例の御熱のおこり給へるなり4けり」と聞え給ふに、(さて御上どもをたお宣はせし。) 東宮にも大將殿にも久しく對面せぬ事。かの御子達若き人たちも見てしらかたはす5 6 7行く先短くなりたるをなど8なむ、いと心すごげに宣ふめり9し」宮、「いと見にくき人どもなれば、御覽ぜんかしと御心おとりやせんと恥かしくてたゞ今さりと10ん率て參らせ。御子達は常に參らんと聞え給ふあり」など聞え給ふ。親王、「人々、宮の御達の賀し給ひしに參りて侍りしかば、御物語りのついでに、11こゝにある人どもの事12宣13ひ14て、『如何にぞや。殿には參るや。怪しく大將に申す事のあるを、よく聞き忍び給ふかな。その由は、御方に15は聞えさせ給ひてむや』と宣はせしかば、『何かはこ承はりこ』など聞16えさせしを、『よし、事のよしは委しくはあらで、たゞ彼處に聞ゆる事17あるを、さは知り給へりや。御心留め給へ』となんありしこ聞えさせずもありけるを、たゞ18する事ならん」と聞え給へば、宮知らず顏に、「知らず。何事にかあらん。承はりけん人19は、忘れやしにけん」と聞え給へば、「言はで20思すにやあらむ。御心にこそは定め給はめ」など21聞え給22ふついでにや、思ふ事をほのめかし聞えましと思ほしけれ

校異 1 [国]とアリ。2 [イ]きアリ。3 [国]く、4 [国]二字ナシ。5 [イ]必ず、[イ]かた。6 [天]御世もアリ、[写]考異我がアリ。7 はず以下十二字[国]ナシ。8 二字[国]ナシ。9 [イ]ナシ。10 [イ]も。11 [イ]三字ナシ。12 [イ]などアリ。13 [国]ひ。14 [天]考異出でアリ。15 [国]ナシ。16 [イ]こえ。17 [国]のアリ。18 [イ]に。19 [国]の。20 [国]思ほ。21 [国]思ひ。22 [国]へど、え忍び給はで。

ど、あるまじき事を1と思し返し2て、「さるは、聞えさせんと思3ひつる事ありつれど、4ただ今忘れぬ。よし、残更にを」と聞え給ひて立ち給ひぬ。かくて夜更けもて行くままに、謡うたふ物の音聲どもいと聞かに出で来て、高く面白き事かぎりなし。かかるほどに、侍従仲忠いとになう装ひ束きて、夜うち更けて出で来た6り。主の大殿、「侍此所に」とて、御前に呼び据ゑて、「今宵7かの御徳の嬉しさは、主のおはしたるなり。かの琴手物は、今宵の神楽8にもあるを、今一度かの物の聲聞かせ給へらば、ただ今も奉りてんかし」9欺き給ひて、御琴取り出で、切に弾かせ給へ10ども、更に手も触れず。内に見給ふ君達なども、多くの人の中に、心にくく11深き際12たりと見給ふ。か13うて見く14その15（ま）（○共詞）16など聞い果てて、才ども17に、心々に細長一襲、袴一18づつか19け、20 21物22ふし23こ24ともに25皆物かづけたとして、ただの遊びの人々いとになう遊ぶ。仲忠笙の笛、行正26ただの笛、仲頼篳篥、主の大殿和琴、右大将琵琶、兵部卿の親王箏の琴、同じ声に調べて、いとになう遊び給ふ。かくて皆27才名告りなどす。主の大殿、「仲頼の朝臣何の才か侍る」「山伏の才なん侍る」「いで仕うまつれ」「28 29今の30らきこのかや」「31又行正の朝臣何の

校異 1〔国〕ナシ。2〔国〕給ひつゝ。3〔イ〕へ。4〔国〕八字ナシ。5〔国〕束。6〔国〕れアリ。7〔国〕かみ。8〔国〕よし。9〔国〕などアリ。10〔国〕と宣へアリ。11〔イ〕二字ナシ。12〔イ〕あ。13〔国〕く。14一字〔イ〕そ。15一字〔イ〕ニヨリテ補フ。16五字〔国〕御神子。17〔国〕の人。18〔国〕くだりアリ。19〔イ〕づアリ。20〔国〕上達部親王達は、供人まで物かづきアリ。21〔国〕武士。22〔国〕のアリ。23〔国〕二字ナシ。24〔イ〕ナシ。25〔国〕禄賜はり。26〔イ〕横。27〔国〕才。28〔国〕あなアリ。29〔考異〕き。30〔国〕く。31〔考異〕み。

1才か侍る」「筆結の2才なん侍る」「いで仕3まつれ」「わたりがた4く書き5ものは、6たゞ7毛結ふ事なり8」「仲忠の朝臣何の9才か10」「和歌の11才なん侍る。12ひとりあらずのみや」「仲純何の13才か侍る」「渡守の14才なん侍る。15あな風早や16」とて、17かづきわたり皆入り18ぬ。

蔵人19殿に君達おはしまして、物見給ふ。親王達上達部、御酒いみじう20進みて、人々いと多かり。21才の22男23、君達御衣脱ぎて皆々かづけ給ふ。24才の人々25に皆26 27脱ぎてかづく遊28び女ども廿人ばかり、いとになくさ29ら30ず（〇装束）きて琴弾き遊ぶ。

かくて皆事果てて、召人どもまかで、上達部まかで給ひて、藤侍従殿の侍従の君31御曹司に籠り臥し給ひて、「御前にて、兵部卿の親王の強ひ給へるに、更にすべて物も覚えず、食べ酔ひにけりや」など言ひて、仲忠「いと物覚えずなりにけり、聞えん事咎め給ふな」源侍従、「今宵の事誰もえ咎め給はじ。神も咎め給はずや、酔の言をば」など言へば、仲忠、「この暁に、内に琴遊ばしつるは、誰と聞ゆるぞ。仲忠32こそたゞ今死ぬべけれ。などか命短くば。」33「琴弾きつるは、仲純か妹の九にあたり給ふなり」仲忠、「いと有難

校異 1[国]才。2[国]才。3[イ]うアリ。4[国]き讃、[安]二字ナシ。5[安]考異かたきアリ。6[国]ナシ。7[国]冬毛。8[国]やアリ。9[国]才。10[国]侍るアリ。11[国]才。12[国]「いでつかまつれ」アリ。13[国]才。14[国]才。15[国]二字ナシ。16[国]の夜やアリ。17[国]つい立ちてアリ。18[国]給ひアリ。19[国]此所はアリ。20[国]す。21[国]才。22[国]男子。23[イ]にアリ。24[国]才。25一字[国]ナシ。26[イ]衣アリ。27二字[国]ぬかづき。28十二字[イ]ナシ。29[イ]ら。30[国]ざ。31[国]のアリ。32[国]四字ナシ。33[国]源侍従アリ。

き御琴の聲をもほのかに承はりぬるかな。あな侘し。如何樣にせん」など言ふ。1侍從、「いでや、君の耳とゞめ給2ふばかりはえしもやは」など言ふ。「仲忠が勞（〇仲忠「辛う」ニモアルベシ）なんたゞへ3一二の彈き給ふと思ひさぶらひつる。されど、4いと哀れに今めける御琴ありけるもの5を」など言ひて、思ふ事6いとかぎりなくなりぬ。

書詞7中の御殿8に、君達、東の御殿の君、9御達、侍從の曹司に10侍從物語す。

かくてこの君達の母宮は、年頃はたゞ后の御賀つかう11まつらんと思して、かねてより御設けせさせ給ふ。御屛風の事などし給ひて、12御年の足り給ふ13に、明けん年六十になり給ふ年な14るや、仕うまつらんと思す。15「兵部卿の宮に對面して、嵯峨の院へや參り給ふ」と聞えしかば、常に參る。怪しく、己が參らぬ事。世の中の常ならぬうちに16て、行く先も少なくなりぬる心地するに、若き人々17にも見まほしき事など言ふなるを、げにいと澄ましう參られば、さも思すらん。いかでこの己が思ふ事して、この子どもを率て參らんに」大殿「何かは。事どもは皆具したためるを、來年こそはつかう18まつり給ふべき年なれば、御子日かてら19も參り給20ふかし」宮、「いとよき事なり。事どもは皆具したた21んめるを、たゞかづけ物。22はゝふかくども

校異 1国源アリ。2イひし。3イ一こ、頭考異二字ナシ。4イ二字ナシ。5国かな。6国二字ナシ。7国此所けアリ。8国ナシ。9国親王達おはす。10国藤アリ。11イうアリ。12国御調度ども清らをつくし給ふアリ。13国は。14国れば。15国なりけり。宮。「一日アリ。16イかく、頭考異ナシ。17国を、頭ナシ。18イうアリ。19イナシ、頭考異にも。20イへ。21国ナシ。22イ法服。

の事なん未だしき」1「かづけ物2は何3かは俄にもせられなん。先づ御としみの事をせさせ給ひて、その法服などの事4は夏秋がたもし給へ」宮、「さらば何かは、御前の折敷の事、さては舞の装束など調へさせ給へ」大殿、「御前の事は大い殿にこそ5は聞えつけたれ。又舞の6童べの事は民部卿に7申しつけたる、自から事始むと見給はゞ、急ぎ給8ひてん。正頼が侍るかひなく、いかでと思さるゝ事のいと怪しき。かれてより一つの事も紛9くずして、たゞ年のか10つらばさぶらはせ奉らむとこそ思ひしか。己がいそぎをのみ夜とともにせさせ奉りて、この事の心もとなき事」などいとよく畏まり申し給11ふ。宮、「12(な)にか、只せぬ事13も多くもなしや。いかゞ、多くいそぎをのみせらるれば、のどけき事はと思ふ14ぞかし」など聞え給ふ。かくて大殿、15例の左大将の君御16子の君達17おはします。「此所にこの早うよりと18申す事の、このものし給ふ19人の、年頃歎き申し給ふ事を、正頼20世と21もに怪しからぬ事などし給へるうちに、又22又23物せで、今に不用たる事24見えた25くて、来年足り給ふ年なるを、若菜26くど27こう（〇調）じて、御子日に参らせむと物せらるゝを、その事も如何ものすべき。又舞の童べの事如何に定められ28にけんや」正頼か

校異 1 宮おとゞアリ。2 [イ]かアリ。3 [イ]二字ナシ。4 [玉]を。5 [イ]ナシ。6 [国]わらべ。7 [玉]聞えつけたり。8 [玉]ひけん、[国]者はたゝ。9 [イ]か。10 [イ]へ。11 [国]へば。12 一本[イ]ニヨリテ補フ。13 [玉]どアリ。14 [国]諸異ナシ。15 [国]二字ナシ。16 [玉]婿。17 [国]など召し給ひ。18 [国]りアリ。19 [玉]宮。20 [イ]子ど。21 [イ]とアリ。22 [国]まだ、[イ]ナシ。23 [国]ナシ。24 [イ]多く。25 [イ]し、[イ]ら、[国]どし。26 [イ]た、[イ]こ。27 [イ]て。28 [国]ナシ。

数1かにも侍らぬ身にて、かゝる御中らひにまじり侍る罪代には、かくばかりの事を思はせ奉らぬをだに2と3こそ思4ひ給ふる。いとほしくなん」と宣ふ。民部卿、「げにしか思さるべき事なり。舞の童の事は、さだま5(さ)(〇)實政カしが承はりにし事なれば、つか6まつ7りぬべきに、8持て侍るもの十四人ばかりは、様々9したがひつゝか10まつらせよと、皆仰11(せ)侍りぬ。今12は六七人は、殿の君達二所はおはしましなん。13さわ14さか15 16童、大臣殿の小君、また蝉の君など、この17御中より舞ひ給ひなん。18異事どもも、あ19べからん事は仕うまつらむかし」など申し給ふ。大殿、「皆人々に事一つづゝ20るをなむ聞えたる。御方には、この舞の童べとゝの21(へ)(へ)給へ22は、この宮あこまろに舞習はすべき事などをせさせ給へ」民部卿の、「宮あこ君はら23んけん(〇)(落蹲)を舞ひ給はむなんよかなめる。今舞の師召して24仰せ宣はん」と聞え給ふ。右の大殿には息牧め(〇)(又ハ威儀納カ)の御裝物の事選ませ給ふ。左衛門の25督の君には、細箱どもなどの事一つづつ聞えつけ給へり。

蔵詞26かくて一宮には、御衣ども、かづけ物裁ち縫はせ給27ふ、いと畏く28はいそぎ給ふ。君達の御衣ども、人々の裝束どもなど、中の御殿、東の御殿に29て物語り給ふ。御達いと多く居て縫30ふ。求物

校異 1[イ]ナシ。2[イ]ナシ。3[国]ぞ。4[玉]う。5一字[イ]ニヨリテ補フ。6[イ]うアリ。7[イ]る。8[イ]ナシ。9[イ]にアリ。10[イ]うアリ。11一字[イ]ニヨリテ補フ。12[イ]ナシ。13四字[玉]實正。14一字[イ]たこ。15[イ]がアリ、[イ]たアリ。16[玉]兄弟。17[玉]ナシ。18[イ]ナシ。19[イ]ンアリ。20[イ]つ。21一字[イ]ニヨリテ補フ。22[イ]ナシ。23[イ]くそ。24[玉]侍は。25[玉]督。26[玉]こゝは宮の御殿。27[国]ひ。28[国]ナシ。29[国]ても、[国]も。30[国]諸與ひ。

の東大寺、やむごとなきかぎり、さうらふ1三とも送る。（〇以上誤脱アルベシ）

かくて、陸奥守種實がもとより錢万2ま（〇足）奉れり。米は西の御藏に三百石積まれたり。下して使はる。錢は四つを、三には米とも、一には錢など積まれたり。（〇藏詞ノ中「此所は右の大臣の御方」ヨリ以下ノ所マデ国ニハ次ノ如クアリ。右の大臣の御方にて、但三調ずると定め給ふ日、錦の鍛冶召して、御杯ども香盒ともの事仰せ給ふ。折敷どもの事など。此所は右の大臣の御方。御折敷の事定め給ふ。銀の折敷二十、御杯香盒など若干、中の宮に揃ゑ並みたり。これにてより設けられたるものなれば、いといかめしく清らなり。右の大臣の殿人多くさぶらふ。かくて、陸奥守種實がもとより錢万足奉れり。米は西の御藏に三百石積まれたり。おろして使はる。倉は四つを、三には米ども一には錢多く積まれたり。かかる程に月たちて十二月の中の十日ばかりに年の果ての御読経し給ふ。3精進な4んど5、方6（に）7なし8（し）つらひ給ふ。中の殿戦9 10東の方を11なん御堂にしたりける。僧綱の方は精進しつらひ給ふ。さ12らぬは、侍ひ男13かもつか14まつる者の中に、便ある所をなん15らは16ら（〇僧坊）に17しける。18十二日より御読経始む。

校異 1イみ。2国そ。3国精。4国ナシ。5内もアリ。6一字イニヨリテ補フ。7イ皆々。8一字国ニヨリテ補ノ。9国のアリ。10国東。11イ一字ナシ。12イあアリ。13イど。14イうアリ。15イう。16イらの。17イはアリ。18国二アリ。

もいと多く、おはします。さぶらひ人いと多かり。御佛名果てて晦日になりぬれば、正月の御裝束いそぎ給ふ。

かゝる程に、1この九の君2聞え給ふ人々は、あぢきなく、年のかへ3りをも苦しと思ひ、い4とならむ御心のつきまさ5る、思さる6(る)事、誰も誰もおとらず。霜のいと白き朝に、7平殿より、「思う給へ8懲りぬべき御氣色は、いとよく見給へ知りながらなん。

ひとりのみ夜な〳〵霜の寒きにはしの9びの草10も生ひずやあ11るらん

かく聞えさするこそいとお12ぼろげなけれ。13う度14覺束なく。」と聞え給へど御返りなし。源宰相殿より、

「朝な〳〵袖の氷の解けぬかな夜な〳〵結ぶ人はなけれど

いとこそ怪しけれ。」と聞え給へれ15ば、御返りなし。かくて晦日に、國々より節料いと多く參りたり。

[畫詞] これは、中の御殿に君達おはしまして、雪の梅の木に降りかゝりたるを御覽にて居給へり。御達いと多くさぶらふ。此所は政所。料理り、御魂のいそぎす。松木、炭、餅などあり。宮16つ17はたち

〔一朔日〕のいそぎし給ふ。

18かくて年越えて朔日に、君達御裝束いとめでたくして、大殿19拜み奉りに參り給へり。いといかめし。

[畫詞] 20 21東の御殿に君達も參り給へり。22君達に23參りたり。中の御殿より東の御殿に24移り給ふ。

校異 1 [イ]二字ナシ。2 国にアリ。3 [イ]ろ。4 [イ]か。5 国り。6 一字[イ]ニヨリテ補フ。7 [イ]平忠納言。8 [イ]知。9 [イ]ぶ。10 [イ]は。11 [イ]らな。12 [イ]ほけ。13 [イ]此。14 国もアリ。15 [イ]ど。16 国はアリ。17 [イ]い。18 [イ]三字ナシ。19 [イ]をアリ。20 国此所はアリ。21 [イ]かし。22 七字[イ]ナシ。23 国物アリ。24 [イ]君達もアリ。

うなゐ二人御几帳さしたり。御達廿人ばかり。これ1大殿の御甥の君達などに、せ2んく(〈節供〉)參3り大御酒參りいみじくす。

かくて賭弓に右4は饗すべしとて、心5 6に7設けすべき8事宣ふを、「いかで心ことにせむ。去年の還饗を右大將のいと清げにし給へりし9はた、上臈こそ怪う心あるべき人なれ。この侍從の母より10(めで)たき11などもなしや」宮、さき12ら13でむかし。まさに仲忠14はかなかしにて、右大將の持たまへらむ人、おぼ15つか16しおやは」と宣ひて、かつけ物のいそぎし給ふ。

黄詞17宮かつけ物共18ては(〈御〉)前にせ給ふ。人19(〈々〉)縫ふ。饗の設け20政所に21す。大殿22の23物語りし給ふ。

かくて24左近少將25源の仲賴26、左大臣殿た27り(〈の〉)仲(〈忠〉)の大殿の二郎なり。この少將、この世の中にめでたき物に言はれけり。穴あるものは吹き、絃あるものは彈き、萬の舞數を盡くして、28すべて千種の藝能の常に才29、かたちもいとこよもな30し。世の中の色好みになんありける。31萬の32本箇、この人の手かけぬ33と

校異 1 [玉はアリ。2 [玉ナシ。3 [玉る。4 [玉左、[宮りアリ。5 [玉ことアリ。6 [イナシ。7 [玉まかんす。8 [宮間え。9 [イか。10 二字[イニヨリテ補フ。11 [宮考異二字ナシ。12 [宮し。13 [宮ナシ。14 [イか[玉腹、[玉か毘。15 [イろけ。16 [イら。17 [玉これはアリ。18 [イて、[宮てく。19 一字[イニヨリテ補フ。20 [宮政。21 [玉てアリ。22 [イナシ。23 [宮御アリ。24 [宮右。25 [宮考異ナシ。26 [宮はアリ。27 [玉か。28 [イ三字ナシ。29 [イくれアリ。30 [宮く。31 [イ世の常。32 [イ事。33 [イナシ、[玉事。

め。1一院三宮大臣2公卿の御3子女も、さこそ捨てられ4かめれるきるを見つゝ、こゝらの人の皆に取り給ふも優あらん。天下綾錦を敷きて踊る5らん住まずは住まじ。我が7子神の下、菜芥の8中に住むとも、宿世のあらは住みなん。男は、いたはるにもつかぬものことなと言ひし、この女に算取りつるに、思ふと言ふはおろかなり。逢はせし夜より、強い着きて、哀れにいみじき契りをす。片時外に消ゆる事なく、稀に内裏に參りては、すなはち急ぎ罷出つゝ、例ありしやうに宮仕へもせず、かぎりなく思ふ事の異カ一、人のめでたき裝束し、沈麝香にしめてしつ9つひ、めでたくてあるをは、鬼魁の10食ふ山にまじりたる心地して、たゞこの女世になき者と思ふ。げにめでたき事かぎりなし。「この世に經むかぎりはさらにも言はず、後の世にも、かゝる仲に生まれかへらむ」などさへ言ひ契りて　五六年あり經。

藏人11宮内卿。12この13殿、女、少將14、15侍從16二人、公17達18このかた19り人20もも21あり。

22かたへ（衛カ）に住りける程に、正月十六日の賭弓の還饗に、左24近も25にければ、左大將殿に、官の佐達上達部親王達、左右と26遊びおはしたり。設け27はになくせられたれは、座に著き給ふ。御机參り土器始まり御箸下りぬ。仲頼の主無き手出だし28て遊ぶ。堀下には行正、樂29には仲頼、そこ30らの遊び人ともに

校異　1 [玉]院の帝の、[友]考異一の院の帝の。2 [宮]二字ナシ。3 [イ]ナシ。4 [イ]れため、[玉]れためれ。5 [友]ナシ。6 [正]とも。7 [宮]此の。8 [友]考異下。9 [イ]ら。10 [宮]住ま。11 [玉]此所はアリ。12 [玉]二字ナシ。13 [イ]ナシ。14 [宮]のアリ。15 [玉]君達、[友]考異子。16 [国]三人。17 [イ]は、[宮]村君。18 [宮]二字ナシ。19 [玉]ち。20 [イ]と物語（。21 [国]してアリ。22 八字[玉]かゝる。23 [玉]のアリ。24 [宮]方アリ。25 [イ]ナシ。26 [イ]二字ナシ。27 [宮]ナシ。28 [イ]ナシ。29 [宮]所。30 [イ]う。

ふ人も聞し召せと思ひて、なき手を出だし遊び、せめて1云へ。異人々も出でぬ。仲頼出で果てで立てるを知らで、出づる人を見るとて、御方々の御達四十人ばかり出でたり。曙にいとをかし。これを見て、仲頼歩み返りて、「他所にて見給よりは、近くてやは御覧ぜぬ」と言へば、「それ2は疎れ給ひにたれば」と言ふ。木工の君と云ふが近く立てるを引きとゞ3めて、「嬉しきついでにも聞ゆるかな。仲頼4と知ろし召したりや」。木工の君、「誰をかさは聞ゆらん5」とたん聞えぬ。少将、「今6から知り給へかし。聞えさすべき事もありや」など云ふ7に、兵部卿の親王出で給ひければ、「よし、今後に」とて、ふと出でぬ。

上達部8大将殿。親王9(達、上)達部、主の大殿、10人々皆立ち給ひぬ。これは御達、見に出で給へば、少将立ちぬ。

仲頼、歸る空もなくて、家に歸り11て、五六日頭ももたげで思ひ臥せるに、いとせむ方なく侘しき事かぎりなし。にたくめでたしと思ひし妻も、物とも覺えず、片時も見ねば戀ひくし悲しく思ひし12も、前にむかひ13たれども眼にも14足ら15に、身のならむ事も、すべて何事も〳〵、萬の事更に思ほえである時に、「などか常に似ずまめだちたる御氣色な16る」と言ふ。少将、「御爲にはかくまめにこそ。あだなれとや思す」などいふ氣色常に似ぬ時に、女、「いでや、

校異 1 [イ]出づ。2 [イ]も。3 [イ]ど。4 [イ]も。5 [イ]え。6 [イ]かく、[因]より。7 [イ]にアリ。8 [国]此所はアリ。9 「上」字[イ]ニヨリテ補フ。10 [イ]二字ナシ。11 [イ]ナシ。12 [因]子どもアリ。13 [イ]居るアリ。14 [イ]立た。15 [因]ず。16 [イ]ナシ。

あだごとは音にぞ聞きし松山や眼に見す〳〵も越ゆる浪かな1

と云ふ時に、少将思ひ乱るゝ心にも、なほ哀れに覺えければ、

「浦風の2ことを吹きか3へる松山もあだし波こそ名をは立つらし

4ある佛」と言ひて泣くをも、我によりて泣くにはあらずと思ひて、親の方へ去5ぬ。[illegible]らして、より(一)夜」も此方に寝なんとすれば、母、「などか彼方には參うで給は7ぬ、此所には喧騒る、あたさがなき人は心置きて思さじや。かゝ、言ひ知らず侘しと言ひながら8、9我等がやう10なる人はあらじを、さばかりかしこき宮殿は11しを習ひ給へれば、如何に淺ましき所と思ほすらん。されど、我が子の見るかひなくいますからましかば、かゝ12怪しき所に、13一日片時立ち止り給ひなましや。人となりとして生ひ14いで給15ひつれはこそ、世中に名だたり給16ふろへあだ人の、この年頃立ち止り給へれは、この程におろかに思はれ給17かな18ば、中のきはかり思ひ19入れられ仕うまつり給20ふは、かひなく口惜しとは思ひ給はじや。今の世の男は、先づ人を得んとては、ともかくも父母はありや、家所は21ありや22、荒はひほころびはしつべしや。供23の人に物はくれ24、馬牛は飼ひてんやと問ひ聞25き、26顔かたち清らな27は、あてにらう〳〵じき人といへど、

校異 1 伊あだ。 2 伊浚、国外。 3 伊へ。 4 伊昔が。 5 伊にアリ。 6 伊る。 7 国で。 8 イもアリ。 9 国わ。 10 国にアリ。 11 伊ら。 12 国浅ま。 13 尻考異六字ナシ。 14 伊出。 15 伊へ。 16 伊ひつる。 17 伊ふ。 18 イとこ 19 伊悲。 20 尻へは。 21 伊三字ナシ。 22 伊あらずや、国荒び。 23 国ナシ。 24 尻むやアリ。 25 伊く。 26 尻さてアリ。 27 尻りやなど問ひ聞けば。

荒れたる所にかすかなる住ひなどして、さうぐ〵しげなるを見ては、あたむくつけ。我がいたづ1け傾ひとやならんと思ひまどひて、あたりの土をだに踏まず、などかその人には住まぬと言へば、法師籠り居りき。2 3所て籠りを4もき5と言6へば、あたりにも寄らず。怪しきものの子孫、顔かたち7鬼の如くして、頭はひた白に、腰は二重なる女なれど、8猿を9後へ手に縛る物と云へ10とてありし者の妻11う12子など云ふ者をば、天下の人もみ聞き過ぎて、言ひふれまどふ今の人なれば、かゝる所に、一日片時立ち止る人もあらじと思ひて、多くの縁あるよき人をも聞き過し、我が子をや人笑はれに、淡々しく思はせん、その人住みしなども、今は来とぶらひけずと言はせ奉らじとて、こゝ13ちら聞き過ぐしつれど、さのみ言ひてやあらん、宿世に任せてこそはあらめ。又天下いまし通はず、見候んじ給ふとも、例のあだ人なればと14たゞに思はせむと15てこそは、この君を、こゝら親16が時の財寶、衛厨の何くれも17惜しき物なう失ひ、こゝらの年頃地下を待ち費ひつる近江の荘も、18(こ)の君の19御20時にとうて21うちつれし22か23よまどひ仕うまつるかひありて、今日までめぐらひ給ふは、如何に嬉しき事なり。何れの宮殿はらにかは、この君の詳に取られ給はぬ。されど、夜を重ね日を積みて、この年頃此所に通ひ給ふは、如何に面だゝしき事なれ。などかこれを疎にはし給ふ。青佛、

校異 1[因]きく。2一字[イ]ナシ。3二字[国]ノ。4一字[国]り。5[国]など。6[国]ひて。7[イ]のアリ。8十二字[因]勢ひありし者の子どもたりと言ひ。9[イ]も、[国]しえ。10[因]徳。11[イ]そ。12[因]たど。13[イ]ナシ。14[イ]たゞ、[因]だ。15[イ]ナシ。16[イ]なやる。17[因]少。18一字[イ]ニヨリテ補フ。19[国]ナシ。20[因]爲。21[イ]賣り。22四字[イ]ナシ。23一字[イ]う。

かば、1こ2もなく食べ酔ひにける名残りにや侍らん」「いと不便なる事かな。すべて、この御酒聞し召し過ぐる事こそいと嬉しきこと」と3や、少将、「いかでこの司罷り離れなん。すゞろなる酒飲は衛4府司のする業なりけり」と言ふ。父主内に入りて、「君はこの頃悩み給ふ事ありけり。何事をかつかうまつらん。いとほしく」など言ふを、この女例ならぬ気色を見て、いと心憂しと思ひて、前なる硯に手習ひをしてかく書きつ6ゝ、

この世にはつらき心も知りはてぬ契りし後の世をも見てしが

と書きて、押し7わごみて置いたるを見て、哀れと思ふ。我が心とも言はじ、あぢきなきを見て、えあるまじき事を思ひて、人にもつらしと思はるゝ事、如何ばかり思ひし人にもあらなくにと思ふにも、哀れなりければ、

「昔より契りし深き仲なれば生も死をも共にこそせめ

など心地の例ならず悩ましければぞや。御為に疎なるにはなどてかあらん」など言ひて、諸共に臥しぬ。男君8同9 10こいで物参ら11んとて、調じいそぐ。父主手づから雉つくる。此所12には少将に物参る。女13雉などあり。

大将殿には、14廿七日15出で来たる16乙子になん嵯峨の院17に御賀参らんとし給ひける。あ18りのかぎりの

校異 1 [イ]た。2 [国]よ。3 [イ]なれ、[国]なり。4 [イ]府。5 [イ]うアリ。6 [国]く。7 [イ]包。8 [国]此所はアリ。9 [国]君アリ。10 [国]雉調じて。11 [国]せアリ。12 [国]ナシ。13 [イ]ナシ。14 [国]考異正月アリ。15 [国]考異にアリ。16 [イ]きのとの。17 [国]考異の大后アリ。18 [イ]る。

君達、男も女も集ひて、つか[1]まつり給ふ。すべて萬の物かねてより設けて、いといみじくになくして參り給ふ。いと珍らしく清らなる樣にし調へ給ひて、子孫引き續きて、絲毛六つ、檳[2]榔毛十四、うなゐ車五、下仕車五してたん參り給ひける。御前四位廿人、五位四十人、六位[3]は數知らず、御供皆の君達皆おはします。例の遊び人達數を盡くし[4]て、舞[5]の[6]供[7]君達いとになく裝[8]束きて、いとをかしげなり。御供[9]定めて、絲毛のには、宮若御子達六所、二のには女御の君、また次々の君達、皆組みませてあまねく奉る。人腹には、御方々の御達四人づゝ乘るべし。大人四十人、童廿人、下仕十人、いとになく裝[10]束きてぞありける。大人廿人は、あ[11]か色に蘇枋襲、今廿[12]はあ[13]か色に葡萄染襲、綾の[14]摺裳。うなゐはおしなべてあ[15]を色に[16]すゞし襲ひ、樣の[17]こへ〔○表〕の袴、綾掻練、色はさ[18]うにも言はず。下仕へは例の村濃、檜皮色、襖襲、おしなべて賜ふ。かくしたなど[19]し[20]裝[21]束くしを、舞の師ども容[23]よく、若き人こそあれ、老い[24]にたる人などはかゝる御いそぎを[25]先づとし給ひて、未だ[26]衣も[27]賜ばざりければ、世の中にゆゝしくきがたき事〔○言カ〕をしつゝ、己が樣の怪しきをば知らで、泣き怨み奉れども、今謡[28]るに[29]も思して聞き入れ給

校異 1 [不]うアリ。2 [不]根。3 [不]ナシ。4 [国]たり。5 [不]參る。6 [不]子アリ。7 [下]君。8 [不]束。9 [因]人數多たり。
10 [不]束。11 [不]を。12 [不]人アリ。13 [天]褐裏を。14 [不]ナシ。15 [天]か。16 [不]蘇枋。17 [不]う。18 [不]ら。19 [不]に。
20 [不]着アリ。21 [不]束。22 [不]す、[国]ナシ。23 [因]を整へたり。24 [不]ナシ。25 [不]先。26 [因]衣。27 [不]たばか、
[国]賜けざ。28 [不]か。29 [不]と。

はで、殿へ給ふ。御寵じもの折敷などの事、すべて何か〳〵、己がちたり1〳〵、我も〳〵とし給へば、いみじうめでたし。遊び人どもなど殿へ見させ給ふに、少将仲頼召しに遣はす2に、宮内卿の殿に、賭弓3饗より歸り給ひて、萬の物の興も覺えで臥せる所に、「大将殿より召あり4」と言ふ時に、「何事侍はんずるぞ」と問はすれば、「ふうち5、明日の子の日に、嵯峨の院に參り給ふべき事によりて」と言ふ。少将、「日頃いたはる所侍りてなん」とて、參らぬ時に、大殿、「口惜しき事6。仲頼、仲忠なき饗は、物にもあらぬものを」とて、手づから御文書き給ふ。日頃久しく參り給はぬよしなど書きて、「嵯峨の院に、いさゝか若菜參る事あるを、お7ふせていと惡し。たんなるべき。い8らはらる9(る)事物し給ふなるをなんいとほしかり申し侍るを、怪しう物し給はずば、如何に嬉しからん。正頼が大事と思ふ事なり。必ず〳〵物し給ふべくば、いかに嬉しからん」。少将御文を見て、驚きながら、苦しき心地を思ひ起して參りたり。明日の御供の事など宣ふ、「東宮よりも、明日かの院へ參り給ふべきよし、10たちわ11かき長正につけて仰せ給へりしかども、日頃惱む事侍りて、えさぶらふまじきよし申し侍りにしを、仰せごと畏ければ12來る」。大殿、「しか13宮も參り給ふべきよし仰せられき。御供の人定められなどせしに、長正の朝臣それ14〳〵はる15いろに16なんと取り申しゝかは、知らしめしたらん」。仲頼、「さらばさぶらはむ」。大殿、「さらばいと嬉しき事」と宣ふ。かくて、いとに

校異　1 俗ナシ。2 國ナシ。3 國のアリ。4 俗けりアリ。5 俗すゞ。6 國なりアリ、國落選かたアリ。7 俗は。
8 俗たゞ。9 一字俗ニヨリテ補フ。10 五字俗帶刀。11 一字俗ナシ。12 俗さぶらひつる、國落選さぶらひつ。
13 國東宮。14 國に加ふ。15 國べき。16 國二字ナシ。

なく遊び人など具して出で給ふ。親王達上達部、東宮の御供になんつかまつり給1はんとしける。かくて廿七日つとめて御車寄せて、宮達君達も率らんとて、並びおはします所に、大宮の御乳母備後守、大殿の御をば宮の御2めのと3に4うと、例は上に參らぬ人々、かゝる御中にまじり居て、「我も昔は男山御供につか5まつらんに」と言ひけれど、聞き入るゝ人なら6し、今は物見7なと思8ふ。かくて御車に皆奉りて、引き續きておはします。御前は、四位五位六位合せて二百人ばかりありけり。

文化十二年乙亥三月以本居氏本校合畢興之

文化四年丁卯七月八日校合畢

校異 1 因へり。2 [イ]おと。3 三字因入道殿。4 一字[イ]そ。5 [イ]リアリ。6 因考異く。7 因ん。8 因考異へり。

かくてまた嵯峨の御時に、源の1忠経と聞ゆる左大臣おはしけり。又右大臣橘の千蔭と申すおはしけ2り、世の中にかたち清げに、心賢き人の一に立てられ給ふ。おほやけに仕うまつり給ふにも、身の才に勝り給へり。帝3は時めかし給ふ事かぎりなし。一年に二度三度宮冠賜はり、日ごとに4位まさりつゝ、年卅にて左大将かけた5り右大臣になり給へり。御妻には一世の源氏、かたち清らなる名取り給へるが、十四歳なるを6ば賜ひて住み給ふほどに、十六歳といふ年の五月五日に、玉光り輝きたる男の、いとをかしげなるを生み給へり。名をば忠こそといふ。その7子をまた思8ふ人なく、類なく限りなき御仲にて、これもかれも、左様に9心ざし深く営ひ契りて経給ふほどに、忠こそ生ひ出で来るまゝに、かたち清らなる事かぎりなし。三になるに、心のさとくらう〳〵じき事かぎりなし。父母、撫で養ひ給ふ事かぎりなし。母10君は、頂の上を蓬萊の山になさんと11、たな12うらの内に黄金の大殿を造らんといふとも、忠こそが言はん事は違へじと喜び給ふほどに、忠こそ五つになる年の三月に、母君にはかに離れ給ひぬ13べし。殿の内ゆすりみちて、山々寺々に、おこたり給ふべき事を祈らせ給ふに、験な14し。母君思ひ15(こ)とまた二つなし、忠こその上を思す。父大殿に聞え給ふ、「おのれ世に思ふ事なし。忠こそが事を思ふなん、此の世は離れがたく思ふ。これが

校異 1 [伊]定。2 [国]る。3 [河]ナシ。4 [伊]加階。5 [伊]る。6 [伊]え給。7 [天]御妻。8 [伊]はね。9 [河]御アリ。10 [伊]宮。11 [国]もアリ。12 [伊]ごゝろ。13 [国]か。14 [近]く。15 一字[伊]ニヨリテ補フ。

人となりて、おのれ1永き世にも心安くならんを見、官冠得るまで見生さんとこそ思ひしか。悪し善しもまだ知らぬ嬰児を見捨てん事2もの後めた3く憂き事」と宣ふ。大殿萬に聞え慰め給ひつゝ、泣きまどひ給ふ事かぎりなし。4姫君聞え給ふ、「誰もく親にはものし給へど、少き時は、女親5のことをあらぬものなり。よし、如何はせん。おのれに代りて、腹汚なき人につきて、悪しき目見せ給ふな。腹汚なき人ありて、悪しき事聞ゆる人ありとも、言はん人の罪になし給へ。すべて我が子の為め悪しからむ事をば、水の上に降る雪、砂の上に置く露となし給へ」6さ聞えおきて隠れ給ひぬ。大殿、諸共に死なんとまどひ給へど、かひなくて、後々の御わざどもし給ふ。かくて7泣く泣く経給ふほどに、年頃女と云ふもの目に近く見給はず、思こそを妻に8にもかたへ子にもかたへと頼み思して、撫9で養ひ給ふ程に、世の中にありとある上達部皇子達、女子持ち給へる10は、女方より、名高き大臣にものし給へ、11とて、降る雨の如に言ひ来れど、女君の宣ひし事を思して、聞き過ぐし給ふに、その時の大臣隠れ給ひぬ。その北12方ならびなき世の背の13わたり初より後まで、いさゝか立ち並ぶ人なくて、一14つ子にいますかりけり。よき人の女など数多集め15に、聞16す17著せ食はせ、大殿の御時より、今18す仕うまつる御達多かり。殿のうち勢ひて経給ふに、かく、おと19こ

校異 1 図亡。2 [イ]ナシ。3 [図]二字ナシ。4 図女、図考異母。5 [イ]のごとは、[イ]に如く事は。6 [イ]と、[イ]と、ぞ。7 図二字ナシ。8 [イ]ナシ。9 [イ]で。10 [イ]ナシ。11 [国]ばアリ。12 図のアリ。13 [イ]ま、[イ]ま。14 図考異り。15 [イ]て。16 国に。17 [イ]ナシ。18 [イ]に。19 [イ]ど。

の妻1らしなひてものし給ふと聞きて、北2方この大殿に御心つきて思せど、よきをだに聞き過ぐし給3ひて、まして思しもかけず。女君4はかく思ひて、山々寺々5修法行ひ、佛神に大願をたて給へどしるしなし。北の方大方は神佛にも申さじ、この人に我かく思ふと言はん、我人のかしづく女にもあらず7、8さりえばこそまばゆくもあらめ、これを10否にて、妻なき人のよろしきは、何處にかあらん、恥を捨てゝ言ひ出でんと思して、かの大殿の御乳母の女、あやきとて、11たゞかたちある童を使ひ給ふ、それに有難き12裝束13させて、かく聞え14奉り給ふ、

「15たゝのみや淺茅茂しと思へどもまた蓬生16はす宿もありとか

同じくば同じ野にや思し17召し給はぬ」とて、をかしき淺茅に御文さしたり。さて奉18り19給ふ。あやき千蔭の20御殿に參り21門に立てり。殿の人見つけて、怪しく清らなる童かなと見て、「何處よりぞ」と22問ふ。あやき、「左大23臣より」と答ふ。驚きて御文24を取り入れて25給ふ。怪しく如何に思ほして宣ふならん、26みの人と思して、ひとりあれば宣ふにやあらんと思は27えて、長き裙を28折らせて、御返し、

校異 1佀ら。2因のアリ。3因へば。4国と。5国にアリ。6因のアリ。7佀妻にもあらずアリ、因考異かの妻のアリ。8因考異ナシ。9佀あら、因ら、10国はたち。11佀めでたく。12国装。13佀をせアリ、国せアリ。14因てアリ。15佀こゝ。16佀ふ、佀ふる。17因考異二字ナシ。18因考異か。19佀宣。20因考異おとゞ。21佀てアリ。22因言。23佀殿、国臣殿。24因考異ナシ。25佀見アリ。26佀世。27佀し。28因考異補。

人はいさかれじとぞ思ふ賴めおきて露1の消えにし宿の葎は

とて泣り給ふ。これよりうちはじめて、女は、なかしき事も、哀れなる事も聞え給ひつゝ、恥2見3を給ふなども聞え給へば、やんごとなき人の聞に宜ふを、聞き過ぐして止みた4ば、情なきやうにもあり、人の御恥にもあり、さりとて、昔を忘ればこそあらめ、時々は通ひて參うでんかしと思して、5さうて通ひ給ふに男はたゞ今卅餘、女は五十餘ばかりなり。よき程なる親子ばかりな7る中にも、千蔭のおとゞは、忠こその母君より外に、女二人を見給はず、かたち淸らにらうらうじう、年若きを見給ひて、離かるべき契りをして經給ひしほどに別れ給ひしかば、如何ならん世に8見え給9へらん人をだに見むと、吹く風降る雨の脚にだにつけて、歎きわたり給ふほどに、心にもあらぬ人の、年老いかたち見にくきを見給へば、いとゞ昔の10思ひ出でられて、11まれにもの12宜ひ13ては、心とけたる折もなくてあれども、北の方15は財寶を盡くしていたはり給ふ事かぎりなし。16賤人の貪ひ著し物をも知り給はねば、昔の世の君の御時にはさに貪ひ著し者は、「一身はら17(ほ)す」と集まりて、この賤人は泣き侘ふる事も知り給はず、ことなる思ひなき人の、よ18せずば19たゞもしぬべければ、山々に修法を行はせ、夏冬の御裝束、朝夕さりの御20物に、多く物を盡くし

校異 1因考異と。2因をアリ。3イせ。4因考異ぞ。5イさここそ、因まうで。6イと見るアリ。7因考異なけアリ。8イおぼし。9玉ひつ。10イみアリ。11イ夜かれ、因稀べ。12イし給。13イて、因つゝ。14因のアリ。15イナシ。16イ我がアリ。17一字因ニヨリテ補フ。18因り。19因絶え。20イ由。

て、頭より脚末1たゞに2怪しきを斷ち切りて、見給けん草木まで寄せ3ざらむ、このおとゞにつかへ4まつらん上下の草刈牛飼まで飽き滿たせてあらせん5、我が身のならんをも知らず、まして、つかうまつらん人のならん、7した知らず。おとゞまれにものし給へば、箸ふれもし給はぬ御臺を七八と立て8、有り難き物をし据ゑ、身にもふれ給はぬ御衣を、綺羅を御衣掛にいろ／＼に縫ひかけ、興ありと思ほ9ん人をして、箏の琴琵琶など取り出でゝ、萬の聲に調べて彈かせ給ふ。聞きめで給10へど、逃げなまほしく、かしがましく思ほ11す。御前なる人12、「怠々しき13まねし14給ふ。何15するものぞ」16を口ひそむる17も知らず、上中下すげなき遊びを心一つや18かてこと心なし。このおとゞ此所にものし給ふ19をば苦し20けれど、山々に修法行ふ力になん年月の經るまゝに心ざしは劣れど、なほ絶え給はざりける。思こそ十歲になる年、殿上せさせ給21ひつゝ帝思22(す)事かぎりなし。父おとゞも、女子ものし給はねば、思こその持た23もつか24まつりしかぎりは、外にや25うこ26と、我が世のかぎりはまたごと思へ()ぞとかり27賜ひし所にさぶらはせん、月に一度故大君の御爲に28宮問し給ふ、29そのうちに出で來ん物おはせぬ、思こそ一人に萬の物を取らせんとこそ思へ、かう財寶を盡くしてまどふ人に、露塵物取らせんの心30ざし、年月になりぬれ31ど、さるいみじき御德に、紙一枚を

校異 1因まで。2イ綾錦。3イか。4因うアリ。5因とてアリ。6イうアリ。7国は。8イてアリ。9イれアリ。10因はで。11因せば。12因もアリ。13因さま。14イつゝ。15因にあり。16因と。17国聞き、因ナシ。18イり、イと。19イ事は。20因が。21因考異ふ。22一字イニヨリテ補フ。23因に。24イうアリ。25イら。26因ナシ。27国官。28イ八講。29因莊。30イなく、因考異なし。31イば。

だに奉り給はず。この北1方は出で來添ふ物はなくて、御領の物、さては田畑2刈り盡くして、數知らず使ひ給へば、かぎりなき財寶といへど、貧しさ3きたりぬ。

【畫詞】こゝは千蔭の大い殿。

かくて、このおとゞ4の御絶え果て給ふ5ひて時々來(一)衍カ)通ひ給ふに、年月過ぎて忠こそ十三四になりぬ。かたち清らに、心6たまめきたる事かぎりなし。よき程なる童にて、遊びいとかしこく、こともたき巴好に7て生ひ出で8し。女御達を9こならして、帝かぎりなく時めかし給ふ。たゞ今の世には、忠こそ10(に)まさるかたちなく才11なでてな12くて、かぎりなき人にて、「忠こそが世13や」と言はるゝまで、いとめでたし。かゝる程に、忠こそおとゞのものし給へは、時々内裏より一條殿へ罷出などすれば、この北14方いとめでたしと15思ほして、見知らぬいらへなどし給ふほどに、忠こそ、16おとゞの御姪にあて君とて、かしづき給ひしに、忍びて通ふ。この北17方いとかしこく心づけて、「おとゞの見18ゝ難くし給ふに、いと嬉しく見え給へば、御代りになん賴み聞ゆる。御後見はいとよくつかうまつらん。あだにな思しそ」など宣へど、知らず顔にて在り經るほどに、千蔭のおとゞ内裏に參り給ひて、宗め給ふ事あるにつけて、いと久しく此所に見

【校異】1 因のアリ。2 囚寶。3 囚く。4 因ナシ。5 囚けで。6 囚のアリ。7 因ぞ。8 囚て、因ける。9 囚見。10 一字囚ニヨリテ補フ。11 囚三字ナシ。12 因らで。13 因なりや、因考異なり。14 因のアリ。15 囚おぼゝ 16 囚故アリ。17 因のアリ。18 囚え。19 囚らアリ。

え給はず。この北[1]方思ひ焦られて、湯水もまゐらず、侘びしげに待ちわたり給へど、御文をだに聞えで、月頃になりぬ。北[2]方待ちわづらひ、術ながりてかく聞え給ふ。

「菅原や伏見の里を忘るゝはわが荒れまくや惜しまざるらん

と聞ゆればさ[3]ゝなりや。いみじき恥をも見[4]給へるかな」と恨み聞え給[5]へれば、おとゞ見給ふに、いとゞ心ざし劣る心地し給へど、さてあらんやはとて、[6][7]返事書き給ふ。「悩ましく侍りて、内裏へも参らず、罷り歩きもし侍らねばなん其所にも参り来ぬ。今ためらひて。まことやすが[8](は)ら二〇菅原は、

荒れまくは君をぞ惜しむ菅原や伏見の里のあきたたければ

身こそよそなれとか云ふ、思ほし屈せざらめ」と聞え給へり。おとゞ、いとほしかりて、かく宣ふを、今宵ばかりは参らでむかしと思して、その夜さり[9]一條にものし給ひて、下りて入り給ふ。[10]そこには御消息給はじと思す。内に[11]いり給ふすなはち、ありしやうに[12]、何しに来つらんと思ほし[13]て、[14]しはしものし給ふに、心地もそ[15]うにて、物も言はで居給へるに、この北[16]方は心もとなく、珍らしく物し給へれば、喜びながら出であひて、物まゐりなどし給ひて、月頃のつらさを恨みなどし給ひて、よしばみ給へれど、をさ〳〵

校異　1 [図]のアリ。2 [図]のアリ。3 [イ]ら。4 [図]せアリ。5 [イ]へアリ。6 [イ]御アリ。7 [図]考異かへし。8 一字[匹]ニヨリテ補フ。9 [イ]はアリ。10 [国]まで。11 [イ]未アリ、12 [国]もあらねばアリ。13 [イ]くアリ。14 [イ]立ち踊りいなまほしく思せど、人目を思してアリ。15 [イ]ら。16 [図]のアリ。

いらへもし給はず。この北1方2見奉り給ふに、病の重る心地し給へど、氣色にも出ださじと思して、心にもあらぬ3など4し給ひて、しばし物5宣ふほどに、いと苦しう覺え給へば、何事にかことづけていたましと思すに、北6方7はだしや8うじとて、萬に言ひとゞめ、御前なる人も夢語りなどして、聞えとゞむる氣色のしる9し見えければ、おとゞをかしと思しながら、二三日ものし給ふ。さて四日といふに、出で給はんとするに、「物忌し給ふべき夢を見つ」と聞え給へ10ど、「内裏より召あり」とて急ぎ出で給ひぬ。かくて我が御殿におはして、安らかに物などまゐりて、大殿「怪しく物こそ食はるれ。かの一條は口こそ惡しくなれ」忠こそ、「さるは、彼處にこそ上さ物は侍らめ」と申し給へば、おとゞ「舌の嚢もと云ふは、それぞかし」と宣ひて、北11方の御帳のうちに御座所して、御殿籠りなどするに、忠こそ、「今宵は一12には渡らせ給ふ13にじきにや」と聞え給へば、おとゞ、

年經れど忘れぬ人の寐し床ぞひとり臥すにも嬉しかりける

とて14御座をうち拂はせて臥し給へば、忠こそ、

15寢し人も涙のうへに臥すもの16(を)17宿の下には數もか18へなん

校異 1因のアリ。2[イ]をアリ。3国事アリ、因いらへアリ。4[イ]と給、国宣。5[イ]し給。6因のアリ。7[イ]出。8[イ]ら。9[イ]く。10[イ]は。11因のアリ。12[イ]條アリ、因條殿アリ。13[イ]ま。14因九字ナシ。15因見。16一字[イ]ニヨリテ補フ。17因床。18[イ]づか、因くら。

〔頭註 此所は上段の大將

かくて、久しくおとゞ一條殿へ參うで給はず、忠こそあこ君のもとへ時々通ふを、繼母の北の方あさましと思しけれど、いと片思ひなり。〔忠こそ〕色ある消息聞え給へど、心得たてたいらへもし給はぬほどに、五月五日になりて、酒供などいと1きうらに調じて、おとゞやものし給ふとて、傍の人に2物食はせで3うち臥し給へるに、忠こそ一人來ぬれば、「よし、かの御代りに」とて、忠君の御前に參り給ひて、あ4さきさ5しべうらいた〇菖蒲に、かく書きて6遣はさ7り、8はしの蜜に、

今日だにも9あふと知らなん菖蒲草淀の河の深きみぎはに

とあり。忠君見て、いと怪しく、かく宣ふは、おとゞに聞えよと思はせ奉らんとにやあらんと思ふに、ましていとほし10かりければ、たゞかくなん、

「寄る浪のすゝぎわかれは菖蒲草たゞ思ふことぞ苦しかりけれ

かしこき事ならましかば嬉しからまし」と聞え給へり。北11方これを見給ひて、御心あやまり給ひて、我に恥見すること、いかでかこれが報ひせんと思ひなりて、何事を言ひつけんと、目をつけて見給へど、言ひつくべき事もなし。強ひて思ひたばかる。父おとゞの御もとに、親12（の）御時よりつぎ／＼傳はれる名高き

校異 1〔作〕きよ、国けら。2国か、国物も。3国待。4〔作〕ひアリ。5〔作〕しや、国さ。6国はしの案にアリ。7国る。8国五字ナシ。9〔作〕生。10国二字ナシ。11国のアリ。12一字〔作〕ニヨリテ補フ。

帯、内宴にさし給へ1りけるまゝに、一條殿に置き給へりけるを、この北2方取りか3へし給ひ、4かく失せぬとのゝしり給ひけり。おとゞ驚き騒ぎ給ふ事かぎりなし。さまざまに、これが出5で来べき法を行ひて、「こゝ6ら五代六代と言はれる帯を、かく我が代にしも失ひつる事」7にて、心をまどはして歎き8給ふ。「この帯をさす事、大嘗會、今年の内宴になんさしつる。大嘗會の年さしたりしを、上御覧じて、この帯をば位をも譲らんかしと仰せられしかど、惜しと思ふ心ありて奉らざりし。いと惜しく失ひつる事」と、いみじう思し嘆く。北9方、いかでこの帯を忠こその取りたる10(と)、父おとゞに聞かせ奉らんと思して、世の中にかしこき博打の、限りなくなりたるを召して、「まこと11は、我が言はん事きゝてんや。ありとある財皆渡さむ。聞はん事は、難かるべき事なりとも、さながら12さなん」と13物賜へば、博打、「仰せ給はん事は、難かるべき事なりとも、承らん」と申す。北14方、この帯と絹十匹餘とを取り出でゝ、「この帯、右の大臣の内裏へ參り給へら15れん時、臈次所に持てゆきて、賣る物なりとて出ださせ。價問はれれば、千五百16といらへよ。せめて問はるゝ物ならば、人に聞かせずして、大臣に、忠君のせさせ給ふなり。おのれがする事にあらずと言ひて、持て歩けど、買ふ人17となければ、持て參りた18ると言へ」と宣へば、博打うち傾きて、とみ

校異 1 [イ]二字ナシ。2 [内]のアリ。3 [イ]く。4 [イ]て、[国]かくて。5 [イ]づ。6 [国]ら、[イ]らの。7 [イ]と。8 [イ]給ふ、[国]給ひぬ。9 [内]のアリ。10 一字[イ]ニヨリテ補フ。11 [内]や、[内]考異に。12 [イ]なさ、[国]さなさ。13 [イ]宣。14 [内]のアリ。15 [イ]ナシ。16 [イ]貫アリ。17 [イ]も。18 [内]り。

に取らず。北1方手をすりて、いつ2ゝきぬ五十匹取らせて宣ふ、「いと少けれども心ざしなり。いま又もありなん」とて取らせ給ふ時に、「いと易きことに侍り」とていぬ。博打、内裏へおとどの参り給3ふ、上達部御子達多く參り集まり給4ふ、忠こそもさぶらひ給ふ時、藏人所に帯を持て來て、「賣るたり」とて出でたると5(きこ)、藏人在原の遊家心つきたる人にて、かしこく驚きて、「これは世6中に有り難き物持ちたる人かな。こ7(こ)ら見つる中に、これに似たる帯なし。内宴に右の大い殿のさし給へ8り候に9覺えたり。さりともそれならんや10は」左衞門の尉なる人の、「11いでその帯は、上の御覽じて、奉れと仰せ給ひしを、12(る)いだい「(累代)」に傳はれる帯なり。千蔭が後出でまうで來ば奉らんと奏し給ふを、忠こその帯13(に)こそな14しめ」など言ひて、「さはれ、上に御覽15(せ)させん」と言ひて、持て參りて、16賣るを奏す。上御覽じて、いとかしこく驚き給ふ。「これは千蔭の大臣の帯にこそあめれ。うれたき人かな。我が乞ひしには、出で來なば取らせんと言ひしを、さにこそありけれ。不思議なる事かな」とて、右大臣を召して、「いとかしこく惜しまれし帯は、出だし立てられにけりや」とて笑ひ給ふ。おとど驚きかしこまり給ひて、「この帯は、いぬる二月十二日に、忠紹の朝臣の家にて盗まれ侍りし帯なり。これによりて、萬の神佛にたん17願し申しつる」と申して、すなはち帯を取り18、博打を左衞門の陣に召して、問はせ給へば、博打責められ

校異 1 底のアリ。2 行ら。3 底ひ。4 底ひ。5 一字国ニヨリテ補フ。6 底のアリ。7 一字行ニヨリテ補フ。8 行る。9 国いとアリ。10 行ナシ。11 底いらへ。12 一字行ニヨリテ補フ。13 一字行ニヨリテ補フ。14 行ら、国しつら。15 一字行ニヨリテ補フ。16 国かく。17 底願。18 行てアリ。

裏へ、1は参り給ふや」輔宗、「さ2はいつ頃3侍所に、衛府官どもや知らず侍りけむ、心にくゝ思ひて、
盗人入りまうで来て、4み5侍ひし装束なども皆探し取りて、なしこに侍る物のいさゝかなる調度など、皆
あさり取りて裸にしかば、にはかに装束っし侍らず。この頃内裏6(に)召し侍れど、え参らでなん」北7
方、「いと便なき事かな。などかはさも物し給はざりし。いさゝかなる事は仕うまつりてましものを。今よ
からずとも御装束は調じて奉り侍らん」輔宗、「いと嬉しき事かな8の昔への御勢ひのやうにもおはしまさゞな
るをなん。今9のも同じこと10は11御としは劣り給はざなるを、などかはさはものし給はざらん」北12方、
「思ふやうにもあらずや」など言ひて、「いさゝかなる事、語り聞えんとてさぶらふ。人には宣はじとてなん」輔
宗、「御前事は何かは他人に聞えん」北13方、「嬉しきこと14。聞15えん事は、このものし給ふ人は、16歳も
老いぬ、い17に更に人に見え奉らじと思ひしを、獨りある18ものとよめ、つれづれと物心細げに思ひたりし
かはたんと19聞20えけるの21を、22あさましきことと、忠こそめ、如何なる事23はありけん、あさましき心
つきて、夜昼言へ、24ば、見捐らぬやうにて侍れ25は、思ひ狂ひて、大方は父おとゞのいますかれば26とかく
あなづり給ふ。7いますかずば何か憚まん。この道には親子なきものなゝり。このおとゞ帝かたぶけ奉ら

校異 1因考異ナシ。2[イ]ナシ。3因侍り。4[イ]一つ二つ。5[国]侍り。6一字[イ]ニヨリテ補フ。7因のアリ。
8[イ]とアリ。9[イ]ナシ。10[イ]ナシ。11[イ]おとゞ、[イ]御衛。12因のアリ。13因のアリ。14[イ]に思ひアリ。
15因考異け。16[国]われアリ。17[イ]すゑ。18[イ]など。19因か、20[イ]き。21[イ]に。22因考異七字ナシ。23[イ]か。
24因と。25[イ]と。26[国]こそ。27因考異七字ナシ。

んと奏して、流させ奉りて、つゝむ事なくて責め言はんとなん言ひたばかるなる。これたゞ己が身に苦しき事なる。」かゝる事なんあると、かしこに語らんと思へど、かゝる谷を、昔より1甚汚なきものに人の言へば、おぼきなくてなんえものせぬ。君やは忠こそが密にかう2ち奏したるやうに告げ給3はぬ」朝宗、「いと易き事なり。かく怪しき人のいかで時めき給ふらん。なほ見給ふには、こともなき人とこそ見給ひつれ。萬の事忠こそのをよるまゝになん。忠こそならぬ人、上になきものになむ思したるげに思ほす事いとことわりなりや。宮仕をし給ふ事御前片時去らず。思されぬ4つく5うそ6はものし給ふめれ。内裏の御局に忠こそ召し使ひ給はぬやうなし。梅壺の御息所を隠し給はざめり。これを見給ふればこそいと恐ろしけれ。この御息所は只今の時の人なり。氣色を御覽じてなほさぶらはせ給ふにたゞ恐ろしき」北7方これを聞き給ふに、人にもかく思されけりと思ふに、ねたき事かぎりなし。かくて朝宗に宣ふ、「親に宣はんやうは、おのが親の上をかく申すまじけれど、罪ある時8、命をも取らるゝものなればなんかゝる事の由を奏するなる。父の大臣なん忍びて后の宮にさぶらひ給ひけるを、からて心よからず、帝かたぶけ奉らんと騒ぎ侍るめる。しかあらんと9(さ)、忠こそ10こ11を尋ねらるまじきものなり、大臣も心は12づかしぶ者なりけ13り、忠こそまろが制に従ふべくもあらねばなん忍びて奏すると申ししかばなん、上14には怪しき事にもある15しかな、定

校異 1イ腹。2因く。3玉ひね。4イぐ。5イこ。6イナシ。7因のアリ。8因はアリ。9一字イニヨリテ補フ。10因ナシ。11玉そ、12イ用ふ。13イる。14因そ。15イナシ。

も見知1るなと言ひしかば、忠こそ二人となき子なれば、如何らうたく思はざらん、ましてかの讒言を思へば、世を逆様になさんといふとも、心にかなふものならば、任せて見むと思ふ。かゝる事をいたして千蔭が身をいたづらになすとも、2忠3が4けら(○母)に後れて死なんとせしかば、それに代るとなん思ふべき。かの世にても、今一度あひ見むと思ふ本意侍れば、と5くまかり隠れ6んは嬉しかるべき。さて〳〵怪しき事の侍7りけ。告げ給ふなん嬉しき」と宣ふ。輔宗何のは8かもなくて帰りぬ。

讒詞 これは千蔭の9おほいみのゝ

かくてかの北10方に輔宗参うでて、「11かく聞えつれば、今12うろ(○殺)し13にき。今上にも申して殺さん14と宣15ひつる」と聞えつれば、いと嬉しと思す。父おとゞ、いと怪しき事をも聞くかなと思ほしわづらふに、忠こそ内裏に久しくさぶら16ふと、おとゞの17人参り給は18ぬは戀しう侍るに、「能出む」と奏すれ19ば、暇許させ給はぬを、強ひて申して、あからさまにまかでぬ。おとゞ、「物食はせよ。」などか久しく能出ざりつる」と宣へば、「暇も賜はせざりつれば。」など、久しく参り給はざりつらん。内裏にもおはしまさばこそ、頼もしくて、宮仕も仕20うまつりよけれ。参り給はねは、知らぬ心地して、心細う侍21(れ)ば、暇も

校異 1イナシ、イ見。2四字国たゞ故君。3イにきアリ。4一字イゝ。5イて。6イたアリ。7国る、イりけん、イりけり。8国え。9国おとゞ、宛大い殿。10宛のアリ。11国き、宛いとよく。12イこ。13イにきみん、イにや来ん、宛にやらむ、国たんや。14国やアリ。15イへ。16イふに、宛考異へど。17イ又、国久しく。18イねば。19イど。20宛ナシ。21一字イニヨリテ補フ。

許されざりつるを、強ひて罷出1去りつる」と聞ゆれば、おとゞ涙をほろ2〳〵と落し給ひて、「あはれ、さば、さや思ひつる、我も片時見ぬをばさなん思ふ。故君の遺言なれば、忠世に出で来て後、いさゝかなる事を知らずなんあるを、されど、我を相思はぬやうに聞ゆれば、3え思ひ果つまじくなんある」と宣へば、忠こそ、「怪しうも4宣ふかな。何事か侍るらん」と聞えて、涙をほろ〳〵とこぼして立ちぬ。曹司に籠5ち臥して思ふ、こゝ6らの年頃、天を逆様になすとも、7僕の武士して親を射るとも、汝が咎8にはとがめじと言ひわたり給9へるを、御10めにいさゝかなる過失もつか11まつらず、腹はかりの気色も見ぬを、如何に重き罪ありと聞召してかく宣ふらんと、恐ろしく恥づかしく、思ひ焦れ臥せり。されどおとゞは、12見え給は13ぬは、内裏へこそ参り14ぬら15めとお16ぼす、内には里にこそあら17ん18めとお19ぼす。忠こそ、東におとゞに見え奉ら20ん、山林に入21くなん、親の片時見え給は22ぬは、心細く悲しくこそ覚ゆるに、許されぬ御気色を見23つゝは、何を頼みにか宮仕へもせんと思ひつゝ、入り籠りておはす。五日といふ日の早朝、鞍馬より、若くより籠れる行ひ人の、髪ところゞゝし24(ら)け25るが、弟子三人童子五人連れてありけるが、糧絶えて、大い殿の御門に来て、千手陀羅尼を尊く読む、いと尊く聞ゆれば、忠こそ起き走り出でて

校異1イた。2イナシ。3イナシ。4イのアリ。5イり。6国ら。7イ百。8イと。9イひつ。10イたアリ。11イうアリ。12国忠こそのアリ。13イれば。14国つ。15国ん。16イもほ。17国ナシ。18国ナシ。19イもほ。20イじ。21イり。22国ねば。23国つれば、国考異れば。24一字イニヨリテ補フ。25国し、国たる。

見る1も、いとになき行ひ人なりと見て、忠君2伏し拝み給ふ。さぶらひの主達、「何でふ行ひ人をかう伏し拝み給ふ」3こそ、殿の中ゆすりて、忠君の下り給ふ所に、五位六位膝まづき畏まる4。山伏見て、これはいと畏き人かな、家の子なるべし5(と)思ふに、忠こそ山伏に問ふ、「何處に住み給ふ行ひ人ぞ」山伏、「6年若かりしより鞍馬の山に籠りて、今年7は三十年になり侍りぬる山伏なり。去ぬる七月より修行にまかり歩くに、供養たうば8らで、今日三日、童に物もえたう9ばで、疲れ10伏し侍れば、と11り申すなり。山伏は穀断ちて久しくなり侍りぬ」忠こそ、「暫し此所に立ち給へ」と言ひて、内には12入りて、冬の装束一くだりを、いと小く畳みて、自ら持て出でて賜13ふ、「入などにも更に物せに。これを御童子の中に物せん」とて取らせ給ふ。弟子一人而、持て出でぬる間に、忠こそ山伏に語らひ給ふ、「幼くより行ひの道に心進みてなん侍る。宮仕へせ14し親のもとにかゝりて侍れど、心もとゞまらず、身を砕きて山林にまじり給ふ人なん羨ましく覚ゆる。かくなんとおほやけにも申さまほしけれども、許さ15まじければ、あらはれたる師にはえなん、16慣き17しく侍るを、御弟子にやはなし給はぬ」と言ふ。行ひ人、「など宣ふ事ぞ。山林に18まじる者は、世の中をおぼろけに思ひ離れて、身をなきものに思ひなして、するものなり。そも/\た19ゞ(、)只カ、堪へカ(ら)おはしましぬ、しやは」忠君「などかくは宣ふ。行ひする人は、人の思ひをなし給ふこそよけ

校異 1 伝に。2 底二字ナシ。3 伝とて。4 伝り。5 一字伝ニヨリテ補フ。6 伝ナシ。7 関ナシ。8 伝えて。9 底まはこ。10 伝伏しせんとて、とどまり、因考異ぶしせむとてとゞまり侍ればとり。11 伝どまアリ。12 伝ひアリ。13 伝ひ。14 伝じと。15 伝ざ。16 伝就く。17 伝じ。18 伝縛。19 伝え。

れ給ふ。御息所、「如何に思ひて宣1ひつるならん2」とて御返事、「久しく参り給はぬは、悩ましくし給へ
ばにこそありけ3る。心細げに宣へるは何事ぞや。早や参り給へ。まことや。淀みは、そが怪しきをなん。
行方知らずば」とて、

　湊河底なる水の早ければ滝つ瀬見むと思はざりしを

忠こそ日暮れぬれば、お4さな〔 〕行〔 〕ひ人諸共に出でぬ。

かくて、山に入りてすなはち頭おろし、忌む事受けて、いとかなしげなる行ひ人にて、このつきて行にし師
ち(に)法など受け盡くして、かしこき智6慧たりければ、7いとかしこ8き人にて、皆うつし取りて行ふ9
をも知ろしめさ10で、常は甲にあらんと思し11て、父おとゞは内裏にさぶら12はんと思して、廿日ばかりに
なりぬる時に、内より出仕召しに、蔵人所の小舎人来た13り。おとゞ驚き給ひて、「内にはさぶらはずや14は。
先つ頃、あからさまにま15うでたりしかど、此所には侍らず、久しくなり侍16れ」と驚き騒ぎ給ふ。御使ひ
「忠君はさぶらひ給はで久しくなりぬ。一日、許され給はざりける御暇をせめて17まかで給ひにし18(のち)、
更に参り給けず19とてなん頭の君など急ぎ参り給20ひつる」おとゞ、「此所には、あからさまに罷出たりし
かど、許されざりしを、強ひて罷出つるなりと申ししかば、帰り参りたるとなむ日頃思ひつる。内裏にもさ

校異 1因へ。2因やアリ。3因れ。4因こ。5一字因ニヨリテ補フ。6因者。7九字因考異ナシ。8一字因
き。9国さる事ありと。10国ねば。11因ナシ。12因ふら。13国れアリ。14因ナシ。15因か。16因る、因
り。17因出してアリ、因考異奏してアリ。18二字因ニヨリテ補フ。19因二字ナシ。20因へり、因へる。

ぶらはざなれば、たゞ今怪しがり求めさせ侍1る」と奏せさせ給ひて、手を分ちて、大嶽立てゝ求めさせ給へどなし。2かちよりも御使ひをわかちて求めさせ給へど聞えず。内裏よりおとゞ召す。おとゞ「かしこき事聞召した3なり。あ4はぬまでも恐ろし」とて参り給はず。立ちか5はり召すに、かしこまりて参り給ふ。上、久しく参り給はぬことなど仰せ給ひて、「忠6は、7などか8なかなる9ぞ。其所には何時ばかりか見えし」と宣ふ「見え侍らで、この廿日ばかりになり侍りぬ」上、「此所にも見えでさばかりになりぬ。切に暇を乞ひしかば、童もなさき折なるな、暫しはなきもの10をりそこと言ひしかば、其所に惱み給ふ11とあり　とぶらひにものせむ12（と）言ひしかば、やむごとなき事にこそあなれとて、あからさまにまかで13たゞ今物せよと言ひしまゝになん見えぬ。所々に求むれどなかんなるは如何なるぞ」と宣へば、「千蔭あこゝ14ば、求めさせ侍るに、侍らぬは、世の中になくなりにたるにこそ侍るめれ。侍らましかばまさに見15て侍らましやは」とて、泣き給ふ事かぎりなし。上、「心うしと思ふべき事や物せられし。こ16ろに、は17たゞ思ひおくべき事も物せぬを、如何に思ひてにかあらん。交らひのついでにも、ことなき人なれば、思ひ侍ず、さき事もあらばこそ、たゞにては世に隠れじ。親ばかりの責め宣はむにこそ失する事もあらめ」おとゞ、「此所にも宣ふ事も侍らず。ふ18なき事にも侍らざりしを、如何なる事にか侍らん、人の告げ19たびしかば、

校異 1因り。2イう。3イるに。4イら。5イい。6イこそアリ。7イなにと。8イあな、イなれ。イナシ。10イせそ、国をと。11国こアリ。12一字イニヨリテ補フ。13因てアリ。14イかしこ。15国出アリ。16イこ。17国たシ。18イか。19イ給ひ、イたり、因考異たうべり。

いと怪しく侍りしかど、[1]聞はても宣はで、忽々しき事侍るなり。今はえかへり見るまじくなんとはかり宣ふ[2]とありし」「それに催ほされたる[3]ゝり。いさゝかかたる気色も見せ給はず、かたじけなく恐ろしき物に習はしたる[4]うらうへに、許されぬ気色のありけんに、思ひ困じにけるならん」如何やうたる事をか聞[6]きた[7]らなし」「下臈が上に、謡たる事を奏し侍りけるとなん承はりし」帝、「更に言ふ事なし。人の上にだに言ふ事なかりし人なり。いはんや[8]ま親の上には言ひてんや。心を知れらん人は、さる消息の事を言ふとも、[9]まことゝ思ほしなんや。この事は、定めて知りぬ、人にはか[10]しれ給へるなゝり。不便なる事なれど、左大臣の[11]家背よりよろしからず心聞ゆる人なり。そのわたりより言ひ出だしたる事なゝり」おとゞ、ともかくも聞え給は[12]らで、泣く泣く罷出給ひぬ。かくて思ほすに、帰りより始めて、様々悩しき事しもをすゑは、一條のすゑなりけり、故君い[13]まく／＼とたり給ふまでに宣[14]ふを聞、常に宣はせしかば、我が子を失はましや、けしからぬ所に通ひ行きて、悲しき事を見る事、胸潰るゝ事も、返す返す宣ひけ[15]れと思し歎きつゝ、おほやけ事も知り給はず、たゞいもひ精進をし給ひて、忠こそにあひ見むとのみ行ひ給ふ。かゝるまゝに、一條と云ふものを世にも聞かじと思ほすに、かの北[16]方、ものし給はぬ事を思ひ焦られて、大願を立[17]つ。陰陽師巫を召し集め[18]させぬれど、[19]く／＼をし給へど[20]もしるしなし。忠こそを失ひて思ほし歎く

校異 1[関]とかく。2[イ]事」。3[関]ナシ。4[関]り。5[イ]べ。6[玉]え。7[イ]き、[玉]かこ 8[イ]に。9[関]おぼ。10[イ]ら。11[玉]妻。12[イ]ナシ。13[イ]ま。14[イ]ひ置きし。15[国]る。16[関]のアリ。17[関]て。18[イ]てアリ。19[関]たく。20[イ]ナシ。

事に劣り給はず歎き給ふに、おはしまし通ひける時に交し給ひける御文どもを取り出でて見給ふに、まして悲しく覺え給ひければ、その御文どもを、沈の箱一よろひに取り集めて入れて、大い殿に奉れ給ふとて、萬の悲しげなる事を書き集め、「この御文どもは、これをだに形見と思へど、世1中に經ん2とも今日明日に思ほゆれば、侍る時にとて奉3れ4る。あはれなるものは、世の中になん侍りける」とて、

「思ひ出でてふみ見5ることに水無瀬川つらき6世のみぞ數多見えける

聞ゆべき事こそ思ほえね」とて奉れ給へ7ど、このおとゞ見給ひて、「あな心うや。よしとも思はぬに、氣色もなく、かく恨み8かな。こゝにこそ忠9かう10(へ)に、萬11にいみじき事をものし給ひける12に恨み申さま13(ほ)しく」と宣ひけれど、情づ14い給へる人にて、「日頃は、怪しき事のあるに、思ひ給へ騒ぎて、内裏にも參らでなん籠り侍15るに、其所にも參り來ずや。此所にも明日までえあるまじく思16ひ給17られて、今は後見すべき人もなければなん、18うら19にも取り集めて奉る。水無瀬川は、

淺20きこそふみ21と見22ためめ水無瀬川深き淵にぞ我はしづめる」

とて、銀の透箱二つに、この北方の御文ども、淺茅23付けたりしよりはじめて、返し奉れ給ふ。北24方心細き事かぎりなし。おとゞ月日の經るまゝに、思し歎くこと慰む世もなく思し歎きて、山に籠りて行はん、

校異 1国のアリ。2阿事。3因ナシ。4阿り。5阿ぬ。6国瀬。7因れば。8阿るアリ、国つるアリ。9阿こそアリ。10一字阿ニヨリテ補フ。11阿ナシ。12国ナシ。13一字阿ニヨリテ補フ。14因考異き。15阿りし。16国う。17阿へアリ。18阿こゝ。19阿み。20因瀬、因考異み。21阿も。22阿る。23因にアリ。24因のアリ。

世の中は心うきものと思し餘りて、かく宣ふ、

　白波の眞砂を1すゝぐ田子の浦におくれてたぞも歎く舟人

2と宣ふ。左近中將、

　隙もなく浪かゝるてふ田子の浦に3寄する汝が名や形見にはせん

左衛門の佐、

　駿河なる浦ならねども白波はたゞごといふ名にも立ち歸りけり

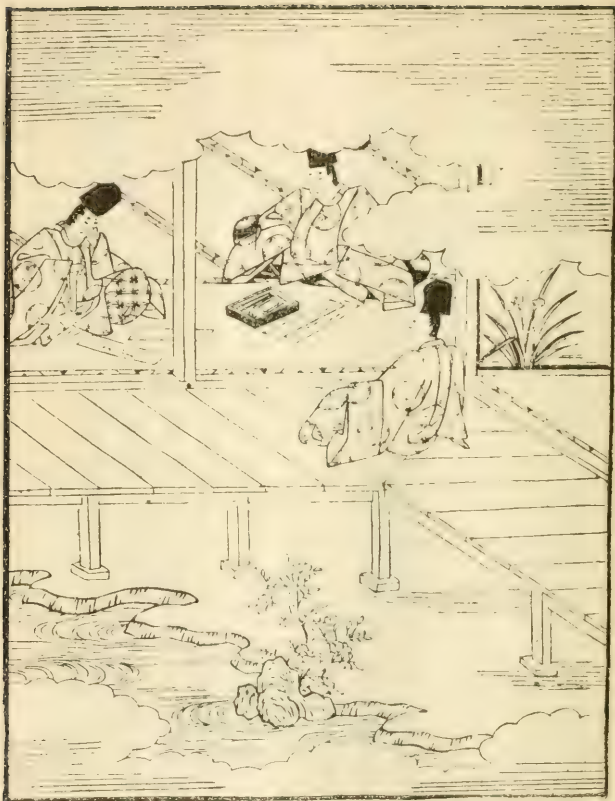
かく思ほし歎きつゝ經給ふほどに、かの一條の北4方思ほし歎く事劣らず、今5〳〵と待ちわたり給ふに、おとどおはしまさねば、御座をうち拂ひて臥し給ふに、御前の花薄の折れかゝりて招くを見給ひて、北の方、

　待つ人の袖かと見れば花薄身の秋風になびくなりけり

など宣ひわたるに、風涼しく覺ゆれば、大い殿6のかく聞え給へり。「7いや聞えじと思へど、8果てうき人9かといふめれば10と、聞えではえあらぬものなれば、たゞ今の風の怪しく心細ければとてなん、

　我が宿に時々吹きし秋風のいとゞあらし11になるが12あやし13さ」

校異　1 因考異そ。2 因三字ナシ。3 因うちよる波。4 因のアリ。5 囗やアリ。6 国に。7 国早、因いで。8 囗訪はで。9 囗は。10 因ナシ。11 因考異と。12 因わび。13 国き。

物も覺えぬ御[1]心に、

「秋來とも木草の色[2]」も變らずば風[3]のとゞまる花もありなん

なほのどかに思したれ」と聞え奉り給ふ。北[4]方、なほざりなる御心かな、なほいみじきものは女の身なり。[5]かう思ひ[6]かてられぬるにこそはあめれ、かく思ほさん人は、萬の事思ふともかひもあらじとて、

白露に色變りゆく秋[7]萩はたまく葛もかひなかりけり

とて居給へり。年頃おとゞの通ひ給ふ事七年ばかりありしに、一日に用ひ給ふ物數知らずありしほどに、こゝ[8]ちの年頃[9]を盡くしは[10]く、かぎりなく貧しくなるまゝに、あるは男につきて去り、宮仕へし[11]つゝ出でて去ぬ。みへしおかし[12]とゞの盛りに、なめて使ひにくしとて、人よりことに憎み給ひし下仕へなんまも[13]こときと言ひ[14]に留まりて、「つき[15]言ひてあらんものは。わ[16]すれへいつ我いだにつか[17]まつらず[18]は、誰かはあらん」とて仕うまつりける。殿に殘りたる物なし。かの俊蔭の主の奉り給へりける琴のみなん殘りたりける。それをぞ、この時の大將に[19]萬こゝに賣りてつかひける。

[叢詞]これ[20]一條殿のほろび給へるところ。

校異 1 [イ]心地。2 [イ]し。3 [国]に。4 [国]のアリ。5 [国]考異二字ナシ。6 [イ]果。7 [イ]風。8 [イ]ら。9 [玉]に。10 [イ]てゝ。11 はに。12 [イ]徳。13 [イ]二字ナシ。14 [国]しか。15 [イ]はアリ。16 [イ]ナシ。17 [イ]つてり。18 [国]ナシ。19 [イ]万石。20 [国]はアリ。

かくてこのおとゞ、いもひ精進をして經給ふほ1とり、山里の心細げなる2殿まうけ給ひてぞ住み給ひける。そのわたりは3へ阪本小野のわたり、音羽河近くて、瀧の音水の聲あはれに聞ゆる所なり。物思はぬ人だに4心細げなるわたりなり。まして、いみじき5心して6なん經給ひける7。おとゞ思すやう、我世の中に久しくさあるまじきを、せまほしきわざ我8世にしてんと思して、先づ故君の御爲に、一切經多寶の塔造らせ給ひて、供養し給ひけり。我が後のわざし給9ふ、忠こその爲にし給ふ。「この世にあらば息災となれ。亡きものならば彼の世の途ともなれ」とて、ありし時使ひし物、皆誦經にし給ふとて見給ふに、かの山へ入るとて、物書きつけし琴取り出でて見給ふに、書き付けたるものを見つけて、おとゞ驚き悶え給ひて、思ほす事かぎりなし。さて日々に誦經にして、10かひがひし11(12て、「もてならしゝ物を13や我が目には見じ」と宣ひて、佛造らせ給はんとて、萬の武士して、力人集まりて割るに、いさゝかなる瑕つかず。かねの上に露14かゝらんばかりなり。もてわづらひ給ふほどに、大空かきくらして、雨降り雷鳴りて、この琴を卷き15あげつ。かく大いなるわざをして、待ちわたり給ふほどに、忠こそを戀ひ死に隠れ給16ふ。)

校異 1 イどに。2 イ所。3 イ比叡。4 イのアリ、因考異物アリ。5 因心地。6 因考異二字ナシ。7 イにアリ。8 因がアリ。9 因ひ。10 イかい隠、因かい具。11 百三十八字イニヨリテ補フ。12 国ナシ。13 国ば、因ナシ。14 因のアリ。15 国取リ。16 イひぬ。

昭和四年十二月一日印刷　日本古典全集
昭和四年十二月十日發行　第三期【非賣品】

うつぼ物語
第一

編纂者　正宗敦夫

發行者　東京府北豐島郡長崎町一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
代表社員　長島東一

裝幀者　廣川松五郎

印刷者　東京府北豐島郡長崎町一六二
不二製版印刷所
高瀬淸吉

發行所　東京府北豐島郡長崎町一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二